

# 時報

第17号

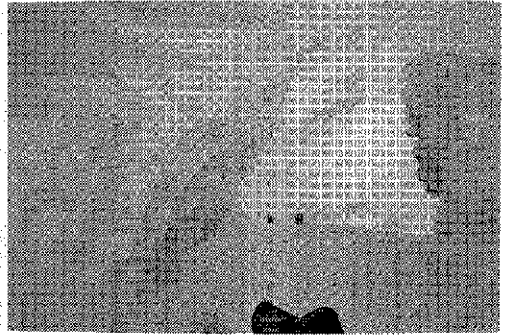
大阪大学山岳会



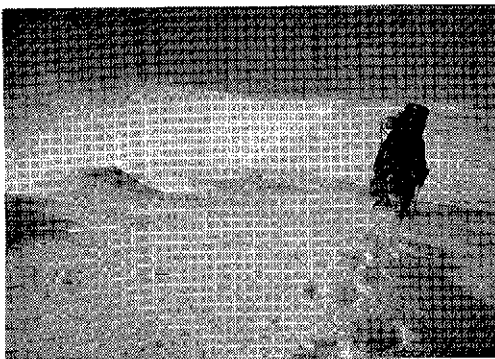
奥大日尾根より望む剣岳北方稜線



1979年度 夏山定着合宿  
源Ⅰ上部名古屋大ルート  
の核心部



1979年度 春山合宿  
奥大日岳稜線直下



1980年度 偵察山行  
魚沼三山中ノ岳直下



1980年度 冬山山行  
縦走隊毛勝山頂

## 巻頭言

——山岳部長に就任して——（昭和56年11月1日記）

工学部教授 山田朝治

前山岳部長恩地裕先生の御退任のあと、山岳部長をお引受けしてから間もなく三年になります。恩地先生から御依頼のお話をお受けした頃は、丁度工学部の評議員として多忙になりつつあったときだけに、本当に戸惑いを感じました。しかし、折角のお申し出をお断りすることもどうかと思い、何とかなるだろうとそのまますると部長に就任してしまった次第です。

何とかなるだろうとは、極めて無責任な話ですが、工学部には山岳部出身の教官が数名居ることだし、困ったときには恩師篠田軍治先生はじめ山岳会の先輩各位に相談すればよいと簡単に考えたからであります。事実、この三年間は、山岳部の諸活動に関しては監督がすべて采配を振るってくれますし、山岳部にとって重要な必要経費については先輩各位の御援助が得られましたし、時報も発刊する運びになり私の期待通りに何とかなってきました。

このまま有能な後継者が見つかるまで何とかなっていけば良いのですが、なかなか思うようにはならないこともあり、特に部員数が減少の傾向にあることは、私にとって一番頭の痛いことです。今春、新入部員の少ないことを心配して篠田先生に愚痴を申し上げたところ、以前にも少ないときがあったから、そう心配せんでもよいと慰めてくれました。しかし、その篠田先生は、徳永篤司氏よりの連絡で御承知のように今夏以来病床に臥されることになりました。あまりに突然のこと故、御家族の御心労も大変なものであったとお察し申し上げますが、私自身も非常に強いショックを受けました。

幸いにも少しずつ快方に向かっておられる御様子であるのは何よりですが、たゞ心配するだけで何のお世話も出来ずに心苦しく思っております。もちろん今までのように御心配をおかけするわけには参らず、今後の山岳部の組織の強

化や、諸活動の精神的支えともなるべき基金の少ないことなど気にかかることも多く、何となく気忙しくなってきました。

篠田先生の御快癒をお祈りしながら、あれこれ模索している昨今の私ですが、未だに明確な抱負を申し上げる段階に達しておらず、甚だ頼りない御挨拶になってしまいました。これからも先輩各位の物心両面にわたる強力な御支援を期待しておりますので、よろしくお願い申し上げます。

## 篠田会長の発病とその経過

徳永篤司

昨年の8月11日(火)の昼過ぎ、先生の奥様より電話があり先生が蜂に刺されて胸が痛いと言っているがどうしたら良いかと云って来られた。たいしたこともあるまいと「あり合わせの物で湿布でもしておいて下さい。夕方にもお伺いします。」と申し上げていると先生が電話口に立たれ、「どうも～、大丈夫です。有難う、ではまた。」と云って切られた。私はその直後ある医師会の会合に向ったが途中で不安を覚えて先生のお宅へ直行した。お宅に伺った途端、先生の容態の容易ならざることに驚かされた。リビングの床に座り込んでおられる先生は全く意識がなく、全身にひどい紅斑があり、特に顔面、下肢がひどく腫れ上っていた。脈もふれたし血圧も正常で失禁もなかったが、肺水腫様の呼吸困難があり、蜂毒によるアナフィラキシーと考えて直ちに救急車を呼んで酸素吸入をしながら池田市民病院へ急送した。救急室で約1時間、ステロイドホルモンの点滴、気管支切開の用意などを行っている間に応答が出始め、手足も動き、蜂に刺された局所も教えてもらったが、その左手首には何の変化も見られなかった。心配で居ても立っても居れないであろう奥様に小康状態を告げ、先生に座ってもらって病衣に着かえさせたが、両手足は何の不自由もなく、水も飲み平常の様子にもどっておられた。帰る時「明日になって元気になっても、私が迎えに来る迄は入院していて下さいよ。」と申し上げると「うん、わかった。有難う。」と答えておられた。その夜と翌朝の2回、受持医と話したが別に変った様子はない。余りに早くお伺いして退院の話になっても困ると考え、松久君と穴戸君に様子を話し、お伺いしてくれる様依頼した。

右上下肢の片麻痺と発語障碍が先生を襲ったのはその後であった。先ず久保田院長より脳溢血の症状ありとの連絡があり、見舞いに行った穴戸君からも同

様の報告があった。13日(木)夜は危険だということになり、脳外科の尾藤君に待機してもらい、息子さんの純男君にはその夜病室にいてもらった。

14日(金)昼過ぎ、尾藤君と2人で病室を訪れた時、先生の脳症状・意識障害は歴然としており、居合わせた宮本君、純男君と4人で相談の結果、尾藤君の厚生年金病院へ移すことに決めた。このまま池田市民病院に居てもらって悪くはないけれど、山岳会にこれだけの医師がいるのだから、だれか一人、直接先生の治療に当たらねば思い切った処置がとれないと考えたからであった。尾藤君がその最適任者であることは云うまでもなかった。厚生年金病院での診断は左内包部と右前頭葉の何れも小指頭大の脳栓塞・内頸動脈不全及び慢性気管支炎であり、手術適応の全くない条件の下で尾藤君の奮斗が始った。それ以後の経過については、多くの会員が見舞われ御覧になった通りである。現在、右足が少し動くかと思われる以外、発語、排尿などについても著しい進展はないが、しかし面会人の識別や私達の話の理解といったものの回復は長い目で見るとかなりよくなって来ている。何よりも心丈夫なのは、細見君が根気強く病室へ往診して入れ歯を治してくれて以来の先生の食事の取り方や、運動、発語練習などの病気に立ち向う意欲でやはり篠田先生だなあと思わせるものがある。云いたい事が云えない。思っている事が表現できない苦しさで闘う先生の闘病はしかし今始ったばかりかも知れないのである。先生がこの文章に目を通され、何時もの例の低い笑い声を出される様になる日の近いことを祈ってやまない。

## 1978年度をふり返って

森 保 知

我々がリーダー権を引き継いだのは冬山を終えて4年部員は活動から退き、3年部員4名、2年部員3名、1年部員3名という状況の下であった。3年部員で今後の方針を話し合った結果、冬の槍、穂高縦走を目標にこの1年間活動していく事を決めた。

我々が入部して以来、積雪期の対象としては剣岳が主であった為対象を変えたいという声が部内でも高かった為でもあるが、その為、来たる春山を剣岳の総仕上げとして宇奈月から剣岳縦走はぜひとも成功させたい気持ちは強かった。結果として原因はどうあろうと赤谷山で敗退してしまったのは非常に心残りであった。

5月から新人6名を迎えて穂高に入った。5月の岳沢定着合宿、夏山の瀬沢定着合宿、11月偵察と穂高主稜線の概念把握と下地は十分積んできたつもりである。そしていよいよ冬山、さして好天に恵まれたとも思えぬが初期の目標は達成する事が出来た。しかし冬の穂高は剣岳と違い積雪の少ない事、比較的好天である事、細い岩稜が主で小枝が必要な事、そして何よりも軽装でいかに早く進むかがポイントになる事を考えると、一時の対象と成り得ても長期の対象と成り得ない。じっくりと構えたい大学山岳部の対象としては不向きではないかという気もする。とにかく冬山を終えて3年生にリーダー権を渡した。彼等の活動方針にあらかじめ相談にのってやらなかった事は心にひっかかったままだった。

上述の通り我々の時は1年間の最終目標を最初に決めてその線に沿っていく方針だったが、最終目標に束縛され過ぎたかもしれない。当時山岳部をどの方向に持っていくか、リーダー層暗中模索の状態、明解な結論が出ないまま1つの解決方法として最終目標設定案が出されたわけで、これはあくまで山岳部としての一段階にすぎない。最終的に望ましい大学山岳部の姿というのはあり得ようが、それに近づくまでの一段階としてこのような方針によった事を理解してほしい。ただこのような方針によった場合はそれがその学年1年間で終わってしまい、次の学年から新たに対象を求めなければならないという、1回勝負になってしまい、後輩に残す所は少ないと思う。

最後に私事を許して頂ければ、人数の安定してきている昨今では大学山岳部の姿勢・方針をはっきりさせる必要がある。目標を限定するというのは実際我々がやってみて前述の通りであるがただ大学山岳部の利点を生かした活動を望みたい。社会的にも技術・精神的にも社会人山岳部とは比べられないが、また山岳同好会とも異なるが一方に社会人の山登りのスタイルがあり、一方では大学山岳部独特のスタイルがあってもよい。大学山岳部は十分な時間があり、十分重みのある活動をする余地はあると思う。ただ新人の育成という規制は受けるけれど人数が安定しておればそれは活動にさして影響は与えないと思う。とにかく我々が理想としていたのは冬。春山には全員で長期同じ対象に挑む泥臭い山行であった。今後の山岳部の活躍を期待したい。



## 1979年度をふり返って

金 谷 明

1972年～3年頃より他大学山岳部に追いつこうという諸先輩方の努力により、やっとここ2、3年1人前の部活動が行えるだけの人員構成になってきたと思う。ただそれに伴って大きな弊害が生じてきているのである。従来、山岳部というのは他のクラブと違い4年部員がリーダーとなってきた。我部においてもそれは特例を除き踏襲してきたわけであるが、学部学年も4年生である場合、著しく部活動に支障をきたす。その辺が今後の我クラブの課題かもしれない。私事ながら、私自身もリーダーでありながらアイゼン合宿・偵察山行等参加できずクラブに大変迷惑をかけてしまった。現在の人員構成は理想的とも思えるものであるが、メンバー全員が活動できてこそ理想的である。その意味で今年度の反省点としたい。

今年度の当初の目標は冬に後立山全山縦走という計画でスタートし、夏合宿も機能性を加味して目的山域に近いということで剣岳真砂沢に定着した。合宿前には毎年のことであるが、合宿に対しての意義をどうとらえるかでかなりの議論もしたが私自身の考えでもある雪山へのトレーニング＋岩登りというオールラウンドな山行を基本にして計画を立てた。合宿では遭難の救助などでかなり行程はくずれたが、それなりに意義のある山行だったと思う。最終目標の冬山であるが、文頭にあげたように上級生部員の日程の都合やらで全員が同じ山域に入らねばならなかった。全山縦走はあえなく中止となり、1年部員との兼ね合いから遠見尾根に対象を決めた。好天に恵まれたせいもあったが、ここ2～3年の冬山に比べてなにか物足りないもので終ってしまった。早く言えば大学山岳部らしからぬ対象であったとも言っておこう。やはり人の入らないトレースのない長大な尾根をラッセルしながらピークに立つ。これが私は本当の大学山岳部の姿だと信じている。何やら不完全燃焼のままに1980年に引きついでようである。

## 1980年度をふり返って

浅井利彦

大学の山岳部はその年々の部員構成によって、その1年の活動が左右されることが多い。つまり上下級生の技術面、精神面での能力の差が目標となる山域、ルートを規定してしまいがちである。

80年度の阪大山岳部をみると4年8名、3年6名、2年7名、1年6名の部員構成は夏・冬の主要山行の計画を立案する段階で常に考慮に入れられるべき問題であった。夏の定着合宿は冬山もその方面の山域をとということで剣岳となった。その活動には結果的に2年生の技術面、精神面の向上が見られた。しかしリーダー層は下級生のつきあいに忙殺された形で、いまひとつ上級生としての独自の成果が得られなかったことが合宿全体を淡白にしたようであった。さらに冬山はリーダーとなるべき4年生の絶対人数の不足から技術的に困難な山域を断念して次年度の活動を期待し、思いきって下級生の体力面、技術面の強化を狙って毛勝北方稜線を地域目標とした。実際近年にない豪雪に見舞われたが、それなりの成果が上げられたと思える。

今後も大学山岳部のジレンマとして新人の育成と上級生部員の満足の問題に悩まされるだろうが、最良の解決策を見出していくことも部全体の発展を促すこととも言えなくもないであろう。

# 目 次

## 1977年度(昭和52年度)活動記録

春山合宿	
赤谷山サポート隊	1
宇奈月～赤谷山縦走	2

## 1978年度(昭和53年度)活動記録

5月山行	
岳沢定着合宿	5
夏山定着合宿	
穂高	8
夏山縦走	
後立山縦走	16
南アルプス縦走	17
10月個人山行	
大台ヶ原堂倉谷	18
大台ヶ原東ノ川	19
中央アルプス縦走	20
11月偵察山行	
ブナ立尾根～檜ヶ岳	20
西穂主稜線偵察(1次)	22
西穂主稜線偵察(2次)	24
御岳アイゼン合宿	25
冬山合宿	
横尾尾根～檜ヶ岳	26
穂高主稜線縦走	27
春山合宿	
裏銀座コース	29

## 1979年度(昭和54年度)活動記録

5月山行	
白馬岳新歓山行	31
後立山偵察	31
剣岳ハツ峰	32

## 夏山定着合宿

剣岳(真砂)	34
--------	----

## 夏山縦走

立山～檜ヶ岳	40
南アルプス縦走	41
剣岳北方稜線	42
黒部川上ノ廊下	42

## 10月個人山行

白馬岳～親不知	44
八ヶ岳	45

## 11月偵察山行

剣御前デポ	45
後立山偵察	46
奥大日尾根偵察	47
雄山東尾根偵察	48

## 白馬大池アイゼン合宿

## 冬山合宿

遠見尾根～五竜	51
後立山縦走	52

## 春山合宿

雄山東尾根	58
奥大日尾根～剣岳・立山	54

## 1980年度(昭和55年度)活動記録

### 5月山行

岳沢新歓山行	57
剣尾根	59
北鎌尾根～岳沢	61
鍋岳～甲斐駒	62

## 夏山定着合宿

剣岳(真砂)	62
--------	----

## 夏山縦走

南アルプス全山縦走	70
-----------	----

越後三山～朝日岳縦走	71
後立山縦走	72
大雪山周辺	72
10月個人山行	
中央アルプス縦走	74
八ヶ岳縦走	74
白山縦走	74
後立山縦走	76
奥秩父縦走	76
11月偵察山行	
毛勝山西北尾根偵察	77
駒ヶ岳～ウダの頭偵察	78
天狗尾根第1次偵察	79
天狗尾根第2次偵察	80
後立山デボ	81
魚沼三山偵察山行	82
木曾駒アイゼン合宿	82
冬山合宿	
毛勝北方稜線	84
毛勝西北尾根	85
春山合宿	
表銀座縦走	87
天狗尾根～蓮華岳	88

# 1977年度（昭和52年度）活動記録

## 春山合宿

### 春山を終えて

前年度迄の総仕上げとして宇奈月から剣岳本峰縦走と、1年生の為の赤谷山から毛勝山縦走を考えていたのであるが、出発直前の教養部スト解除、進級試験となった為、3年生のみによる縦走隊と下級生による赤谷山デポ隊とに計画変更した。この為、志気に欠ける所があったのは残念である。デポ隊は、赤谷山デポ完了後、直ちに下山したが、1・2年生にとっては満足のいく山行ではなかったと思う。しかしこれも山岳部の登り方の1つであり、縦走隊の成否を左右する事を理解して、来る5月山行には上級生として頑張してほしい。

縦走隊は計画通り7日で赤谷山に至ったものの続く5日間の風雪の為、積雪が著しくて最終下山日迄に剣本峰を越えて下山する自信がなく、敗退せざるをえなかった。ただ赤谷山山頂で判断したのであるが、もう1日でも進んで様子を見てから判断すべきであったことを反省している。しかし私達リーダー層の最初の山行として学ぶ所は大きかったと思う。最近の傾向として目標達成の意欲が弱くなってきているが、もっと貪欲さをもって不思議ではない。これに関連して反省会で高橋OBから指摘された目標達成の為には、どんな悪天にも耐えうる計画をたてるか或いは悪天なら諦めるかという計画立案段階の問題も、今後並行して考えていきたい。

(記 森)

### 赤谷山 サポート隊

期 間 3月4日～3月8日

参加者 山口(L)、広田、浅井、村田、西尾、松尾(OB)

3月4日 ● 伊折(8:00)ー馬場島(13:00)

上市駅よりタクシーで伊折へ。伊折には一足先に東海大パーティーがおり、ほぼ同時に出発するが、この頃より雨が本格的に降り出す。最初の小休止でワカンをつける。東海大と抜きつ抜かれつ、短いトンネルを、そして長いトンネルを抜けると馬場島発電所である。この頃から雨具を着ていても内側はべっとりと濡れ全員バテ気味で最後の1ピッチでは東海大に大いに離される。馬場島に着き富山県警詰所でお茶をいただいたときはやっと一心地がついた。

3月5日 ◎ 馬場島(6:05)ー赤谷尾根取り付き(8:15)ー1,300m(10:30)ー取り付き(11:25)ー1,300m(13:40)

昨夜のうちに雨も止み、白萩川沿いに橋を渡って、2番目の堰堤付近の取り付きに至る。ここからはダブルである。積雪はそれほどでもなく、せいぜい膝までのラッセルである。天幕一張張れる所に荷をデポした後、自らつけたトレースを壊さぬよう取り付きに下り再び登り直す。

3月6日 ○ 1,300m出発(7:00)ー1,900m(デポ)(10:00)ー1,300m(11:10)ー1,900m(14:50)

朝から快晴で右手に剣の稜線を見ながら登り始める。最初は急登で樹林を縫うようにして行く。1,500mを過ぎるところから樹林もまばらとなり、気分のよい雪稜となる。日射しもきつく汗をかくくらい暑い。いくつかのコブを登りきって赤谷山を見通す広い平地にデポをする。すぐに引き返して残りの荷を背負い再び登り始めるが、さすがに2度目の登りはきつい。

3月7日 ○ 1,900m C.S.出発(7:10)ー頂上直下のコル(8:00)ー赤谷山山頂(10:10)ー山頂発(12:40)ーC.S.(15:40)

この日も朝から曇1つなく頂上を踏むのが楽しみであった。縦走隊の為の装備、食料をサブザックに詰め込んでC.Sを離れる。ガラガラした雪稜はよくクラストしており、アイゼンがよく効いた。頂上直下のコルより最初の急登はザ

イルを40m2ピッチ張り、その後緩斜面をトラバース気味に登る。直登する所からザイルを、40m1ピッチ張り、そしてハイマツ、岩の露出した所を登って頂上に立つ。頂上はだだっ広かった。荷をデボした後、1年生は稜線を少し下った辺りに縦走隊の為に雪洞を掘る。出来上るのに2時間ほどかかってしまった。この間のトランシーバー交信によると、縦走隊もほぼ順調に進んでいるらしい。帰りはザイルべた張りで雪もグサグサで雪崩を恐れる。

3月8日 ① 1,900m発(6:30)ー取り付き(7:50)ー馬場島(8:25)ー伊折(12:30)

いつもの下山ペースで、1ピッチで1,300m、次の1ピッチで取り付きを過ぎて馬場島まで行く。天気の方はやや薄雲が出てこれからの天候を暗示しているようだった。(記 浅井)

#### 宇奈月～赤谷山縦走

期間 3月3日～3月16日

参加者 森(L)、岡部(祐)、渡辺、重田

3月3日 ② 宇奈月出発(9:05)ーリフト終点(10:25)ー避難小屋(14:05)  
618mのボコは林道沿いに進み、次のコルから稜線を行く。思っていたよりラッセルは楽である。早いペースで単調に避難小屋に至る。富山の灯が印象的であった。

3月4日 ③のち④ 出発(6:10)ー1,300m(6:50)ー1,400m(7:35)ー1,450m(8:20)ー1,560m稜線に出る(10:00)ー1,750m(11:40)ー雪洞を掘るが雪が硬くて失敗  
天幕設営(13:40)

今日は低気圧がもろに通過。装備を完全にしていないので辛い。ラッセルはせいぜいひざまでなので楽である。テスト疲れか皆快調ではなかった。ルートとしては広い尾根なのでガスにまかれ、ルートファインディングに苦勞する。

3月5日 ⑤ 出発(6:45)ー僧ヶ

岳(7:45)ガスが濃いのでルートを探す。ワカンをはく。一駒ヶ岳手前の岩場

(10:45)ー駒ヶ岳(12:00)駒からの下り口を誤まるーコル着(13:55)移動高の前面。1,900mに雲海が1日中あり雲海下ではガスが濃くルートファインディングに手こずる。一ヶ所岩場の所があったが上級生パーティーということでフィックスなしで乗越す。雪質は前2日に比べ悪くなったがラッセルというほどのことはない。ただクラストの上の新雪が10cmくらい積ったので気を使った。

3月6日 ⑥ 出発(6:15)ー1コ目のボコの下(6:55)ー2コ目のボコの上(7:50)ー3.4のコル(8:45)ー滝倉山(16:00)この間ザイルをかなり使う。ー雪洞完成(18:20)

移動高に被われ快晴。滝倉山手前で雪庇、キノコ雪でヤバイのでザイルをかなり出し時間を食う。滝倉山頂上にはあてにしていた天幕場がなく、斜面に雪洞を掘る。しかし雪は硬く、作業は遅々として進まず、苦勞した割には出来ばえは満足できるものではなかった。

3月7日 ⑦ 出発(7:30)ー1,900m(8:25)ーウドの頭手前のボコ(10:25)ザイル80mフィックスウドの頭へ登る尾根に取り付く(12:30)この間ボコを下るのに安全な方法がないので森が何度もザイルを付けて偵察する。懸垂するにはザイルが不足(60～70m)ボコから西に派生する尾根から谷に懸垂(40m)で下り谷をトラバースしてウドの頭への尾根に取り付くことに決定する。

ー40mフィックス(12:50)ーウドの頭(12:25)この間フィックス80m

終日快晴。やっと前半の核心部を越える。今日は照り返しがきつく一番日焼けした。ウドの頭の登りは急な上にブッシュの間を通らねばならなかったのでザックが邪魔になって仕方なかった。

3月8日 ⑧ 出発(5:50)ーコルの手前(7:25)懸垂1P20mー西谷の頭(8:25)ー2,100m(10:30)ー80

mフィックス(11:30)ー毛勝頂上(16:00)

ウドの頭の下りは急でザイルは出さなかったがかなりヤバイ。コルから西谷の頭まではラッセルが膝ぐらいあったが、岡部が頑張って全てトップで通してくれた。毛勝への登りは雪崩を懸念していたのであるが、意に反してクラストしておりキックステップでは歯が立たずカッティングを強いられた。毛勝上部は傾斜40度位の氷雪の斜面で、トップが落ちたら止める自信が無かったが、落ちないことを祈って、岡部80m、森60m、渡辺80mのフィックスで毛勝。毛勝頂上では夕焼けがきれいだったが、剣は未だ遠しの感があつた。

3月9日①のち◎出発(5:50)ー釜谷手前のコル(6:20)ー猫又・釜谷のコル(7:40)ー猫又山頂(8:25)ーブナグラ乗越(12:35)懸垂1Pー赤谷山(15:40)天気図を取るためパーティーを二つに分け、岡部・渡辺は先に出発。重田・森着(16:00)

朝から悪天の前兆が見え、何としても赤谷山の雪洞で、停滞しよう張り切る。終日快調なペースだった。無論ラッセルがなく、ブナグラへの下りもガスがかかっておらず視界良好であったという好条件に恵まれたことではあるが。しかも一番問題視していたブナグラへの最後の100mの下りも南に面している為か傾斜が急すぎる為か雪がついておらず、フィックスがいらなかったという僥幸に恵まれたという点を無視には考えられない。ー昨日トランシーバーで、サポート隊が教えてくれた通りの場所にデポと雪洞を確認し、感謝しつつ雪洞に入る。

3月10日◎のち◎停滞

二つ玉低気圧が通過予定なので昨日のうちから半ば停滞は決定していた。寝る前に雪洞の入り口をラッセルしておき夜中に1回ラッセルすることにする。

3月11日◎起床(4:00)停滞 積雪頭位

雪洞の入口が吹き溜って30分で埋まるので雪洞ラッセルに苦む。天気予報は明日も冬型、明後日も冬型でその後には気圧の谷が近づいていて当分荒れ模様が続くという。13時頃、雪洞の入口が下って来たのに気付く崩壊の危険を感じ赤谷山頂に天幕を張ることに決定。天幕のほう雪洞よりラッセル回数が少なく幾分ましである。

3月12日◎起床(4:00)停滞

瞬時の晴れ間から見た剣はニードルまで雪が付着し、冬よりも積雪が多い事が判明、頭までのラッセルを覚悟しなければならないということで縦走を続けることは事実上不可能。

3月13日◎起床(4:00)停滞

昨夜は富山で1晩の降雪量、气象台開設以来第3位を記録。ー40℃の寒気が輪島沖に居座る。3時間に1回のテントラッセル。積雪が天幕と同じ高さに達したので移動。

3月14日◎のち◎停滞

(0:30)昨日と同じ理由で天幕移動、完了(2:30)、(5:15)昨日と同じ理由で天幕移動、完了(8:00)

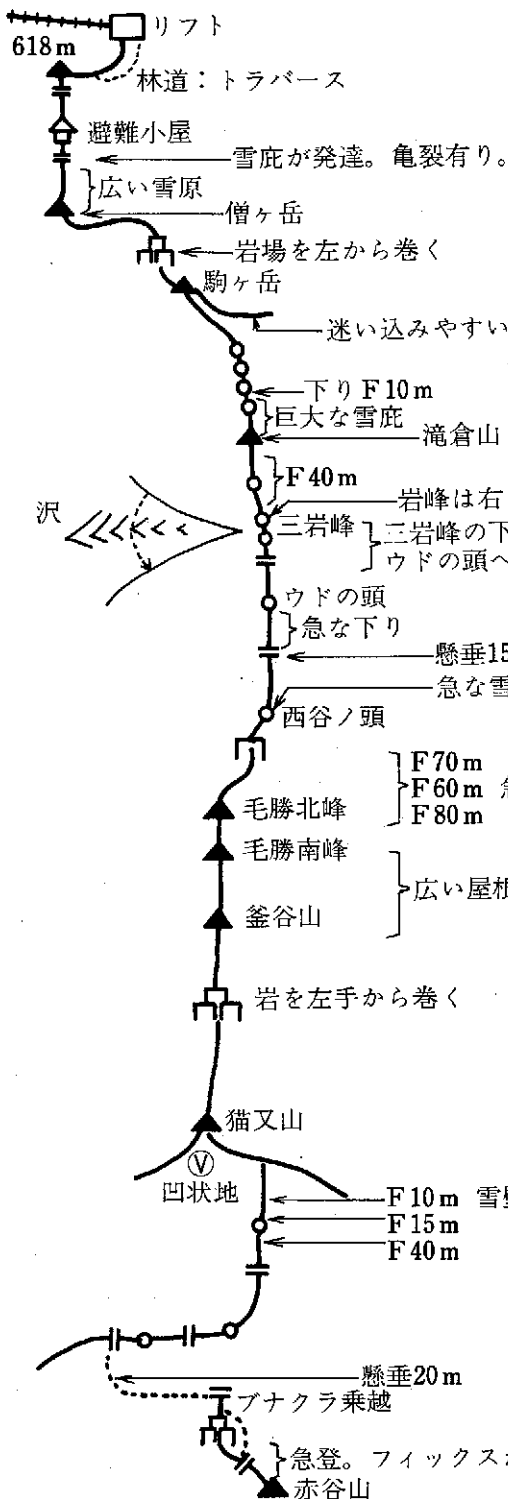
24時間のうちで、やむなく移動3回。積雪は2mを軽く越えた。昼から雪が止み、強風で赤谷山はクラストする。森はこれなら剣へ行けるかもと言い出すが、残り11日で剣を越えられるとは思えず、明日は下山と決定。

3月15日◎のち◎出発(8:30)ー2,030m(9:50)ー1,800m(13:50)ルートを誤り森・岡部がルートを捜す。ー渡辺・重田1,650m着(15:30)岡部・森1,650m着(16:00)

様子を見てるうちにガスが切れ始めたので、赤谷尾根を下降する。上部だけクラストしていて2,030mまでの急傾斜では表面は新雪、中はクラストの最悪の雪の状態。2,030mからは腰から胸、頭のラッセル。チョーセンボ



ツカをする。



3月16日㊦のち㊧出発(5:25) - 1,563  
m手前(6:20) - 取り付き(9:30) - 馬  
場島(10:40)

今日中に何としても下山と早立ちする。表面  
だけクラストして足が上げにくく昨日よりつら  
い。3P目で金沢医大のパーティに会う。入山  
以来、初めて仲間以外の人を見た。後はただや  
みくもに下った。

(記 渡辺)

西側へ寄り過ぎないこと

ブナクラへの下りは、1番右手の  
岩を巻くように下る。

1978年度(昭和53年度)活動記録

78年度 現 役 部 員

C · L	森 保 知	工 建	4 (4)
	重 田 邦 男	工 応 化	4 (4)
	岡 部 祐 二	工 冶	4 (4)
	渡 辺 治 郎	法	4 (4)
	岡 部 友 三 郎	工 船	3 (3)
S · L 主 務	金 谷 明	工 土	3 (3)
	広 田 雄 彦	経	3 (3)
	浅 井 利 彦	基 制	2 (2)
	西 尾 良 司	工 溶	2 (2)
	村 田 正 弘	工 酵	2 (2)
	奥 山 宏 臣	医	1 (1)
	小 松 二 郎	工 土	1 (1)
	草 尾 寛	工 通	2 (1)
	科 野 昌 蔵	人	1 (1)
	長 谷 川 雅 一	基 生	1 (1)
	本 園 孝	文	3 (1)

## 1978年度（昭和53年度）活動記録

## ' 7 8 年 度 現 役 部 員

C · L	森 保 知	工 建 4 ( 4 )
	重 田 邦 男	工 応 化 4 ( 4 )
	岡 部 祐 二	工 冶 4 ( 4 )
	渡 辺 治 郎	法 4 ( 4 )
	岡 部 友 三 郎	工 船 3 ( 3 )
S · L 主 務	金 谷 明	工 土 3 ( 3 )
	広 田 雄 彦	経 3 ( 3 )
	浅 井 利 彦	基 制 2 ( 2 )
	西 尾 良 司	工 溶 2 ( 2 )
	村 田 正 弘	工 酵 2 ( 2 )
	奥 山 宏 臣	医 1 ( 1 )
	小 松 二 郎	工 土 1 ( 1 )
	草 尾 寛	工 通 2 ( 1 )
	科 野 昌 蔵	人 1 ( 1 )
	長 谷 川 雅 一	基 生 1 ( 1 )
	本 園 孝	文 3 ( 1 )

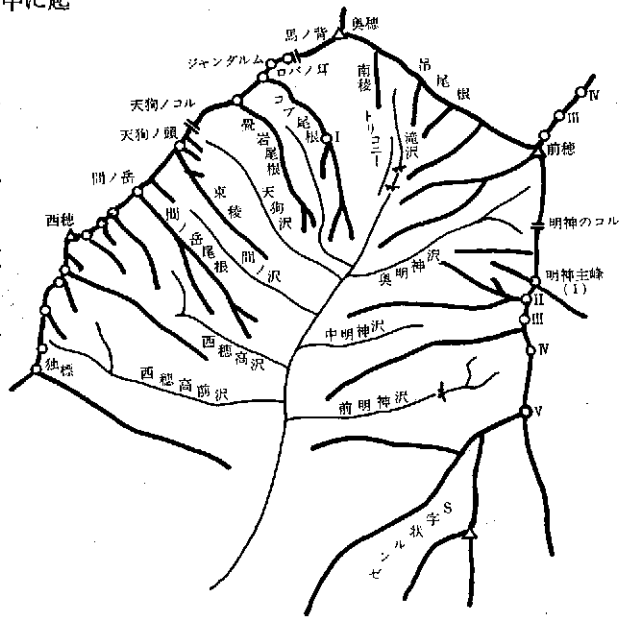
# 5 月 山 行

## 5月山行を終えて

新人歓迎と、冬山偵察を兼ね、憧れの穂高、岳沢にベースをおいて、周辺の稜線をトレースした。岳沢から最も容易に稜線に出て、何れかのピークを踏もうとすると、沢を詰めるのが良いが、天狗沢以外いずれも最後の詰めが急で、また稜線上を進むことは考えられず、新人は夏道通しの独標アタックと徳本峠遠足とした。独標もピークは踏めなかったもので、いささか不満ではなかったかと思う。一方岳沢は、上級生にとっては、格好の所で十分、岩と雪が楽しめたのではないかと思う。新歓よりも上級生に重点をおいた山行になってしまったが、新歓山行は従来通り別パーティとして重視すべきであったと反省している。また今後も、定着形式にするのは、疑問の残る所で、実際にやってみて5月山行は、快晴の下、縦走形式の方が望ましいように思える。また2日目の滑落停止訓練中に起きた事故の為、岡部(友)が岳沢ベースにずっといたものの、活動不能であったのは、CLの指導不足で、未熟さを痛切に感じている。以後この教訓を生かし、上級生部員共々、気合を入れたいと反省している。

最後に、この偵察にみる限り冬の西穂から槍ヶ岳は、これまで対象としていた剣岳とは違って、やせた岩稜をいかに早く進むかにかかってくると思われる。

(記 森)



岳沢定着合宿

期 間 4月30～5月5日

参加者 森(L)、岡部(祐)、渡辺、重田、  
金谷、岡部(友)、広田、浅井、西尾、  
村田、本園、小松、草尾、奥山、長谷  
川、科野、木嶋(OB)

4月30日 ●のち◎ 上高地出発(9:10)  
一岳沢入り口(9:30)一西穂沢出合(10  
:45)一天狗沢出合BC(12:30)

5月1日 ① 雪上訓練(6:20～12:  
30), (14:00～15:50)

12:30頃、滑落停止訓練中、岡部(友)  
と新人が接触し、左目上を負傷の為、上高地へ  
岡部(祐)と降りる。午後より新人を除いて雪  
上訓練を再開するが、岡部とのトランシーバ連  
絡がとれない為、渡辺、金谷が迎えに下り、  
18:40全員帰幕する。事なきを得たもの  
のあやうい所であった。以後気をひきしめる。

(記 森)

5月2日 ◎

●雪上訓練 参加者 岡部(祐)、重田、新人

●ジャンダルム 参加者 渡辺、西尾

BC出発(5:40)一天狗の科尔(8:10)  
一壘岩の頭(10:00)一ジャンダルム(  
10:50)一天狗の科尔(13:00)一  
BC(13:40)

●明神主稜 参加者 森、浅井

BC出発(5:40)一IV・Vの科尔(9  
:20)一III・IVの科尔(11:00)一  
II峰(11:30)一I峰(12:15)一  
奥明神の科尔(13:05)一BC(14:  
30)

中明神沢の雪はやや堅く、キックステップで  
登る。風が割合に強く、陽も射さない為寒い。  
斜面もだんだんと急になり、上部草付きに出た所  
で、アイゼンを付ける。IV・Vの科尔に出た  
後、休憩するが、風が強いのでツェルトをかぶ

る。III峰は巻いて通過。II峰の下りは2ピッチ  
の懸垂。I峰で写真を撮り、奥明神の科尔へ。  
(記 浅井)

●主稜線偵察 参加者 金谷、広田

BC出発(5:55)一天狗の科尔(8:  
10)一コブの頭(10:20)一奥穂(  
13:05)一奥明神沢上部(15:10)  
一BC(16:45)

(詳細は11月偵察山行を参照)

5月3日 ①

●西穂高独標 参加者 森、重田、広田、浅  
井、西尾、新人、木嶋(OB)

BC出発(5:15)一西穂登山口(6:  
40)一西穂山荘(10:00)一独標手前  
の科尔(11:00)一カモシカ沢一BC(  
15:30)

●雪上訓練 : 本日より村田入山で渡辺と行う。

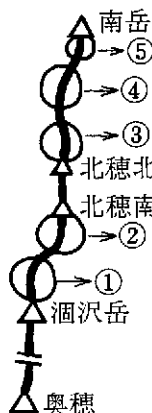
●大切戸偵察(～5/4 BS横尾)

参加者 岡部(祐)、金谷

BC出発(5:15)一奥穂南稜取り付き(6:  
20)一奥穂(9:15)一北穂小屋(12  
:40)一大切戸最低鞍部(14:30)一  
南岳避難小屋(16:00)一横尾尾根下降  
口(16:20)一横尾(18:40)

雲の動きから今夜半には雨が降るのではない  
かと思われたため、何とか横尾でピバークしよ  
うと頑張る。上部は例年より、かなり雪が多く  
冬の偵察にはよかったと思われる。ピバークで  
はツェルトがつぶれており、寒い思いをさせら  
れた。

5月4日 出発(8:30)一徳沢(9:  
30)一上高地(11:30)一BC(14  
:00)



大切戸偵察報告

① 涸沢岳のピークをすぎて  
北へ少し進むと、スッパリ  
切れおちている。涸沢側へ懸  
垂30m。飛驒側へまわりこ  
み、ザイル6ピッチで科尔へ  
降り立つ。

② コルから北穂への登りは

ほぼ飛騨側を通り、ザイルを頻繁に出す。南峰を乗越すあたり、要注意。南峰を乗りこしてから濁沢側に進む。

③ 北穂小屋直下からおおよそ200mフィックスが必要（急な雪壁）。下りきった所から西へ直角に進路を変える。このあたりもザイルは出しっぱなしである。西へ進んだ後、真北に向かって下る。岩稜と雪壁のミックスしたいやな下りになると思われる。最低鞍部辺りに注意。

④ キレット内は多少ザイルを出すが必要だが総じて問題はない。

⑤ 南岳への登りは夏のハシゴが出ている。ハシゴを登った後、ルンゼ状を詰め、上部で右の雪壁を登り切ると南岳の小屋である。（記 金谷）

5月4日 ⊗ のち①

●奥穂南稜 参加者 重田、西尾

BC出発(8:30)－南稜の取り付き(9:10)－Ⅰ峰基部(11:10)－奥穂高岳(13:50)－前穂高岳(15:50)－BC(16:30)

取り付きは末端から右に少し廻り込んだ雪壁である。トリコニーまで所々ハイ松の出た急な雪壁を登る。トリコニー－Ⅰ峰は1ピッチ、奥穂側を巻いた後、直上してⅠ、Ⅱのコルに出る。Ⅱ峰はチムニーを登り、岳沢側のフェースを登ってピークに出る。Ⅲ峰は奥穂側をトラバースする。急な雪壁が続き、1つ岩稜を越えると傾斜が緩くなり、左へトラバースして吊り尾根に出る。トレースをたどって前穂に登り、奥明神沢をシリセードでBCへ。（記 西尾）

●間ノ岳尾根 参加者 森、村田

BC出発(8:30)－取り付き(9:20)－間ノ岳(15:00)－西穂高沢右俣－BC(16:20)

朝のうちガスの為、様子をみて出発する。間ノ沢をトラバースして、末端で二分している間ノ岳尾根の真中の沢に取り付くが、急な雪壁で完全に蹴込めないで、足首がおかしくなる。尾根に出たからは、雪が腐り出し、思わぬラッセルを強いられる。上部岩が所々頭を出しておりそこからクレバースが大きく口をあけていて、今

にも崩れそうで気持ちが悪い。ザイルを出したわけでもなく、担々とした尾根であったが、頂上に着いたのは正午をかなり過ぎていた。上部は急だが、西穂高沢をBC迄、走り降りる。

（記 村田）

●コブ尾根 参加者 渡辺、浅井、木嶋(OB)

BC出発(8:45)－コブ沢出合(9:15)－コブ尾根に出る(10:15)－Ⅱ峰(12:30)－コブの頭(13:55)－天狗のコル(14:45)－BC(15:20)

昨夜の新雪のため、ひざまでもぐる。コブ沢を少し入ったところから尾根に向かってルンゼが出ており、それを登る。コブ尾根に出てしばらく行くと20mほどスッパリ切れており、緊張する。ここから奥穂南稜パーティーが見える。Ⅱ峰へは簡単な岩登り1ピッチで、Ⅱ峰の下りは懸垂1ピッチ。先行パーティーに導かれ、コブの頭へ向かう。斜面はかなりクラストしており、トレースに助けられて早く到着する。

（記 浅井）

5月5日 ⊙

●徳本峠遠足

参加者 重田、金谷、浅井、新人

BC出発(5:40)－白沢出合(7:30)－徳本峠(9:25)－岳沢入口(12:40)－BC(14:10)

●奥穂南稜 参加者 森、渡辺、村田

BC出発(5:50)－取り付き(6:50)－奥穂(11:15)－天狗のコル(14:40)－BC(15:30)

●壘岩尾根

参加者 岡部(祐)、広田、西尾

BC出発(5:45)－取り付き(6:30)－主稜線(8:40)－西穂(11:15)－BC(12:10)

コブ沢をしばらく登り、ルンゼより壘岩尾根へ直上する。2ピッチゆるい雪稜を登ると岩峰に着く。正面の凹角を登る事もできるが、やめて右へ1ピッチトラバースし、コンテでしばらく登ると稜線に出る。広田のアイゼンがこわ



れたので、岡部、西尾で西穂へ向かう。西穂からは、西穂高沢左俣をシリセードで下り、BCにもどる。(記 西尾)

5月6日 ◎ 岳沢BC出発(8:05)  
一上高地下山(9:20)

## 夏山定着合宿

穂高周辺 BC横尾本谷～涸沢

期間 7月14日～7月25日

参加者 渡辺(L)、岡部(祐)、重田、森、金谷、広田、岡部(友)、浅井、西尾、村田、奥山、草尾、本園、長谷川、科野、小松、住田(OB)、宮本(OB)

### 夏山を終えて

定着合宿では、森の代理として渡辺がリーダーシップをとらせてもらった。その代理権の範囲は山行上の全てに関する包括的なものであったと理解している。初期計画の変更も幾つかあったが、臨気店変の処置のつもりであって、ただ緊急性があったかどうかは疑問である。その点は反省したい。定着は、機能性よりも山の雰囲気に関することを重視して横尾本谷出合付近にBCを設けた。涸沢までは1時間足らずで、滝谷、前穂の登攀には、さして支障はないと思ったが、結果は、後述の通りで、BCの選択の誤りを痛感した。活動は、1年生の各自1本の岩登りと上級生の屏風岩を主軸に、赤沢山から滝谷、前穂と登攀し、一応の成果はあげたと確信している。この成果は、諸先輩の築いた土台の上に、クラブ員全員の協力によって得られたものであるだけに、一人一人謙虚にこの喜びをわかちあいたい。(記 渡辺)

### 行動概要

7月14日 ① 上高地(8:40)一徳沢(11:15)一横尾(13:05)

横尾に着いた後、初めての屏風岩挑戦の為、森、村田で取り付きを偵察する。川沿いに1ルンゼ出合を捜しながら進むが確認できず、横尾本谷橋に達してしまう。これより屏風岩に続くガレを詰め、基部に達するが、正規の横尾岩小屋対岸の1ルンゼを詰めた方がアプローチとして確かなようだ。(13:25～16:30)(記 村田)

7月15日 ○ 横尾(6:00)一横尾本谷橋(8:45)一横尾本谷BC(10:35)一デポ回収(12:00～14:00)

森、村田が先発し(5:00)、横尾本谷中ベース適地を捜す。涸沢と横尾本谷出合より少し入った所に最適とは言えぬがテント三・四張、張れる砂地を見つけBCとする。本谷橋で本隊と合流しBCまでダブルボッカを行うが、沢左岸沿いのBCまでの道は所々雪渓が現われ重荷の身にはきつい。(記 村田)

7月16日 ① 雪上訓練～北尾根下半遠足

BC(5:40)一涸沢(7:00)一雪上訓練(8:00～10:30)一V・ⅥのCOL(11:05)一Ⅶ峰(14:35)一BC(16:30)

左俣偵察の広田、岡部(友)を除き、V・ⅥのCOL付近で雪上訓練をした後、北尾根Ⅶ峰を経てBCに帰る。昼近いためか、雪質が悪く、キックステップはもの足りない。本日、岡部(祐)重田、住田(OB)、宮本(OB)が入山するが、森、宮本は明日の赤沢山登攀に備え、槍沢にてピバークとする。(記 科野)

<横尾本谷左俣偵察>は登攀、ピバークの記録を参照

7月17日 ①のち◎

<北穂東稜～奥穂高岳> BC(5:10)一北穂沢より稜線に出る(7:40)一北穂(9:40)一奥穂(12:30)一BC(15:00)

<キレット> BC(5:20)一左俣・右俣

<個人行動表>

参加者	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
森	入山	雪訓	赤沢山			下山						
岡部(祐)		入山	キレット	ボツ	雪訓	ドーム中央稜	T <sub>1</sub> フランク	T.K	P <sub>2</sub> ジェーブル	右岩稜	下山	
重田			四峰正面		滝谷ビバーク	北穂東稜	下山					
渡辺	入山	雪上訓練	北穂東稜	カ	雪訓	ドーム中央稜	T <sub>1</sub> フランク	T.K	P <sub>2</sub> ジェーブル	右岩稜	下	山
金谷			滝谷1尾根		雪訓	屏風岩	T.K	北尾根ビバーク	ドーム中央稜			
岡部(友)			1尾根	雪訓	屏風岩	T.K	槍ヶ岳ビバーク	ドーム中央稜				
広田			西穂ビバーク	T.K	北尾根	ツルム正面	雪訓	屏風岩	T.K			
西尾			北穂東稜	ボツカ	滝谷ビバーク～ドーム中央稜	屏風岩	雪訓	T.K	北尾根			
浅井			四峰正面		下山							
村田			西穂ビバーク	北穂東稜	北山稜	ツルム正面	雪訓	T.K	ドーム中央稜			
奥山			北穂東稜	ボツカ	雪訓	T.K	T <sub>1</sub> フランク	槍ヶ岳ビバーク	T.K	下		
草尾			T.K		北穂東稜	北山稜～ドーム中央稜	T.K	北尾根ビバーク	T.K			
本園			西穂ビバーク	T.K	T.K	T <sub>1</sub> フランク	槍ヶ岳ビバーク	T.K				
長谷川	西穂ビバーク	雪訓	北山稜	北尾根	雪訓	T.K	ドーム中央稜					
科野	キレット	ボツカ	滝谷ビバーク～ドーム中央線	T.K	雪訓	T.K	北尾根	山				
小松	キレット		雪訓	北尾根	北穂東稜	槍ヶ岳ビバーク	T.K					
住田(OB)	入山	四峰正面	北穂東稜	北尾根	屏風岩	下山						
宮本(OB)		赤沢山	雪訓	北尾根	北穂東稜	T.K	屏風岩	T.K	下山			

の出合(5:35)ー横尾尾根最低のコル C(8:45)  
 (7:45)ー南岳(9:15)ー北穂(12:45)ーBC(17:05)  
 <赤沢山クラックルート>、<前穂四峰正面>、  
 <滝谷1尾根>、<西穂ビバーク>は登攀、ビバークの記録を参照。  
 7月18日 ①  
 ベースを溜沢へ移す。横尾本谷(6:50)ー溜沢(12:35)  
 7月19日 ②  
 <北穂東稜> BC(4:20)ー北穂(7:50)ーBC(9:30)  
 <雪上訓練> BC(6:10)ーⅢ・Ⅳのコル(7:20)雪上訓練～(8:10)ーB  
 <北山稜> BC(4:40)ー北穂の天場(6:10)ー北山稜(7:35)ーザイル3ピッチー北穂(10:10)ーBC(11:20)<ドーム中央稜> 北穂(10:25)ー取り付き(11:20)ー終了(15:30)ーBC(16:40)  
 <北尾根> BC(4:30)ーⅤ・Ⅵのコル(5:20)ー前穂(8:40)ー奥穂(9:35)ーBC(10:20)  
 <屏風岩東壁青白ハンク鵬翔ルート>は登攀、ビバークの記録を参照。

7月21日 ○のち●

<北尾根> BC(5:30)-前穂(8:00)-奥穂(9:30)-BC(11:10)  
<北穂東稜> BC(7:00)-北穂(10:25)-濁沢岳(12:45)-BC(14:30)

<屏風岩東壁雲稜ルート> <ジャンダムT<sub>1</sub>フランケ> <滝谷ツルム正面壁> は登攀記録を参照

7月22日 ◎のち●

<雪上訓練> BC(11:35)-N峰.V峰間の雪溪(12:05)-BC(13:10)

<北尾根ビバーク> <槍ヶ岳ビバーク> は登攀・ビバークの記録を参照

7月23日 ①

<P<sub>2</sub>ジェードル> <屏風岩東稜> は登攀及びビバークの記録を参照

7月24日 ①

<北尾根~明神> BC(4:35)-前穂(7:30)-明神I峰(8:30)-奥穂(10:55)-BC(12:00)

<ドーム中央稜> BC(4:40)-取り付け(8:45)-終了(11:40)-BC(13:25)

<右岩稜古川ルート> は登攀及びビバークの記録を参照

7月25日 ①

BC(7:20)-上高地(13:15)

### (登攀及びビバークの記録)

#### 横尾本谷左俣

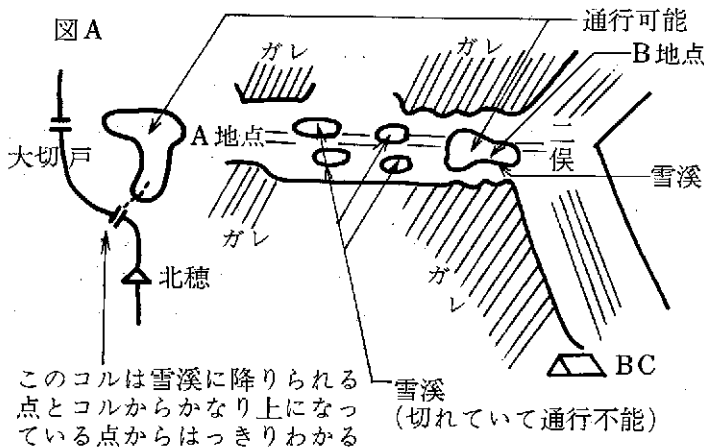
参加者 広田、岡部(友)

7月16日 ① 雪訓地点(10:25)-北穂(13:50)-本谷への下降点(14:45)-二俣(16:30)-BC(16:50)

コルから雪溪横のガレ場を下ったが、雪溪上も充分通行可能であると思われる。A地点からは雪溪が切れ右岸のガレ場に行く。ザイルを3ピッチほど出して、雪溪とガレ場を交互に通る。B地点の大雪溪に至るがA、B間の雪溪は非常に薄く、ガレ場も浮石だらけで悪い。B地点の大雪溪は充分通行可能であるが、やがてスッパリと切れる。そこから左岸のガレへ再び移り、二俣まで足場の不安定なガレを下る。

(記 岡部)

#### 横尾本谷左俣



## ＜赤沢山クラックルート＞

参加者 森、宮本

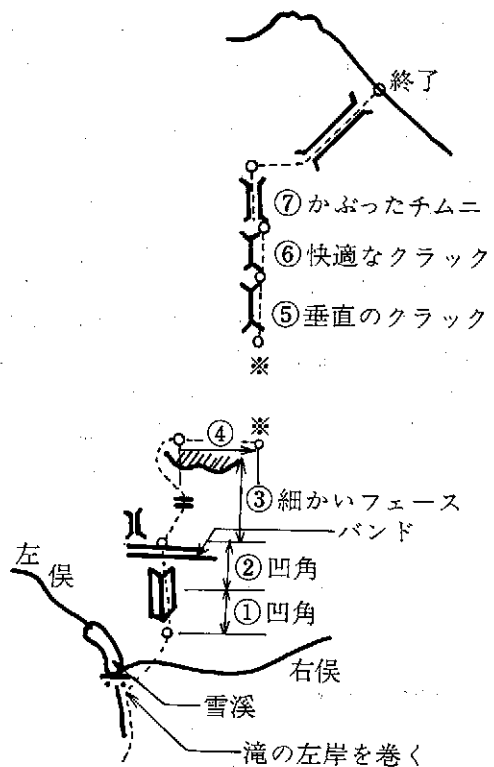
7月17日 ①のち◎ 赤沢岩小屋(5:10)  
 一取り付け(6:00)―登攀終了(11:05)―  
 西岳のコル(12:40)―横尾本谷BC(17:50)

槍沢B Sから赤沢山を見上げると、左手に針峰群がそびえ、奥に正面壁の赤茶けた壁がそびえている。取り付けへは赤沢のガレを詰め、二俣出合の滝で15mザイルを出す。雪溪が残り冷たい水が滝を走っていた。これより目指す凹角まで緩い草付きのリッジにルートをとる。1P目、大きな凹角で凹角の中はホールドが大きすぎるので左手のリッペを登る。少し、細くなるが、浮石が多くなって80mで左手のテラスに出る。2P目、凹角の続きを浮いているホールドに悩まされながら、ガラガラのバンドに達する。ここまでが下部岩壁と呼ばれ、これより傾斜の強い上部岩壁が始まる。3P目、赤茶けた部分を目指し登ってみるが進めず、再びバンドに戻り、少し右手にハーケンのあるのを見つけ、傾斜のつよいフェースを直上して小さなテラスに出る。右手にはクラックが上のテラスまで走っているが、草付きでいやらしそうなので左手のかぶっている所を腕力で強引に越し外斜テラスに出る。4P目、このテラス上部はハング気味で、ここを直上するのがRCCルートとわかる。クラックルートはもっと右手のクラックでルートを誤ったようだ。右手を走るクラックに戻ろうと外斜したバンド状の所を10m程トラバースしたが、高度感がすばらしく緊張させられた。5P目、垂直のクラックを直上しようと試みるが、取り付けを越せず、宮本が強引に行く。越したあたりもホールドは少なく緊張する。ここより右よりに草付きを直上すれば傾斜のあるしっかりした岩のクラックが20m続く。6P目、傾斜は少し緩くなり、大まかなそれでいてしっかりした岩のクラックを80m直上する。岩はガラガラとして、手が切れるよ

うで心地良い。クラックはチムニー状となり、チムニー内のテラスでピッチを切る。7P目、チムニー出口はかぶり気味で、ザックを吊り上げる。ここを越せば傾斜はさらにおち、稜はすぐそこだ。8P目、傾斜のおちたルンゼ状を右の上し、浮き石の多い細い稜線に出て終了。赤沢山は屏風と対照的にフリー主体で人手に触れられておらず、明るい解放的な岩場だ。

(記 森)

## 赤沢山クラックルート



### 〈四峰正面壁北条新村〉

参加者 重田、浅井、住田

7月17日① BC(5:20)→濁沢(6:25)→V・VIのCOL(8:05)→C沢出合(11:20)→T<sub>2</sub>(12:00)→登攀終了(19:10)→BC(23:00)

V峰支尾根からトラバースしようとして行けなくて、取り付け迄に非常に時間がかかってしまう。1P目、T<sub>2</sub>より草付きのガリーを右上する。2P目、クラックの走るフェースにあぶみを使用。ルート図によると、このピッチはフリーとなっており、ルートを誤っていることに気付く。取り付けT<sub>1</sub>のはずがさらに右上して取り付けしてしまったらしい。人工の後、草付きの脆いリッジを登り、ハイマツをつかんでテラスにはいあがる。3P目、テラスすぐ上のハンクはダイレクトルート。そのかぶっている右を人工で乗越す。小さい庇を乗越し、右へトラバースしてピナクルに至る。各自アプローチで疲労していて時間がかかる。ピンはよく効いていて信用できる。4P目、ピナクルより右へトラバースしてカンテを登る。カンテにはシュリングが掛かり、すぐそれとわかる。このカンテは高度感もすばらしく壮快である。これを越した後、5m程右上してピッチを切る。その後さらに右へトラバースして5m登ると登攀終了である。

(記 浅井)

### 〈滝谷第一尾根〉

参加者 岡部(友)、金谷

7月17日① BC(5:00)→B沢COL(8:55)→取り付け(11:00)→登攀終了(17:30)→BC(20:30)

第一尾根は浮石が多いので注意を要する。取り付けから見た下部岩壁は圧倒的であるが、ガスった時はルートファインディングが難しくなる。1P目、フリーからアブミの掛け替え。20mで小テラスに着く。2P目、35m程のフリーを含むアブミの掛け替えから第一核心部のチムニーへ。このチムニーは幅50~60cmでホールド、スタンスは乏しく、フリクションでずりあがり、テラスに出る。3P目、リッジの右を登る。岩は脆いがホールドは大きい。T<sub>3</sub>に出る直前のリッジ最上部が第二核心部で腕力登攀となる。その後T<sub>3</sub>をコンテ20m。4P目、アブミの掛け替えからチョックストーンのあるチムニーを抜けテラスへ出る。5P目、本来の右ルートはテラスより凹角を直上するのだが、凹角中央に大きな岩が浮いており、左側の容易なリッジを登る。その後右へトラバースして本来の右ルートにもどりT<sub>2</sub>に出る。6P目、どこでも登れる位ホールド、スタンスが豊富であるが岩が脆い。チムニーを快適に越し登攀終了。終了点からリッジを進んで北穂頂上へ。

(記 岡部(友))

### 〈西穂高ビバーク〉

参加者 広田、村田、本園、長谷川

7月17日① BC(5:20)→南岳(8:50)→北穂小屋(11:40)→奥穂(13:45)→ジャンダルム(16:05)→天狗のCOLBS(17:30)

横尾本谷右戻は1年生にとって沢登りも兼ねて楽しかったと思われる。雪渓を歩いていると急に「ドカーン」という音とともに目の前の雪渓が崩れた。これ以後端から $\frac{1}{3}$ の所を歩くよう心がける。大切戸は鎖場が各所にあり、バランスを要する所もあって、1年生に注意を払いながら越える。奥穂からは馬の背のナイフリッ

ジ、ロバの耳と難所が続くが赤印を頼って進むと難しい所もなく楽しい稜線歩きであった。

7月18日 BS(4:35) - 西穂(6:10) - 西穂山荘(7:30) - 上高地(9:30) - BC(16:40)

ピバークサイトとしては不適であったが、1年生はスヤスヤと眠っていた。天狗のCOLからは、まず鎖場を過ぎてから、歩く、歩くというだけである。上高地からBCまでは、担々とした苦しい道のりであった。(記 村田)

### <滝谷ピバーク>

参加者 重田、西尾、科野

7月19日 ◎ BC(5:00) - 白出のCOL(6:50) - 白出沢出合(9:30) - 滝谷出合(11:00) - 滑滝下(14:00) - 5沢合流点(16:40) - BS(18:45)

●雄滝(右岸を登る) 1ピッチ目は岩が濡れているためフリクションが効かず腕力を要するフリークライミング。2ピッチ目は草、木が生えていてホールド・スタンスが見にくい。浮き石あり。(1ピッチ目35m, 2ピッチ目25m)

●F<sub>1</sub>(左岸を巻く) 雄滝の上で右岸から左岸に渡る。F<sub>1</sub>は4~5mの小滝だが浮き石が多いために巻く。

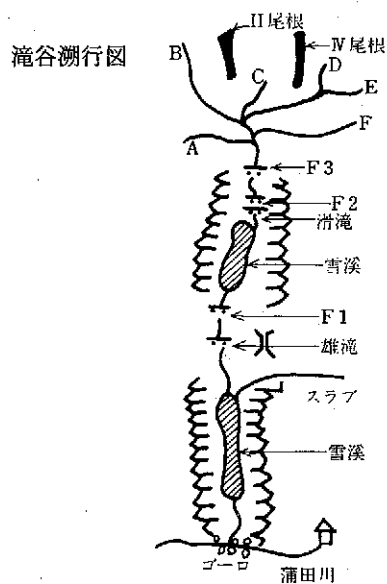
●滑滝(右岸を登る) 1ピッチ目は岩が丸く登りにくい。かぶり気味の所もあり難しい。最後の辺りは浮石が溜っている。2P目は快適なスラブで登り易い。(1ピッチ目25m, 2ピッチ目35m)

●F<sub>2</sub>, F<sub>3</sub> F<sub>2</sub>はホールド・スタンスともに大きい。F<sub>3</sub>は大きな岩の右側を水が落ちる小滝。岩の左側を登る。

●合流点は多くの沢があつまりすぐそれとわかる。左から2つ目の沢(B沢)に入る。

7月20日 ① BS(5:00) - 稜線(8:40) - 北穂(9:30)

頂上から重田は濁沢に下り、西尾、科野は、ドーム中央稜へ向かう。(記 科野)



### <屏風岩東壁青白ハング鵬翔ルート>

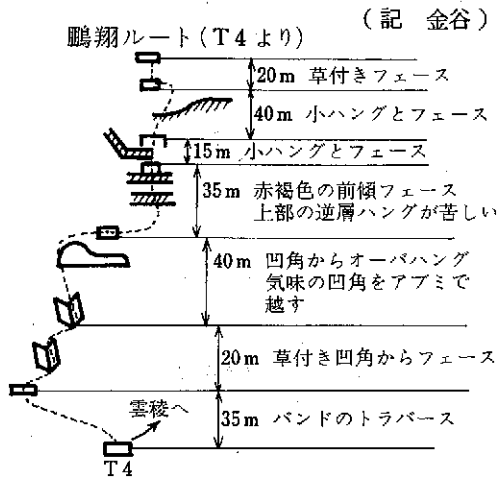
参加者 金谷、岡部(友)

7月20日 ① BC(4:40) - 横尾岩小屋(5:40) - 1ルンゼ押し上部雪溪(6:20) - T<sub>4</sub>(9:20) - 登攀終了(18:20) - 屏風頭(20:30) ガスの為ピバーク

7月21日 ○ 屏風頭(4:45) - BC(6:15)

横尾岩小屋を渡った所が1ルンゼ押しである。1ルンゼを詰めT<sub>4</sub>へ至る。雲稜の逆くの字の凹角が顕著である。1P目、T<sub>4</sub>より左横に草付きをトラバースしてリッジを廻り込む。2P目、脆い凹角を強引に乗越し凹角下のテラスでピッチを切る。3P目、かぶり気味の所をアブミで登り、上部のかぶった凹角をアブミで乗越すと、大きなテラスへ出る。4P目、見たよりもかぶっているフェースをハーケンを一枚打ち、登る。5P目、ハング上のレッジよりかぶり気味のフェースを7m直上して、左へフリーで3mトラバースするとハイマツテラスで

ある。6P目、テラス上からハーケンとボルトの連打に頼って、アブミの掛け替え。上部ハンクを左へ廻り込むと、ピレーピンのあるレッジにつく。7P目、クラックのあるフェースをアブミで登り、上部の木を廻り込むとプッシュ帯に入り、一旦ザイルをしまう。木登りを続けるとザイルが必要な所がでてきたため、クラックを15m直上してプッシュに入る。その後踏跡を頼り、懐電行動で屏風の頭へ向かう。



### <屏風岩東壁雲稜ルート>

参加者 住田、西尾

7月21日 ○のち● BC(4:45)-岩小屋(5:45)-T4(7:30)-登攀終了(12:45)-BC(15:50)

1P目、バンドの乗越し1度アブミを使用した。2P目はアブミでハンクを越す。3P目はアブミでバンドまでトラバースするが、バンド手前はいやらしい。4P目はアブミの掛け替えであるがボルトのシュリングには注意。5P目は高度感のあるハンクを越し、東壁ルンゼに入る。6P目はⅢ級と思えないほど難しい。7, 8P目は易しいが落石に注意が必要である。ルートはわかりやすく、ピンもありすぎるくらいである。先行パーティーがあれば、東壁ルンゼ上部からの落石が必ずあるので注意しなければならない。(記 西尾)

### <ジヤングルムT1フランケ>

参加者 渡部、岡部(祐)、本園、奥山

7月21日 ○のち● BC(6:50)-ロバの耳と馬の背のコル(9:30)-取り付け(9:45)-登攀終了(12:45)-BC(16:30)  
ロバの耳と馬の背のコルから縦走路をそれて取り付けに向かう。1P目、チムニーを登る。チムニーを少し登った所に浮石があり、落としてしまう。チムニーを腕力で乗越し右へぬける。2P目、少し登るとかぶり気味となり、ハーケンを頼り右へ移る。続いてハーケンにかけたシュリングでつっぱって腕力で登る凹角となり、何回か失敗した後、やっと乗越す。あとは階段状の草付きを登る。8P目、ゆるやかなフェースを登ると稜線の岩場に出て終了。

(記 奥山)

### <滝谷ツルム正面壁>

参加者 広田、村田

7月21日 ○のち● BC(5:40)-スノーコル(8:35)-ツルム取り付け(10:50)  
ツルム頂上(14:20)-BC(16:15)  
マツナミ岩からC沢左俣を下ることになっていたがドームからの落石が多く、Ⅱ尾根に沿って下降し、落石がないと思われる所で懸垂してC沢左俣に下降する。そこから四尾根取り付きのスノーコルにかけ上る。ここからノーザイルでBカンテ手前までいく。ザイルを出しBカンテを通過して20m懸垂してツルムに取り付く。1P目、A0で20mを直上して外斜テラスまで行くが、ホールド、スタンスが細かく困難を強いられる。2P目、アブミでオーバーハンクを越え、カンテを右上する。このオーバーハンクはテラスのすぐ上でそれほど問題はない。3P目、テラスからの1歩が難しいが、後は難なく15mのフェースを右上する。4P目、草付きであるためスタンスが不安定で、下は垂直に切れ落ちているため精神的に難しいピッチであった。5P目、エンビツピナクルを右に巻いて

ツルムの頭に出る。ここから懸垂2回でコルに降りて、クラックを登りDカンテを越え、縦走路に出る。(記 村田)

### <北尾根ピバーク>

参加者 金谷、草尾

7月22日 ◎ BC(11:30)-奥又白池BS(17:40)

7月23日 ① BS(5:40)-V・Ⅵのコル(7:15)-前穂(10:20)-奥穂(11:50)-BC(13:30)

22日は朝から雨が降っていたので天気待ちの後、昼頃に出発した。そのため当初予定の蝶ヶ岳経由は変更する。新村橋から奥又白へ行く時、尾根道に入るのが遅れ沢の雪渓に行手を阻まれ、引き返して登り直す。奥又白は静かでお花畑が広がり、眼前に東壁が見え、非常に良い所である。23日の北尾根は岩登りとしては容易だが、スッパリと切れていると思うと動きが鈍くなる。後は奥穂から走り下る。

(記 草尾)

### <槍ヶ岳ピバーク>

参加者 岡部(友)、奥山、本園、小松

7月22日 ◎ BC(7:30)-一本谷橋(10:00)-一ノ俣小屋(12:10)-槍ノ肩(17:30)-殺生BS(18:40)

濁沢を下った所で雨が降り出し、横尾本谷は増水の為、槍沢を経て、槍ヶ岳へ向かう。槍沢は長い。赤沢山が右手に見えるが、槍ヶ岳は依然として見えない。殺生でツェルトをやったことで立て、しばらくは槍ヶ岳の夕暮れに見とれる。メタで作ったラーメンは予想外にうまくできて、満足して眠りにつく。

7月23日 ① BS(4:45)-槍ヶ岳(5:40)-大喰岳(6:50)-天狗原(8

:30)-BC(14:00)

天気は良く絶景である。初めて雲海を見る。富士、北岳、御岳……良く見える。中岳を過ぎて横尾尾根に入って、横尾本谷を下るがルートがはっきりせず、疲れる。濁沢BCに着いた時はほっとした。(記 奥山)

### <滝谷P<sub>2</sub>フランケジェードルルート>

参加者 岡部(祐)、渡辺

7月23日 ① BC(4:30)-北穂高(6:00)-B沢のコル(6:25)-登攀終了(10:30)-北穂高(10:55)-BC(12:15)

I尾根の取り付き、P<sub>2</sub>早大ルートの取り付きを経て、1ピッチ懸垂する。1P目、トラバースして、オーバーハンクした凹角を腕力で乗っ越す。この凹角は湿っていて、チムニーが下部にある。2P目、オーバーハンクした凹角。ここも湿っている。最初は脆いⅡ級が10m。次にクラックを登る。続いてハンクした凹角を左から腕力で越し、フェースを登って確保する。3P目、次のピッチに備えて10mで切る。4P目、脆いが、ホールド、スタンスが豊富で楽な凹角。続いて70度位の壁をアブミで行く。途中でフリーが出てくる。セカンドの岡部はアブミを使わずスイスイと登ってくる。5P目、Ⅱ尾根からトラバースして凹角へ入る。Ⅴ級だけあって細かい登攀を強いられた。最後はカンテを左から右へ移り終了する。

(記 渡辺)

### <屏風岩東稜>

参加者 宮本、広田

7月23日 ① BC(4:30)-T<sub>4</sub>への取り付き(5:50)-東稜の取り付き(7:30)-登攀終了(13:50)-BC(16:00)

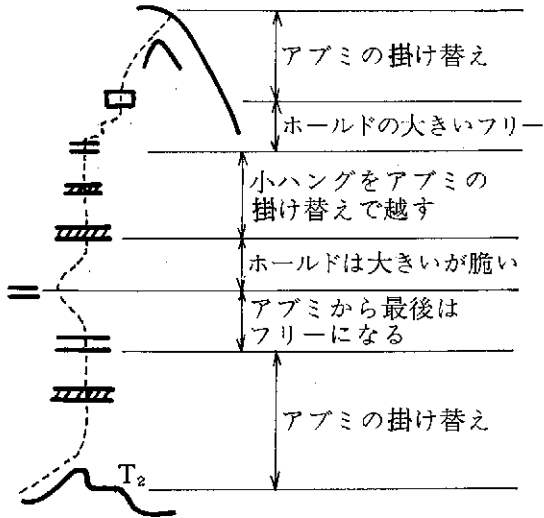
東稜には1パーティ取り付いていて終始そのうしろから登り、待ち時間多く、そのうえ正規



の所でピッチが切れなかった。全体的にピンが多くホールドも大きい。アブミは掛け替えで、ボルトに注意すればよい。(記 広田)

ラスに出る。Aフェースを登り前穂に出て、北尾根を下降して、Ⅲ・Ⅳのコルからグリセードで潤沢へ下る。(記 岡部(祐))

### 屏風東稜ルート



## 夏山縦走

### 後立山縦走 (扇沢-朝日岳)

期間 7月27日~8月1日

参加者 広田(L)、岡部(友)、科野、奥山、長谷川、小松

7月27日 ①のち● 扇沢出発(7:20) - 種池山荘(11:20) - 冷池山荘(14:20)

柏原新道はさほど急登ではないが暑さも手伝って足が重い。赤屋根の種池小屋が見え、登りもゆるくなる。爺の辺りから雲にまかれ始め、冷池小屋に着くと待っていたかのように雨が降り出す。大ナベ、コッヘルを出し雨水を集めるがその雨も間もなくあがる。

7月28日 〇のち● 冷池出発(5:30) - 鹿島槍(7:10) - 五竜山荘(15:10)

予想外に早く鹿島槍に着くが、切戸小屋へはなかなか着かない。切戸小屋からは行けども行けども五竜に近づかない感じだ。赤坂の辺りで小松がバテ、パーティーを分ける。なんとか五竜山頂に立つと、今日も雲ゆきがあやしくなり出し雷音が無気味に響いてくる。五竜小屋まで雷のごとく駆け下る。

7月29日 〇のち◎ 五竜出発(5:30) - 唐松小屋(9:00)

本日は唐松までにして、半日休養とする。

7月30日 〇のち◎ 唐松出発(5:00) - 天狗山荘(9:50) - 白馬岳(12:50)

### <右岩稜古川ルート>

参加者 岡部(祐)、渡辺

7月24日 ① BC(4:55) - 取り付け(7:50) - 右岩稜終了(9:50) - 前穂高(11:15) - BC(12:50)

右岩稜は、岩も堅く、陽を浴びながらの登攀であった。5P目でルートを間違えてスカイフックを出さざるをえなくなり、肝を冷やした。1P目、2P目は右上するバンドを登る。岩は堅く、がっちりしている。3P目、テラスから少し左へ出て、凹角状の所を直上する。ピンも効いており、快適にハイ松テラスに達する。

4P目、ハイ松テラスから左上のかぶり気味の凹角をフリーで登り、上部で右へトラバースする。このトラバースは丁度、上半身の所がかぶっており、いやらしい。5P目、左の方にハーケンが見える。かぶり気味の垂壁があったのでそのルートへ行く。ところが、これがまちがいで、本来は、右のクラックへ入るのが正規ルートであった。6P目、簡単な岩場を登ると大テ

1日目、2日目と幕営地に着くのが遅かったので早い目に出発する。天狗の大下りを登った後はアップダウンが少なく、昼すぎに白馬に着く。

7月31日 ①のち◎ 白馬出発(4:40)一朝日小屋(11:10)

朝日方向に向かう人は殆どいない。昨日迄の混雑ぶりがうそのように静かだ。朝日小屋周辺は非常に静かで北アの別天地のようだ。ここなら何度でも来たい。

8月1日 ① 朝日小屋出発(4:15)一朝日山頂(5:00)一蓮華温泉(10:40)

計画では根海新道に入り、日本海に抜ける予定であったが、小松の疲労度とエスケープルートがないことを考慮して蓮華温泉へ下山する。(記 広田)

リーダー所感

白馬岳迄の雑踏と違って変わって鉢ヶ岳からは実に気分のよい所だった。広々として街の煩雑さがない。そんな所でのんびり考えてみた。

山の雰囲気をも二次にし、岩壁に開かれたルートをただ攀じ、高いグレードをただ追うという近頃流行の夏山定着合宿が大学山岳部に馴染むかどうか。山の性質からどんどん遠ざかっていないか……。

今回は何の工夫もない縦走であったが私の心は洗われた様な気がした。(記 広田)

## 南アルプス縦走 (奥西河内沢-北岳)

期間 7月28日~8月3日

参加者 金谷(L)、西尾、草尾、本園

7月28日 ① 畑薙ダム出発(11:40)一樫島(17:00)

畑薙ダムより20Kmもある林道を、炎天下に樫島に着いた時にはぐったりときていた。

7月29日 ① 出発(6:00)一カンバ沢(14:30)一北沢手前(15:30)

奥西河内入口の吊橋にダイナマイト注意の看板があり、小屋の主人に安全を確認して出発する。右に左に徒渉を繰り返し、途中ザックのブリッジ渡しなどして北沢出合400m手前の絶好のテント場に幕営する。

7月30日 ① 出発(5:55)一上砂沢(7:40)一大聖時平直下(16:35)

前日同様楽しい沢歩きをしていたが大滝の高巻きで少し苦勞する。高巻きは右岸の草付きを強引に登り、上部はザイル2P出しての木登りである。高巻き終了点はほぼ落口でありあまり大巻きしない方がいい。滝をすぎると水量はぐっと減り源頭真近の感がある。大聖時平直下の草の上でテントを張る。気持ちのいい所である。

7月31日 ① 赤石岳アタック出発(5:30)一BC(8:20)一前荒川岳(12:50)一高山裏露营地(18:50)

朝、サブザックで赤石アタックの後撤収して高山裏露营地へ向かう。

8月1日 ◎のち● 出発(7:55)一小河内岳(10:25)一三伏小屋(12:15)

台風接近による天気待ちの後出発する。上り下りのあまりない静かな稜線で、昼前三伏少し手前で雨が降り出す。

8月2日 ①のち●\* 出発(4:50)一塩見岳(7:55)一農鳥小屋(15:00)

今日は快調なペースで進み8:00には塩見を越し農鳥小屋まで足をのぼした。さすがに全員ぐったりしていた。

8月3日 ●\*のち● 出発(6:10)一北岳(9:00)一広河原下山(11:50)

朝、天気も悪いので農鳥岳アタックは中止にして一路北岳へ向かう。北岳山頂もガスで展望は効かず。一目散に広河原へ下る。

(記 金谷)

リーダー所感

縦走という名だけにとらわれずバラエティーを含んだ山行ということで尾根までのアプローチルートとして沢を選んだ。もちろん沢だけに終わらず、稜線へ出てからは長い縦走をするの

だが。私個人の考えとしては夏の重荷を背負った長い縦走は一年部員にとって必修課題であると思う。それによって山での生活の基本を会得し今後の積雪期登山への布石とすべきものと思う。(記 金谷)

## 10月個人山行

### 大台ヶ原堂倉谷遊行

期 間 10月11日～10月12日  
参加者 西尾(L) 奥山 長谷川

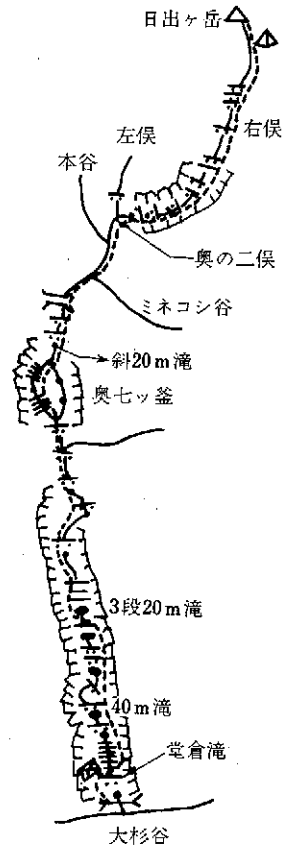
10月11日 ◎ 駐車場出発(12:45)  
一堂倉小屋(13:45) 一堂倉滝(14:30) - CS(16:00)

堂倉谷と大杉谷の出合にかかる堂倉滝30mは、垂直に堂々と落ちており、とても取り付けない。右岸壁にルートの可能性はあるが、諦めて右岸を高巻くことにする。吊り橋を渡った所から一般路を離れ、ダムの少し下手あたりまでブッシュの中の踏跡を追い尾根に出る。そこからコンクリートの土台左手のガリーを懸垂20mを交えて堂倉谷に降りる。谷はきれいに磨かれた岩盤で敷きつめられ、左岸の岩棚で第一夜を迎える。

10月12日 ○のち◎ CS出発(6:30) - 奥七ツ釜(9:10) - 二俣(12:20) - CS(17:10)

明るくなるのを待って、左岸沿いに進み、幅の広い滝の右岸を直登すると40m程の巨大な滝の前に出る。スラブ状のテカテカ光った岩盤を垂直に落下して倒れそう。左岸を大きく高巻き、10mの懸垂で落口の上に降りた。ここより流れはゆるやかになり兩岸はフラットな岩盤で、ほぼ左岸通しに進む。3段20mの滝の釜の手前で右岸に渡り、ザイル20m

出して釜をへつり、滝上に出る。左から支流が数段100mの滝となって落ちている。これより上は伐採されていて明るく気持ちがよい。次の斜瀑10mを左岸にザイル10m出して越す。大きく左に曲がって、小滝を2つ越えると兩岸が谷にせり出してゴルジュとなり奥七ツ釜が始まる。滑滝の中に深くえぐられた釜を過ぎ、最後の斜瀑20mを右岸を巻いて、巨岩の乗越しと、大きな釜のへつりをくり返すと広い河原となる。流れは平凡で倒木の為、谷は汚れている。ミネコシ谷を過ぎ二俣に入ると谷は再び美しさを取りもどし、奥の二俣で日出ヶ岳に直接突きあげる右俣に入るとすぐにゴルジュが始まる。相変わらず滝は小さいが釜は深く手がつけられない。幾つかの滝を越していくと、谷の水がしだいに涸れるようになりCSに適地を見つめる。(記 西尾)



堂倉谷遊行図

大台ヶ原東ノ川遊行

期 間 10月13日～10月15日

参加者 西尾(L) 浅井 奥山 長谷川

10月13日 ◎ CS出発(6:00)－  
 駐車場にて浅井合流(12:40)－白崩谷  
 下降(13:30)－白崩谷中心S(16:  
 50)

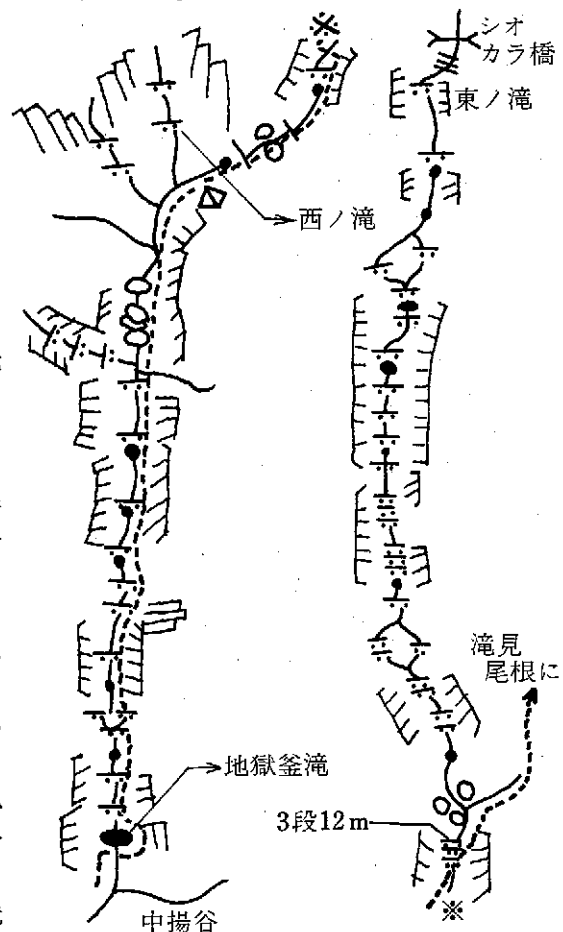
昨日のCSからブッシュをこいで稜線に戻り、大台ヶ原で浅井と合流した後東ノ川へ向かう。堂倉山手前のコル付近からルンゼを下り、白崩谷本流に出る。巨岩帯を下るとゴルジュになり2段30mの滝を左岸より下る。左手よりルンゼが滝を落としているので、そのルンゼをザイルでトラバースした後25mの懸垂で谷に降りる。3段20mの滝の左岸を下り、ゴルジュをいくつか下降するが意外と時間がかかる。高巻きも踏跡がはっきりしていない。最後のゴルジュは右岸を巻いた後谷が左に曲がる手前で谷に戻る。続く60mの滝は側壁が発達しているので左岸より下る。谷の中には近寄ることもできず、思いきり高巻いてゴーロに出る。時間もおそいのでCSを捜す。

10月14日 ◎ CS出発(6:30)－  
 東ノ川・白崩谷出合(8:45)－地獄釜滝  
 (12:00)－開拓谷出合CS(15:  
 00)

これより谷は巨岩で埋まり、石飛びと高巻きをくり返して思ったよりはやく東ノ川本流に着く。東ノ川の巨岩帯を越していくと中揚谷が右から入り、地獄釜滝に至る。スラブ状の岩盤を一気に落ちており、下には広くて深い釜があって紅葉とマッチしていてすばらしい。この滝の左岸草付きにザイル40mを出して通過する。ここから上流は小滝が増え、やがて目の前に巨岩が迫り、左手からルンゼが落ちてくる。沢の中央に戻り残置ボルトとアブミを使って幾つかの巨岩を乗り越えて行くと西の滝が見える。予定地点に来たのでここをCSとする。

10月15日 ● CS出発(6:00)－滝見尾根道(8:10)－駐車場(9:00)

朝起きると霧雨である。とうとう雨が降り始めたかとかっかりするが、明るくなるのを待って西の滝の下に行く。雨が気になるが塩辛谷を詰める事にする。これより巨岩は少なくなり小滝が連続するようになる。しばらく行くと谷が狭くなり3段12mの滝がゴルジュを成している。右岸は岩壁なので左岸を高巻くが岩場になったので尾根を越して裏のルンゼに入る。ルンゼを詰めて谷をのぞくが岩壁になっていてとても下れない。そのまま尾根をブッシュをこいで登り、時々現れる数mの岩壁を越え登る。雨は本降りになり谷の水量も増えてきたようなので、そのままブッシュをこいで滝見尾根の道に出ることを決める。密生したササとカン木に悩まされながら尾根道に出て、全員疲れ果てて駐車場に向かった。(記 西尾)



東ノ川遊行図

## 中央アルプス縦走

期 間 10月11日～10月13日

参加者 村田(L) 小松 科野

10月11日 ◎のち●= 横山出発(8:30)→馬返し(13:00)→胸突の頭(15:25)

どんよりと曇った空の下、さほど色づいていない紅葉を見ながら出発。馬返しの辺りから雨がおちてくるが、ひどい降りではない。雨具をつけ霧にけむったような路を行く。非常に静かである。大樽小屋で雨がやむ。ここから胸突八丁の登り坂で登りきった胸突の頭で道の真中にテントを張る。

10月12日 ① 胸突の頭発(5:30)→駒ヶ岳(8:00)→桧尾岳(12:10)→能沢岳(13:45)→木曾殿山荘(16:30)

少々風があるが青空が広がる。主稜線に出ると風が冷たい。宝剣の岩場もあつという間に過ぎ、中岳山荘でヤッケを着る。景色を楽しみながら進むと三ツ沢岳の紅葉が美しい。空木の手前の木曾殿越をCSとしようとしますが小屋の管理人に幕営禁止を告げられ小屋に入る。

10月13日 ① 山荘出発(5:40)→南駒ヶ岳(8:40)→越百山(11:05)→飯田下山(18:00)

風がかなりきつい。空木の登りの途中から陽を浴びるが風のため、はだ寒い。越百山頂に着き、ホッとす。コスモはなかなかしゃれた名だが稜のでっぱり程度にしか感じられない。林道まで下れば、と思って下降に移るがこれが少々甘かった。急な所につけられた道でハシゴが幾つか現われる。ようやく林道に出たものの駅までははるかに遠く、駅に着くとまっ暗であった。(記 村田)

## 11月偵察山行

### 11月偵察山行を終えて

冬は槍穂縦走・横尾尾根、春は立山・雄山東尾根をトレースするつもりで計画を進めてきたが、出発直前の思わぬ問題の為、大幅な修正を強いられる事になった。横尾尾根の偵察は中止とし、縦走隊のデポは西穂から白出しのコルまで上げることとしたが、西穂の稜線を甘く見すぎていた為に、デポの半分を西穂にするという結果に終わり、再び4年部員2名でデポの移動にあたることとなった。

春は関電トンネル通過の許可がおりず、目標を変更して、ブナ立尾根から双六までを偵察した。

これら偵察の結果、冬の槍穂縦走は相当厳しくなることが予想され、飛驒側から吹き上げてくる強風、やせた岩稜と雪稜には十分心しかかかると再認識させられた。

春は楽しい稜線散歩となるであろうが、逃げ道がない事にどう対処するかが問題である。

部員数の安定した最近では、積雪期縦走は定着してしまった感がある。クラブとしてよりも個人的希望に重点を置く山行であるけれども、確実な逃げ道と十分な勝算とそして十分な気力があって、初めて成功する山行形式だと思える。

(記 森)

### ブナ立尾根 - 槍ヶ岳偵察

期 間 11月1日～11月5日

参加者 金谷(L) 西尾 長谷川 本園  
奥山 科野 小松 草尾 松尾(OB)

11月1日 ① 葛温泉出発(9:00)→濁沢(12:25)→2208m C.S.(16:15)

タクシーで葛温泉で下車し、一路、工事中道路を濁沢へ向かう。このあたりはダム工事の為来るたびに景観が変わっており戸惑う。濁沢を少しつめ吊橋を渡ってから夏道通しに行く。尾根が一段落ちつき少し広くなった2,208mのピークに幕営する。

11月2日 ◎のち⊗ 出発(6:30) - 烏帽子岳(8:15) - 野口五郎小屋(15:45)

今年は雪も結構あり、去年と比べてほんとに11月らしいブナタテ尾根上部を登り烏帽子小屋に着く。ここから野口五郎までの稜線はほぼ夏道通しのんびり歩く。野口五郎手前より吹雪になる。

11月3日 ⊗のち○ 出発(6:00) - 水晶小屋(12:00) - 水晶岳(13:35) - C.S.(14:50)

朝 風雪であったが出発し、広い尾根を歩く。南真砂岳との尾根の分岐はガスったとき注意しなければならない。東沢乗越から水晶までは急登であったが、このあたりより空が晴れわたり展望を満喫した。時間もあり、計画通り水晶岳アタックに向かう。ピーク手前300m位より雪が多いとやばそうな所である。

11月4日 ○ 出発(6:20) - 三俣山荘(9:45) - 双六C.S.(15:30)

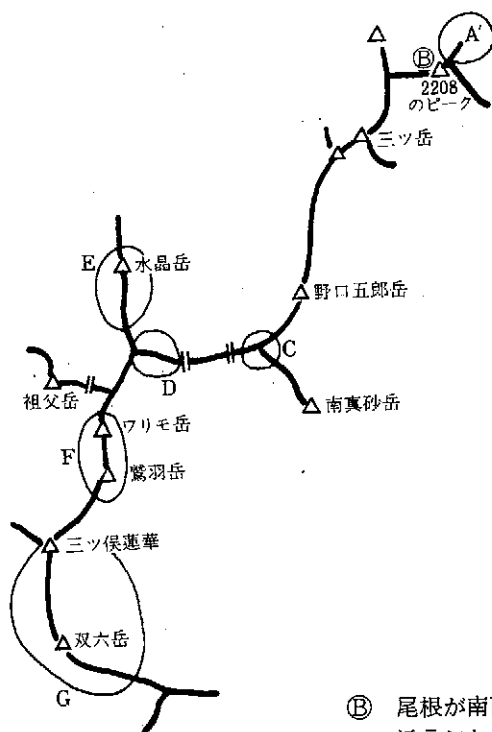
今日は調子の悪い者が出て、ゆっくりしたペースでワリモ、鷲羽を越し、三俣ピークより稜線通しに進み双六岳でテントを張る。

11月5日 ① 出発(6:00) - 鏡平(9:15) - 新穂下山(12:15)

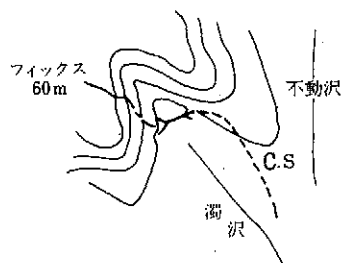
当初予定していた槍までの計画は日程的に無理とみて、双六より下山することにする。鏡平へは夏道通しで一気に小池新道を下山する。

(記 金谷)

### 11月偵察 ブナ立尾根～槍ヶ岳 偵察報告



① ブナ立尾根取付部



- 濁沢の広い河原にC.S.有り、雪崩の危険少ない。
- 沢の中が詰まった所に吊橋があり、左岸から右岸に渡り20m程登った所で夏道は巨岩に丸木橋をわたしてある。雪のある時は手前を真上に60mフィックス。

- ② 尾根が南西から西へ向きを変える所のピーク(2,208m)にテント2張可。取り付きより烏帽子小屋迄他にC.S.無し。

- ③ 南真砂岳への分岐は両方とも尾根が広い  
ため、ガスの時注意。このあたりの稜線は  
広いので西よりを歩いていると間違いはない。  
烏帽子より五郎乗越と東沢乗越の間のピー  
クまでどこでもC.S有り。
- ④ 東沢乗越より山容はガラリと変わり、岩峰  
の連続になる。大小7~8個の岩峰は一年  
生が多い場合、ザイルの出しっ放しとなる。  
主に東沢側をルートに取る。
- ⑤ 広い尾根を北に進み、尾根がやせてきた所  
で黒部側に廻り込む。廻り込んだ所が雪壁  
でフィックス30m要。その後、水晶岳ま  
でやせ尾根2.8Pフィックス要。
- ⑥ 水晶小屋よりほぼ稜線通しでワリモ岳に登  
る。頂上直下はやや黒部よりから廻り込む。  
ピークからの下り雪壁にフィックス15m  
要。鷲羽岳は稜線通しにピークに立ち、下  
りもほぼ夏道通し。ただ雪の多い時下り始  
めにフィックス必要。
- ⑦ 三俣~双六は問題ないが、三俣の登り斜面  
は雪の状態によって雪崩に要注意。双六岳  
は尾根がダグダグ広いため、双六小屋のコル  
への下りの時はルートファインディングに  
注意を要する。 (記 金谷)

西穂主稜線偵察(1次)

期間 11月2日~11月6日

参加者 広田(L) 村田

11月2日 ③のち④ 上高地出発(8:00) - 西穂山荘(12:50) - 独標手前へ  
デポ

西穂山荘への夏道は、1,680m、2,240m付近が迷い易い。赤布をくくりつける。独標手前コルの約10mの岩稜帯は要注意。

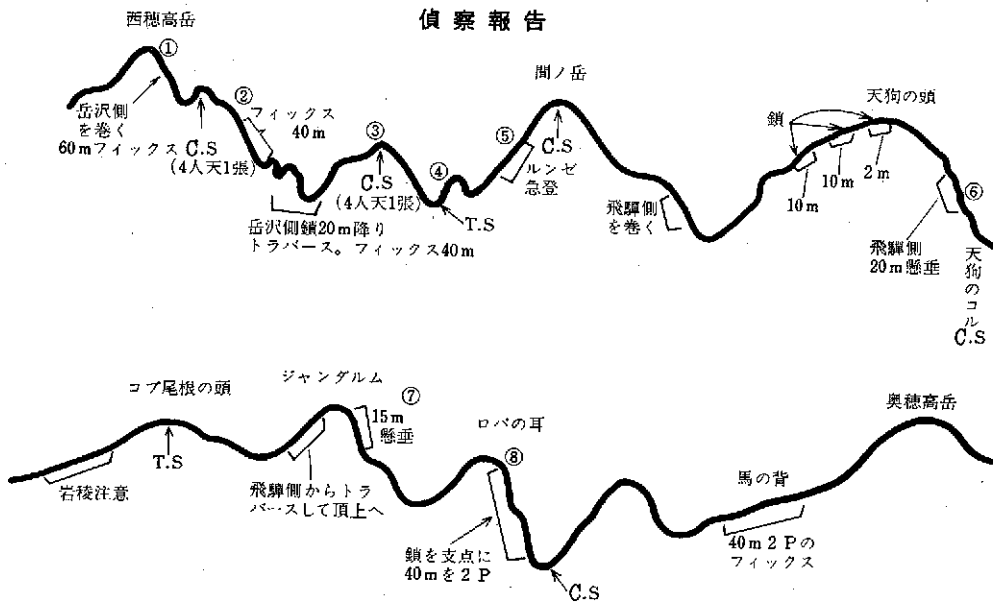
11月3日 ① 出発(6:10) - 西穂頂上(10:00) - 西穂の次のピークC.S.(14:25)

西穂の頂上に荷を置き、昨日の独標のデポを回収に向かう。西穂の次のピークはC.S(4人天1張り)に適當なので、岳沢側を巻いてダブルをする。

独標への登りは鎖約7m。西穂への最後の登りはやや急な50m程の急斜面である。

11月4日 ② 出発(7:00) - 間の岳(8:45) - 壘岩の頭手前C.S.(14:40)

ここから先、シングルで進むには荷が重過ぎ



る。ダブルで進む時間もないので、デボの半分を岩場にフィックスして出発する。ここからの下りは非常に急で、残置フィックスと、鎖が各々約20mある。間ノ岳への登りは急なルンゼ約50m。天狗の科尔への下りは飛驒側に約20mの鎖がある。

11月5日 ○ 出発(6:15)ーロバの耳を下った科尔(8:40)ー奥穂頂上(9:20)ー白出しの科尔(10:30)

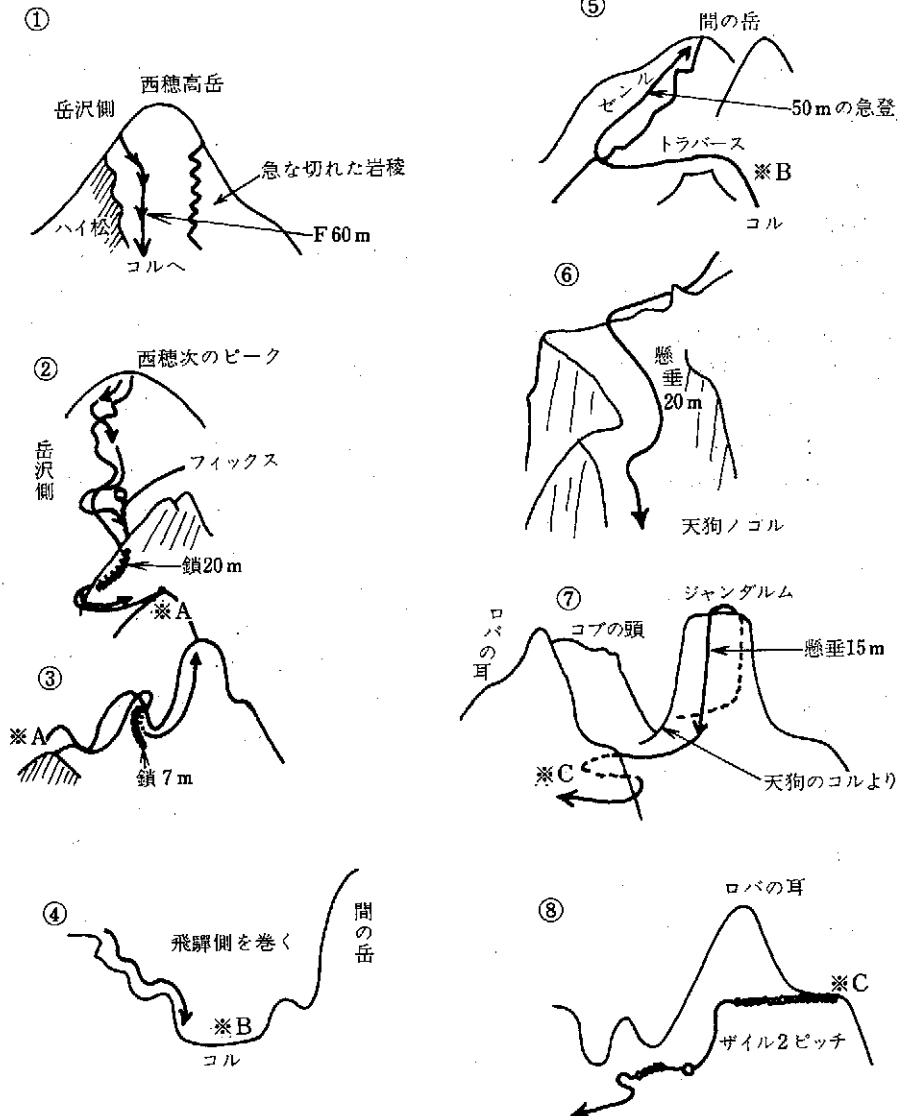
疊岩、コブの両頭間の岩稜帯は注意を要す。コブの頭は広いCS。ジャンダルムは飛驒側

へトラバース(ザイル20m)して、頂上に登り、懸垂(15m)をして科尔へ下る。ロバの耳は鎖を支点にしてザイル2Pで下る。馬の背はザイル2Pで抜ける。奥穂の下りの第2のハンゴ付近にデボをする。

11月6日 ○ 出発(6:30) 白出沢を下るー新穂下山(10:00)

酒沢岳西尾根偵察の予定であったが、村田が風邪気味で不調の為、白出沢を下る。

(記 広田)





- 西穂山荘への夏道は1,680m、2,240m付近が迷い易い。
- 独標手前のコルの約10mの岩稜帯に要注意。
- 独標への登りは鎖7m。
- 西穂への最後の登りはやや急な50mの雪斜面。
- 西穂からの下りは60m、岳沢側を巻く。(図①)
- 西穂の次のピークからは、急な下り。(図②) 鎖とトラバース要注意。
- 図③の台地はCSに適している。
- 台地からは飛驒側を巻いて下り、コルはCSとなる。(図④)
- 間の岳の登りは急なルンゼ50m。(図⑤)
- 天狗のコルへ下り(図⑥)は、鎖、垂直の20m。切れている岩稜を岳沢側に巻き、次に飛驒側を巻くと下れる。急斜面を下っていくと鎖場に出る。
- 天狗のコルからの登りは問題なく、壘岩、コブの両頭間の岩稜に注意。コブの頭は広い。
- ジェンダルクムは飛驒側へトラバース(ザイル20m)して、頂上へ登り、懸垂15mをしてコルへ下る。(図⑦)
- ロバの耳は第1の鎖をトラバースして雪面を下り、さらに第2の鎖を下り、コルへ。(図⑧)
- 馬の背はザイル2ピッチでぬける。

### 西穂主稜線偵察(2次)

期間 11月15日~11月19日

参加者 森(L) 渡辺

11月15日 ◎のち⊗ 新穂高ロープウェイ出発(8:30)-西穂高口(8:50)-西穂山荘(10:10)-西穂(13:15)-次のピーク(13:25)

西穂山荘に着く頃より遂にミゾレとなり、加えて風も強くなり、初めて穂高の吹雪を味わう。独標あたりから雪が多くなりアイゼンを着ける。

飛驒側からの吹き上げは激しく西穂の次のピークでデポを確認したのを機会にテントを設営する。

11月16日 ○ 出発(6:50)-間ノ岳(10:30)-天狗の頭(14:00)-天狗のコル(16:25)

昨夜の悪天で15cm位の降雪をみる。この新雪が思ったより悪く、次々と現われる小ピークの下降にはしばしばザイルを出す。間ノ岳から天狗のコルまでが予想外に悪く、天狗のコルに着く頃にはもう暗くなり始めていた。

避難小屋には雪が吹き込んでいたが、小屋の中にテントを設営して、夜を過ごす。

11月17日 ◎のち⊗ 出発(6:15)-コブの頭(9:10)

午前中一杯は天気はもつと判断していたが、8時頃より吹雪となり、加えて森が風邪をひいて体調悪く、ピッチがはかどらない為、コブの頭にテントを設営する。夏の為、ツェルトをフライがわりに使用したが、効果は著しい。

11月18日 ○ 出発(6:10)-ジェンダルクムの頭(7:10)-ロバの耳を下ったコル(9:40)-奥穂(12:20)-白出しのコル(13:40)

一晩中吹き続けた強風に吹き飛ばされたのか、締めつけられたのか、新雪の雪質は思ったより良く、速いペースで進めそうだったが、森の体調が悪い為、遅々として進まない。ロバの耳を下った所の鎖場は予想外に凍りついていて、懸垂15mで下りきる。ここから奥穂まで馬の背さえ越せば、単調な登りだが時間はどんどんたってしまう。奥穂の下側のハシゴ基部にデポをした後、白出しのコルに降りる。

11月19日 ◎のち⊗ 出発(6:30)-林道出合(9:00)-新穂下山(10:10)

天気図から判断し、今日・明日と吹雪となることは明白で、瀬沢岳西尾根の下降は締め、白出沢を下る。雪崩を心配したが、それほどの積雪ではなく、上部小さいのが2,3ヶ所出ているだけだった。11月とはいえ冬山並みの穂高山行であった。(偵察報告1次参照)(記 森)

## アイゼン合宿

### 御岳

先発隊は雪の少ないのに嘆き、後発隊は雪の多いのに嘆いた御岳山であった。冬山は一晩で一変しうる事を改めて思い知らされる。アイゼンワークが少し不足気味であったが、来る冬山には十分心してかかりたい。(記 森)

### 先発隊

期間 11月23日～11月27日

参加者 岡部(祐) 金谷(L) 広田 西尾  
村田 本園 小松 長谷川 奥山  
科野

11月23日 ○のち◎ 濁河出発(9:30) - サイの河原(14:55)

1ピッチ目から先頭はどんどんとばし、非常にきつい。飛驒頂上の前でアイゼンを着けてからはペースも落ちつく。

11月24日 ①のち○ サイの河原(6:45) - 一ノ池(7:20) 雪上訓練(8:45 - 11:40)

予想より楽に一ノ池に着き、テント設営後雪上訓練(滑落停止、アイゼン歩行、ザイルワーク)。テントに戻り、サブザックでお鉢廻り。

11月25日 ①のち○ 一ノ池出発(6:30) - お鉢廻り後一ノ池(7:35) 雪上訓練(8:45 - 10:30, 11:30 - 14:20)

早朝に、昨晚からビバーク訓練に出ていた広田、本園、西尾、長谷川の4名が帰ってくる。元気がなさそうだ。撤収後、キスリングでお鉢廻り。その後雪上訓練をし、午後から摩利支天アタック。金谷、小松、奥山、岡部(祐)、村田、科野ビバーク。

11月26日 ◎のち⊗ 一ノ池出発(6:

15) - お鉢廻り後一ノ池(7:20) 後発隊と合流後雪上訓練(13:30 - 16:45)

朝のお鉢廻りで剣ヶ峰まで行き、下山パーティーと別れる。一ノ池で設営後、お鉢の外側、二ノ池横で岩登りをする。雪がつくと簡単そうな岩も非常に手強い。テントで後発隊と合流し、岡部(祐)、西尾は再び岩登り、他は後発隊と雪上訓練。ガスがひどく、コンパスワークにはもってこいだ。夜、激しく雪が降る。

11月27日 ⊗のち○ 一ノ池出発(7:00) - 田ノ原(9:30) - 八海山荘(11:40)

雪はあいかわらず激しい。後発隊を残し、雪の降る中、田ノ原へと下る。(記 岡部(祐))

### 後発隊

期間 11月26日～11月29日

参加者 森(L) 浅井 草尾

11月26日 ◎のち⊗ 八海山(6:50) - 田ノ原(8:00) - 王滝(11:05) - 一ノ池CS(11:45) 雪上訓練(13:30 - 16:45)

王滝迄、雪はほとんどない。王滝に着くころからガスが出て、加えて風が一段と強くなり、完全装備をする。一ノ池で先発隊と合流し、雪上訓練。ガスと粉雪で丁度よい。

11月27日 ⊗ 出発(6:30) - お鉢廻り - 二ノ池CS(7:55) - 継子アタック出発(9:10) - 二ノ池CS(15:10) お鉢廻りの後、軽装で吹雪の中継子アタックに出る。昨日からの雪の為、最近のアイゼン合宿では珍しく、ラッセルをしながらのアタックである。

11月28日 ⊗ 出発(7:00) - 剣ヶ峰(8:45) - 一ノ池(9:45) 継母アタック(10:45 - 15:10)

剣ヶ峰迄、往復して後軽装で継母アタックに出る。終日ガスとアラレと強風でルートもはら

きりせず、コンパスに頼る。継母直下の岩場に阻まれ、頂は踏めなかったが読図とラッセルには丁度よいアタックである。剣ヶ峰にて3人ピバーク訓練。

11月29日 ⊕のち◎ 一ノ池CS出発  
(7:30)一田ノ原(10:20)一八海  
山荘(11:50)

朝からガスと強風。ラッセルしながら剣ヶ峰を越え下降に移る。(記 草尾)

## 冬 山 合 宿

### 冬山を終えて

我々が最高学年となってから目標としてきた冬の槍、穂高を無事終える事が出来た。5月山行以来、穂高周辺を対象をしぼり、概念を把握してきた結果と考えたい。各自、それぞれの技術が向上したこともあろうが、剣方面と比べ積雪もはるかに少なく、天候も穏やかであったことも成功の要素の1つであって、過信は禁物である。

下級生は冬山のラッセルをよく知らずに終わったと思うが、このラッセルの少なさはここ穂高に限られたことを知っていてほしい。横尾隊は天狗のコルをベースとし、上級生の槍ヶ岳アタックと1年生の南岳アタックを目標としたが、浅井、西尾の2年生は中堅として得られる所が大きかったと思う。

縦走隊は西穂から大切戸を越すまで、気の抜けない細い岩稜で、当然ザイルを出すべき所も時間短縮を考えて出ししぶったところが多くあり、事故はなかったものの、もっと慎重に進むべきであった事を反省している。それにしても、西穂から奥穂迄、人にも会わず我々だけで歩を進めたのは得る所大であったと思う。穂高主稜線の場合は軽装で、いかに早く通過するかに関

題がしぼられると思われ、それを考えると、泥くさい山岳部の長期対象にはなにくいというのが冬山を終えての実感である。とにかく今後の3年生の活躍に期待したい。(記 森)

### 横尾尾根-槍ヶ岳

学生生活最後のクラブ山行として、横尾尾根に入ったが、まず無事下山したことで一応の成功といってよいだろう。ただ今回あまりにも積雪が少なすぎた為に冬山というイメージには遠かったのが残念であった。

横尾尾根隊はサポート隊ということと、メンバー構成からしても大胆な行動は採れなかった。新人及び2年部員はもう少し動く必要があったが、最近山行がマンネリ化しつつある様思う。これからはもっと効率の良い登山をして欲しいし、そのためには3年部員以下新人まで全員が自分に厳しく、動いていかねばならないのではなかろうか。(記 岡部(祐))

期 間 12月26日～1月3日

参加者 岡部(祐)(L) 重田 岡部(友) 浅井  
西尾 奥山 草尾 小松 科野  
長谷川 本園

12月26日 ○ 沢渡(8:30)一木村  
小屋(12:20)一明神(14:25)

春のような陽気の中を荷を整えて出発する。木村小屋で縦走隊と別れ、周囲の山々の雪の少なさに驚く。

12月27日 ○のち◎のち⊕ 出発(4:  
50)一横尾(7:50)一3のガリー出合  
(9:10)一3のガリー上部コル(12:  
10) フィックス隊出発(14:05)  
本隊出発(14:15)一P4の2つ手前のピ  
ーク(16:30)

真暗闇を懐電行動。横尾までの林道はトレースがきれいについており、ラッセル覚悟の我々は拍子抜けである。当初、雪質が良ければ2のガリーを登ることにしていたが、出合をいつの

まにか通り過ぎてしまい、3のガリー出合まで  
きてしまう。3のガリーは5月並みの雪質の安  
定で、後ろめたいながらも時間短縮につな  
がった。コルより岡部(祐)、西尾で天場捜しに出、P  
4、2つ手前のピークに適当な所を見つける。し  
かし、コルから8ピッチ程非常な急登であるた  
め、岡部(友)、浅井でフィックス工作を行なう。  
冬山とは思えないブッシュこぎであった。

12月28日 ⊗のち① 出発(7:25)  
-P5(11:00)-P6(12:25)  
-横尾の歯取り付き(13:25)-P8(15  
:55)-天狗のコルBC(16:15)

小雪が散らつく中を出発する。P4以降、横  
尾の歯までは、尾根は比較的緩やかでもぐっ  
てもせいぜい膝までのラッセルである。横尾の歯  
は小岩峰を左側に巻くようにしてフィックス2  
ピッチを頼りに越える。P8直前の20mほど  
がかなり急で、キスリングの重みも加わって気  
が抜けない。天狗のコル手前の台地をBCとし  
天幕を張る。

12月29日 ◎のち⊗ フィックス隊出発  
(11:00)-BC帰着(15:10)

アタックの予定であるがガスが濃く視界が効  
かない為天気待ち。やがて重田、浅井、西尾で  
稜線までの間のフィックス工作することにし、  
他は沈澱となる。3人でフィックスに出かける  
が、次第に強風、雪となり新雪が胸までのラッ  
セルとなった。稜線直下より数えて40m3ピ  
ッチほどザイルフィックスした。絶えまない新  
雪に足場をとられて横尾本谷への急斜面にほう  
り出されそうになるのを自ら張ったザイルにし  
がみついて下降しなければならぬほどだった。

12月30日 ⊗ 停滞

12月31日 ① 出発(7:15)-南岳(9  
:00)-BC(11:15) 重田、浅井  
槍ヶ岳アタック隊出発(7:10)-槍ヶ岳  
(11:00)-BC(13:25)

1年生を南岳まであげ、槍ヶ岳アタック隊と  
別れてBCへ下る。

槍ヶ岳アタック(重田、浅井)…-昨日張った  
フィックスは上部を除いて役に立ちそうもな  
い。天候が異なるとこうも違うものか。中岳

の登りは思わぬラッセルに苦しんだ。稜線  
は烈風といってよく身体が吹き飛びかねない  
ほどであり、目出帽から出ている鼻、ほおが  
もげそうに痛い。肩の小屋で一息ついた後、  
夏道通り頂上に向かう。頂上では運よく青空  
が広がり大喰岳が烈風に雪煙をまき散らして  
いるのがよく見える。北鎌への降り口にはト  
レースがくっきりついていた。

1月1日 ◎ときどき① 槍ヶ岳アタック  
(岡部(祐)、岡部(友)、西尾) 出発(7:45)  
-肩の小屋(10:40)-槍ヶ岳(11:  
00)-BC(13:15)

他は停滞。

1月2日 ⊗のち① 出発(7:35)-横  
尾の歯通過(9:10)-3のガリーのコル  
(11:20)-横尾(13:05)-上高  
地(16:15)

入山したときは我々だけであった横尾尾根  
も正月休みとあって、他の登山者もたくさん見  
られる。くっきりついたトレースを足早に駆け  
降りた。3のガリーは滑り台のようなトレース  
がついており、皆思い思いにシリセードであっ  
という間に降りる。水平道を行ける所まで行く  
ことにし、薄暗くなる頃上高地の天場についた。

1月3日 ① 出発(7:50)-木村小屋  
(8:10)-中の湯(9:45)-沢渡  
(12:00)

中の湯から恒例下山マラソンとなり一同最後  
の力をふりしぼって走る。(記 浅井)

#### 穂高主稜線縦走

期 間 12月26日~1月4日

参加者 森(L) 渡辺 金谷 広田

12月26日 ○ 沢渡出発(8:30)-  
木村小屋(12:20)-2,250m(15  
:00)

富山市内では、昨年より積雪が多いようで、  
ふと春の赤谷山を思いだす。それでもさすがに  
天気だけは良く、木村小屋で横尾隊と別れて後

も高度を稼ぐに従い空はますます青くなる。しかし稜線への最後の急登辺りから金谷の体調が悪くなり、2,250m付近に幕営する。

12月27日 ○のち⊗ 出発(6:00)  
—西穂山荘(7:10)—独標(9:15)  
—西穂高(11:00)—西穂の次のピーク  
(12:10)

デポ(13:30~15:00)

西穂山荘を過ぎると一段と風が強くなり、完全装備をしても手がしびれてくる。雪も風に飛ばされてか積る余地がなく完全にクラストしている。独標に着く頃からガスが出始め、西穂の下りのナイフリッジで初めてザイルを出す。広田が吹き溜りに足をとられて落ちそうになり一瞬ひやりとさせる。西穂の次のピークにテント設営した後、デポとフィックス工作に出るがさすがに稜線はずれると信州側に新雪が吹き溜っており、思いがけないラッセルに会う。ピーク1つ越してデポして、鎖場にザイルフィックスしたまま帰幕する。

12月28日 ⊙のち⊗ 出発(6:40)—間ノ岳手前のコル(9:00) デポ回収(9:20—10:20)—間ノ岳(11:10) デポ(11:30—16:35)

昨夜の風雪はおさまっているが、ガスで視界が効かないのが残念だ。間ノ岳手前のコル迄、鎖場とコルへの下りにザイルを2回出してコルに着く。コルから昨日のデポを回収した後、飛驒側のルンゼを詰めて間ノ岳に出る。間ノ岳でテント設営後、天狗のコル鎖場上部にデポをすることにするが、次々と現われるピークには相当神経をすり減らされる。間ノ岳のルンゼ状の下りとナイフリッジに80mフィックスしておく。

12月29日 ⊙のち⊗ 出発(7:10)—天狗のコル上部デポ地(9:15)—天狗のコル(10:15)

間ノ岳下りのザイルを回収し終わる頃から雪に加えて風が強くなってくる。天狗の頭は鎖が出ておりしがみついて頭に出る。天狗のコル鎖場へは、トラバース気味に下るが雪質が悪く、又ガスの為神経を使う。やっと見つけたコルへ

の降り口から懸垂20mで天狗のコルへ。この頃はもう吹雪となっており、これ以上進むのを諦めコルに雪洞を掘る。雪洞には適した雪質で四人納得のいく雪洞が出来上がる。

12月30日 ⊗ 終日強風と雪の為、停滞。外ではゴ—ゴ—と風がうなっているのに雪洞の中は嘘のように静かだ。

12月31日 ⊙のち⊗ 出発(7:40)  
—コブの頭(9:30)—ロバの耳(12:10)—奥穂高(13:20)—白出しのコル(13:50)

吹雪はおさまっているが、ガスと強風に加えて核心部の1つでもあるので判断に迷うがコブの頭迄でもと出発する。ジャンダルムを越える頃から風はおさまってくるが、さすがにジャンダルムから奥穂迄は一段と難しさが違う。ジャンダルムから15m懸垂して後、ロバの耳まで二組に別れてザイルをベタ張りにする。ロバの耳は鎖が出ており、フィックス40mと15mの懸垂でコルに着く。奥穂に近づくにつれ再び雪混りとなるが、危うんでいた馬の背は完全なナイフリッジであるけれど膝迄のラッセルの為、それほど恐怖感はない。白出しのコルで偵察時のデポを回収し充実した大晦日を終える。

1月1日 ⊙のち①のち⊙ 出発(8:05)  
—酒沢岳最低コル手前(10:40)—北穂南峰(11:15)—北・南峰間のコル(12:35) フィックス工作(12:50~16:00)

西穂稜線上では会わなかった人も白出しのコルから急に多くなる。酒沢岳の鎖場は15m懸垂してトラバース気味に40mフィックス。さらに次の鎖場15m懸垂してトラバース気味に40mフィックス。さらに次の鎖場15m懸垂して北穂南峰迄ザイルなしに済みます。それでも酒沢岳から最低コル迄は岩と雪がミックスした嫌な長い下りで膝がガクガクする程に緊張する。南峰への下りは岩が乾いてガスも切れ青空が広がってまさに穂高の感である。トランシーバー交信で横尾隊は槍ヶ岳第2次アタックに出たことを確認し、四人安心する。こちらは本日に中大切戸を越す自信がないので北峰下りに

60m、30m、40mの残置フィックス工作をするにとどめる。

1月2日 ◎のち⊗ 出発(7:00)―大切戸最低コル(11:30)―南岳避難小屋(13:15)

本日はもう1つの核心部を通過するが、朝から地吹雪が激しい。北峰からの下り飛驒なきを越えて、1つ目の鎖場が現れる迄全てザイルを使用する。特に、北峰からは残置フィックスをしたものの雪がグサグサでいやらしく、又飛驒なきの横ばいはガスの中、空中に踊るようではないらしい。切戸の鎖場からは滝谷側の雪はクラストして足元はしっかりしているが、まるで奈落の底にどんどん降りていくようである。最低コルを過ぎると様子は一変し、荒々しい景色から穏やかな山容へと変わる。その景色の中に南岳の登りは黒々とそびえ異様さを放つ。少々手こずってここを越すと再び広い稜線に出るが、風は相変わらず強く、金谷、広田凍症気味となる。

1月3日 ○のち◎ 出発(6:30)―中岳(7:45)―槍ヶ岳(8:55)―横尾尾根分岐点(10:30)―横尾尾根三ノガリー降り口(16:10)―横尾(16:25)

昨日迄とうって変わって本日は無風快晴。横尾尾根分岐点から軽装で朝日に赤く染まり始めた槍ヶ岳を目指す。槍の頂から長い中崎尾根を見降ろすか少し残念な気がする。横尾尾根分岐点から、横尾隊が残してくれたフィックスザイルを回収して尾根をひたすら下るが、要所要所に残置フィックスがあり高度を稼げる。それでも樹林帯に入ると木の根っ子下りとなり、ここを登った横尾隊の苦勞がしのばれる。三のガリーから夏道に下るが、三のガリーは雪質さえよければ格好の下降ルートになる。我々四人、硬いデブリの後を膝がおかしくなるのにもかかわらず、夏道迄走り降りた。

1月4日 ◎ 出発(7:30)―徳沢(8:30)―木村小屋(10:50)―中ノ湯(12:00)―沢渡(13:40)  
横尾からただ沢渡を目指す。木村小屋で下山

屈を出した時には心から安心したと同時に緊張の連続であった事を思っ、改めてひやりとした。(記 森)

## 春 山 合 宿

### リーダー所感

今年は例年より雪は少なく、これは楽に行けると思ったが、入山8日目から雪が降り、ブナ立尾根・中崎尾根は、ラッセルでかなり苦しめられた。1年生には1年間の締めくくりとして、又2年生にはこれからのリーダー層としての訓練としてかなり成果が上がったと思われる。これだけの多人数を始めてリーダーとして連れていった我々8年は、真底疲れたというのが本根である。最初から最後まで我々の手によってトレースをつけられたことは、それなりに充実していた。アタックでは暴風に見舞れ、下級生に不安を与えてしまった。天気図から悪化は分かっていたのだが、穂高であること、午前中はもつだろうという安易な気持がそうなきしたのであるが、リーダーとして謙虚に反省している。これを1つの糧として、新年度の活動を頑張ってもらいたい。(記 金谷)

### 裏銀座コース(烏帽子～槍ヶ岳)

期 間 3月16日～3月26日

参加者 金谷(L) 岡部(友) 広田 浅井  
西尾 村田 奥山 草尾 科野  
長谷川 本園 小松

3月16日 ○ 葛温泉(9:00)―ブナ立尾根取り付きCS(12:30)

暖かい陽ざしの中、林道を行く。少々暑い程の好天である。昼過ぎにはブナ立尾根の取り付き

の広い河原にテントを張り、金谷・村田は尾根の偵察に出る。

3月17日 ◎のち⊗ CS(5:50) - 1,600m付近(9:00) - 2,208m CS(14:00)

取り付けからすぐの急な雪面に2ピッチフィックスする(ピンはブッシュ)。昼前から薄暗くなり、雪もちらつく。さほどラッセルもなく、順調に進むが所々ステップが崩れ登りづらい所もある。

3月18日 ⊗ CS(6:30) - 主稜線(12:00) 烏帽子アタック出発(12:05~14:30) - 烏帽子小屋付近(15:00)

昨夜来の雪の為、今日は昨日と一変してラッセルがしんどい。荷を担いだまま、先頭2人1組となって交替して進む。主稜に出る手前のラッセルが1番しんどい所であった。主稜に出てすぐに烏帽子アタックに出る。視界はさほど悪くないが、景色は全く望めない。烏帽子のピークに登りかけるが、途中で岩に行く手を阻止される。上級生が上まで様子を見に行くが、殆んど頂上であり、全員を上げるにはかなり時間がかかりそうなので、引き返すことになる。偵察の時も踏まなかったピークなので、上まで上がりたかった所だ。烏帽子小屋までもどりテントを張る。夕方には視界も良くなり、明日の好天が期待できそうだ。

3月19日 ○ CS(6:00) - 野口五郎岳(11:30) - 真砂岳次のポコ(13:20)

主稜線はさすがにクラストしている。アイゼンがよく効き心地よい。朝のうち少し風があったが、昼頃にはほとんどなくなり、幕営後シェラフをほす。

3月20日 ⊗のち① CS(7:00) - 三俣乗越(8:00) - 水晶小屋(12:00) 水晶アタック(12:15~15:15)

視界が悪いが出発。東沢乗越から岩稜を6ピッチフィックスして、水晶小屋に着く。陽が射してくる。水晶アタックに出るが、岩稜に再度阻まれ、途中から引き返す。残念である。

3月21日 ◎ CS(5:50) - 鷲羽岳(9:00) - 三ツ俣蓮華岳(12:00) - 双六小屋(14:00)

鷲羽岳頂上近くを巻くのフィックス1ピッチ。三ツ俣蓮華から双六小屋まで何もなくて着く。

3月22日 ⊗ CS(6:45) - 縦沢岳(7:45) - 縦沢岳の次のピークCS(12:00)

風が強い。縦沢岳のピークまで登り、6ピッチフィックスして下る。次のピークの下りにも2ピッチフィックス。視界が非常に悪くなり、風も強いので、下ったコルに幕営する。

3月23日 ◎ CS(6:10) - 千丈乗越(12:40)

朝のうち高曇り。昼から陽が照る。昨日は視界もさっぱりであったが、今日はフィックス待ちも苦にならない。計9ピッチのフィックスで千丈乗越に達する。

3月24日 ⊗ CS(7:00) - 檜頂上(8:30) - CS(11:30) (上りフィックス2ピッチ 下り フィックス5ピッチ)

低気圧と競争でアタックに出る。檜の穂先に立っても風が強く、降りることしか考えられない。肩の小屋からの帰路、風はますます強くなる。どうやら低気圧との競争に負けたようだ。テントに入りホッとす。ペグの打ち直しをする。幕営後風はさらに強くなり、用を足すのにも、テント内で確保をしてもらって外に出る。

3月25日 ◎のち① CS(7:00) - 奥丸山(13:00) - わさび小屋上部CS(17:30)

撤収時、張線に雪がついて、ローソクほどの太さになっている。フカフカの雪の中を千丈乗越から中崎尾根へ向かう。中崎尾根はすごいラッセルで、奥丸山の登りには閉口する。奥丸山を越してから皆走るとような速さで下山を急ぐが、中崎山の前迄しか行けない。

3月26日 ◎ CS(7:30) - 新穂下山(12:20)

中崎山付近のゴジラにさんざん苦しめられ、最後の曲がりくねった道で気が突になりそうになって、ようやく下山。(記 科野)

## 1979年度（昭和54年度）活動記録



## ' 79年度 現 役 部 員

C . L	金 谷	明	工土	4	( 4 )
	岡 部	友三郎	工船	4	( 4 )
	広 田	雄 彦	経営	4	( 4 )
S . L	浅 井	利 彦	基制	3	( 3 )
	西 尾	良 司	工溶	3	( 3 )
主 務	村 田	正 弘	工酵	3	( 3 )
	奥 山	宏 臣	医	2	( 2 )
	小 松	二 郎	工土	2	( 2 )
	科 野	昌 蔵	人	2	( 2 )
	草 尾	寛	工通	3	( 2 )
	長谷川	雅 一	基生	2	( 2 )
	本 園	孝	文	4	( 2 )
	大 石	真 也	工機	1	( 1 )
	越 智	栄次郎	経経	1	( 1 )
	上 月	登喜男	理物	1	( 1 )
	佐々木	徹	経営	2	( 1 )
	田 中	潤 也	医	1	( 1 )
	野 口	明	基生	1	( 1 )
	房 本	進 吾	文	2	( 1 )
	湊 本	喜 裕	経経	1	( 1 )

# 5 月 山 行

## 白馬岳新歓山行

期 間 4月29日～5月4日

参加者 金谷(L) 村田 長谷川 小松  
本園 草尾 奥山 上月 佐々木  
田中 越智 野口 大石 湊本  
木嶋(OB) 重田(OB)

4月29日 ① リフト終点(11:10)  
一成城大学小屋(12:05)一天狗原BC  
(13:55)

タクシー・リフトを乗り継いで成城大小屋まで行く。暑くてたまらない。天狗原の登りでもピッチはあがらず、BCを設営するころには天気が荒れてきたので、急いでテントにもぐり込む。

4月30日 ② BC出発(10:30)一  
雪上訓練(乗鞍岳の斜面)一BC(11:50)

朝から雪がはげしく、時間待ちして小やみになった所でお発する。終始ドンヨリした空の下で、すぐに雪が再び強くなる。

5月1日 ③のち④ BC出発(7:30)一  
雪上訓練一BC(11:00)

前日と同じ所で雪上訓練するが、雪が軟雪で能率はあがらない。主に滑落停止の訓練をしてBCへもどった。

蓮華温泉スキーツアー隊 参加者 草尾・奥山  
BC出発(9:00)一林道との出会い  
1,500m付近(11:10)一BC(14:25)

天気を気にしながらお発する。快適?にすべりおる。天気も下り坂となってきたのでひき返すが、登りはさすがにキツイ。

5月2日 ⑤ BC出発(6:30)一小蓮

華山(9:00)一白馬岳(10:10)一  
白馬大池(12:25)一BC(13:40)  
曇っているが、視界はよくきく。意気込んでアタックにお発する。みんな元気でどんどん行く。白馬岳付近は少し岩がでていいるが、何事もなく山頂へ。眺望はすばらしく、一年生はみな満足したようである。帰りは一年の田中が膝を痛め、木嶋OBと2人で分かれてBCへもどる。

5月3日 ⑥ BCお発(8:00)一阪大小屋付近(9:30)

ひさしぶりの青空の下、BCを阪大小屋付近に移し、雪訓したりしてのんびりする。

昨日登った白馬岳がくっきりとして楽しい1日であった。

5月4日 ⑦ BCお発(8:00)一親の原下山(12:00)

スキー隊と抜きつ抜かれつ下る。途中草尾が道を失い、少々遅れて下山とあいなった。

(記 越智)

(新人の感想)

佐々木 徹

山岳部に入る前にすでに悶々とした大学生活を2年も過ごしていた私にとって、今回の山行はひたすらしんどいものだった。とにかく入山からアタック、そして下山まで歩けど歩けど前は離れていくばかり。後方を見ればみんなニコニコ笑っている。前途多難を痛感した。しかしこの苦しみにもかめわらず、生まれて初めての雪山は新鮮な感動に満ち湧ふれていた。ボッカのしんどさも厳しい雪訓も、濡れたシュラフも、キビキビしたテント生活も白馬アタックも、何もかもがとにかく新鮮だった。とくに山に興味があって、山岳部に入ったわけではないが、“俺の捜していた物がここにある”という実感を今回の山行で得ることができた。早く一人前の山岳部員になれるようにトレーニングに励みたい。

後立山偵察(唐松～種池)

期 間 4月29日～5月4日

参加者 広田(L) 科野

4月29日 ◎のち⊗ 黒菱平(9:55)―唐松山荘CS(13:25)

ケーブル・リフトと乗り継ぎ、何の苦勞もなく、千メートル近くの高度をかせぐ。まずまずの天気で、八方池から不帰が良く見える。しかし、時が経つにつれ、太陽の光は力を失い唐松山荘に着く頃には曇りとなる。

4月30日 ⊗ 風

完全にガスにまかれ、テントのすぐ近くの小屋の入口もかすんでいる。不帰キレット偵察予定であったが沈とする。2人だけの沈は会話もはずまず、ただただ眠るばかり。

5月1日 ◎風 ッ CS出発(8:40)―五竜山荘(10:40)―五竜岳(12:40)―五竜上部(14:40)(ガスにまかれてルートを失う)

本日もガス。昨日よりもやや風が強い。朝の天気図をとって、不帰キレット偵察を切り捨てて、鹿島槍に向かって出発する。小屋からすぐの岩稜は、針金もついているが、気味悪く、慎重に通過する。五竜山荘まで他に問題となる所なく着くが、2人パーティの先頭でいつもせきたてられているようで、ペースがつかめない。五竜の登りに2ピッチかかる。頂上もガスの中で、地図とにらめっこ。当りをつけて一番東寄りの稜を下ったつもりが、更に東に稜を見て愕然となる。少し登り直すが、途中からトラバース気味に登る。主稜線のようなのであるが、ガスでははっきり解らず、適当な所をみつけテントをはる。夕方頃、ガスがはれて主稜線であることを確認する。

5月2日 ◎ CS出発(5:45)―切戸小屋(10:25)―鹿島槍吊尾根CS(12:55)

五竜を下りきるとやっと稜線らしくなる。岩峰も初めのうちは、概念図と一致していたものの、途中から一致せず混乱に陥り、いつのまにかキレット小屋に至る。小屋からハシゴを登り、台地状の上を少し進むと、キレットへの降り口に着く。ハイ松を支点に約20mスタカットで下る。キレットから黒部側をトラバース気味に廻り込んで、再び稜に出るのだが、ザックにブ

ッシュがひっかかり、あやうく転落するところであった。鹿島槍南峰と北峰のコルに幕営。

5月3日 ○ CS出発(5:20)―南峰(6:05)―冷池(7:10)―種池CS(9:30)

朝のうちは強風とガス。南峰を慎重に登り、冷池をめざし進むうちにガスは消え、ひさびさに太陽と対面する。冷池に着く頃には快晴となり風もすっかりおさまり、種池では無風快晴となる。半日、種池で日なたぼっこする。

5月4日 ○ CS出発(5:40)―下山(8:40)

爺南尾根、途中から柏原新道を用いて下山。この日も、もったいないくらい良い天気であった。(記 科野)

(リーダー所感)

冬期山行に備えて、後立山稜線を偵察に出かけたのだが、天候不良の為、肝心の不帰キレットの偵察を断念した。11月に課題を残してしまった。五竜から南側の問題点を挙げてみる。まず五竜岳頂上直下の岩場は約20mのフィックスが必要である。五竜からの下りは、尾根が屈曲しているのでガスが出ると迷い易い。尚、下りはやや急な雪斜面であるので、フィックスした方が良い。次に八峰キレットへの下りは懸垂約15mが必要である。鹿島槍への登りの広い斜面と、鹿島槍から冷池への下りはガスが出ると迷い易い。(記 広田)

剣岳八ツ峰

期間 4月29日～5月3日

参加者 岡部(L) 西尾 浅井

4月29日 ◎ 天狗平(9:55)―剣御前(12:50)―真砂平CS(15:00) スキーヤーでにぎわう天狗平をあとに雷鳥沢に登る。御前小屋に入山届を出し、真砂平まで腐った雪の中をひたすら下り続けると真砂平の小屋は埋まっており、夏とはかなり異なる風景

であった。

4月30日 ●のち◎

夜半から激しい雨となり、雪に変わる。四の沢の雪崩に気づかいつつ沈黙する。

5月1日 ◎ CS出発(4:30) - I峰(11:50) - II・IIIの科尔(13:35) - III・IVの科尔CS(14:15)

四の沢は昨日の新雪のわりには安定している。しかし上部はかなり急なうえ、ひざぐらいまでもぐるので、かなりのアルパイトである。I峰直下は急斜面からナイフリッジ、I峰の下りで我々は、長次郎側のルンゼを下った。後トラバースしたが、稜線通しに行くのが正解であろう。II峰の下りは、長次郎側のブッシュをめざして15m下り、科尔へトラバース。III峰の登りは三ノ窓側の雪庇に注意。III峰より20mの懸垂で4人天がやっとはれる程度のIII・IVの科尔に着く。

5月2日 ◎ CS出発(4:50) - V峰(6:00) - VII・VIIIの科尔(9:15~11:00) - 八ツ峰の頭手前の科尔(11:45) - 三ノ窓CS(12:40)

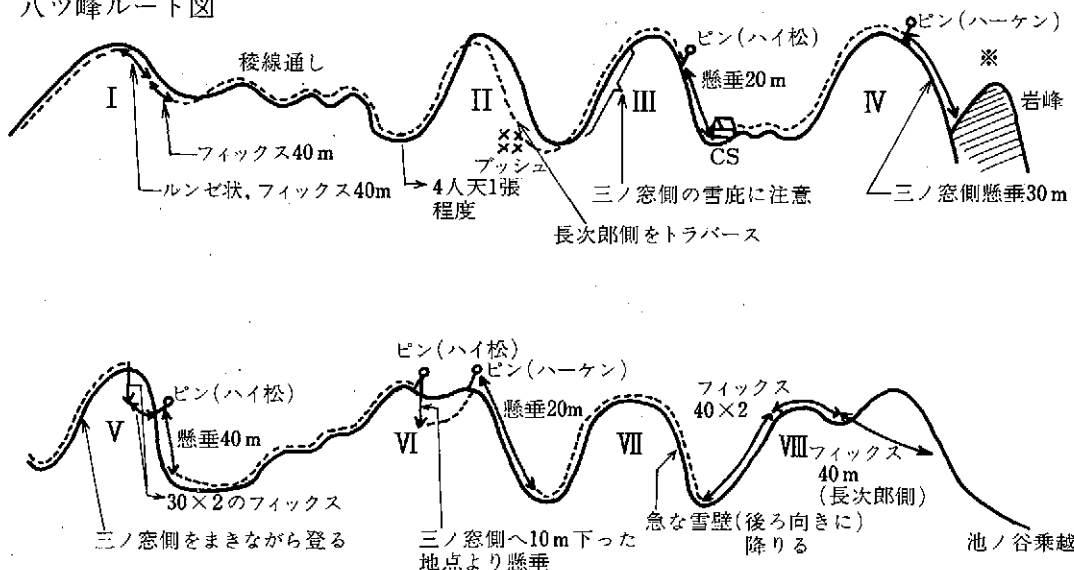
IV峰とV峰の間には長次郎側に大きな岩峰があり、IV峰の下りには三ノ窓側に懸垂30m。V峰はナイフリッジを避けて三ノ窓側を巻く。V峰の下りは長次郎側へフィックス50mして、

下った所のピンからV・VIの科尔へ懸垂40m。VII峰の登りは急な雪壁の後、三ノ窓側を巻く。VII峰直下で我々は三ノ窓側に10m懸垂し、登り返したが稜線通しがよい。VI峰の下りは残置ピトンで20m懸垂して、VII峰までは問題なく進んだが、VII峰の下りで様子を見ようとした岡部が、三ノ窓側へスリップ。沢を約250m程滑落して、ピッケルで運よくストップする。途中岩がなかった事が幸いしてか、奇跡的に無傷であった。他の2人が空荷で下って、いっしょにVII・VIIIの科尔に登り返す。しばし休んだ後、VIII峰の登りフィックス40mを張り、さらに40mのフィックスでVIII峰と八ツ峰の頭の科尔へ。ここから池ノ谷乗越へトラバースして三ノ窓へ入る。

5月8日 ① CS出発(6:25) - 池の谷出合(8:15) - 馬場島下山(9:40)  
前日V峰より真白く雪におおわれたチンネを見て、登攀を断念していたので、この日は本峰アタックの予定であったが、前日の事故を考慮して、池の谷を下る。池の谷はトレースがはっきりしていて慎重に下る。二俣を前に快晴となり、8時間強のスピード下山であった。5月の池の谷は必ず下れるとは限らないとの話(馬場島山荘の御主人)であり、注意を要する。

(記 西尾)

### 八ツ峰ルート図



# 夏山定着合宿

剣岳周辺

BC 真砂

期間 7月11日～7月22日

参加者 金谷(L) 岡部 広田 浅井 西尾 村田 奥山 草尾 小松 科野  
 長谷川 大石 越智 上月 佐々木 渡本 房本 野口

夏山を終えて

今年の夏山は、問題点が多かった。もっとも、

入山早々社会人の遭難救出に、上級生が借り出されるというハプニングから計画は大きく崩れてしまった。

問題点とは岩場での転落であるが、幸いザイル確保で事無きを得たが、よかったで済む問題ではない。当事者である部員は嚴重に反省すべきである。又リーダー層のリーダーたる自覚をこれを機会により一層うながしたい。ただ1年部員が楽しく過ごしてくれた事は喜ばしい。

日頃から定着中に遠足などへ持って行く装備を徹底させているため、いざ遭難救出に出発する時に過不足なく適切に携帯できた。

これは部員にとって一つの良い経験になったと思う。これから冬山に向けて前出のようなミスはできない。ここで今一度、心を締めつけてがんばっていきたい。(記 金谷)

行動概要

	金谷	岡部	広田	浅井	西尾	村田	奥山	草尾	小松	科野	長谷川	大石	越智	上月	佐々木	渡本	房本	野口
11								ボ		ッ		カ						
12								ボ		ッ		カ						
13	入山		入山						雪		訓							T・K
14				源一中央 ルンゼ偵察	源一中央 ルンゼ偵察			源一中央 ルンゼ偵察				雪		訓				T・K
15		入山			黒		部		別		山		遠		足			T・K
16							休				養							
17	チンネ 中央ルンゼ	奥大日	チンネ 左下左方	八峰 Dフェリス	源一中央 名大ルンゼ	下ノ廊下	八峰 Dフェリス	源一中央 名大ルンゼ	奥大日	チンネ 左下左方	下ノ廊下	チンネ 中央ルンゼ	下ノ廊下	奥大日	下ノ廊下	下ノ廊下	奥大日	T・K
18	T・K	ビバーク	T・K	T・K	八峰 偵察	ビバーク	八峰 偵察	T・K	ビバーク	八峰 偵察	ビバーク	T・K	ビバーク	ビバーク	ビバーク	ビバーク	ビバーク	T・K
19	C八峰 フェリス	C八峰 フェリス	D八峰 フェリス	T・K	源治郎	D八峰 フェリス	T・K	源治郎	D八峰 フェリス	源治郎	D八峰 フェリス	源治郎	C八峰 フェリス	C八峰 フェリス	C八峰 フェリス	T・K	C八峰 フェリス	T・K
20	下山	雪訓	下山	雪訓	ビバーク	C八峰 フェリス	T・K	ビバーク	C八峰 フェリス	ビバーク	雪訓	ビバーク	雪訓	雪訓	雪訓	C八峰 フェリス	雪訓	雪訓
21		雪訓		源一中央 ルート	源一中央 ルート	別山遠足	別山遠足	別山遠足	雪訓	雪訓	別山遠足	雪訓	別山遠足	別山遠足	別山遠足	雪訓	別山遠足	別山遠足
22								下				山						

7月11日 ● 黒部ダム(10:35)ー  
内蔵助谷出合(12:50)ー内蔵助平(1  
8:00)

雨の降る中、内蔵助平への道は非常に苦しい。  
2ヶ所ほど鎖などもあり、重荷に閉口してしま  
う。内蔵助平へ着く頃にはもう暗くなりかけて  
いた。(記 越智)

7月12日 ◎のち● CS(10:00)ー  
ハシゴ谷乗越(14:25)ー真砂沢小屋  
(18:00)

雨が強く、しばらく天気待ちをして出発する。  
道が川となり、ハシゴ谷乗越への登りは遅々と  
して進まない。ハシゴ谷乗越からもハシゴなど  
がありすべる。真砂へ下るガレ場で野口がネン  
ザしたため、野口のザックはデポして、他の者  
はBC設営のため、先へ急ぐ。前日と同様BC  
を設営した時は、暗くみんなバテバテであった。  
(記 越智)

7月13日 ① BC(7:30)ーハツ峰  
I・II峰間ルンゼ(9:30ー13:45)  
ーBC(14:30)

何日ぶりに太陽を見る。雪はかなり残って  
おり、ハツ峰I・II間のルンゼの上部で雪上訓  
練を行う。前日デポしておいた野口のザックを  
村田・小松・科野が回収へ行き、後合流する。  
雪上訓練は一年の人数が多くて量的に多くな  
すのは無理である。天気が良く気持ち良かった。  
尚、本日より野口は沈澱となる。(記 上月)

7月14日 ◎のち●

雪訓 参加者 金谷 広田 村田 奥山  
小松 科野 長谷川 大石  
越智 上月 佐々木 房本  
湊本

BC出発(10:40)ー雪訓地(11:3  
5)ーBC(12:45)

悪天をついて行くが、すぐに雨が降り出し、  
早々とBCにもどる。

源治郎I峰中央ルンゼ偵察

参加者 浅井 西尾 草尾

BC出発(10:30)ーBC(13:30)

中谷ルートを取り付きはラントクluftを3〜  
4m降りれば良いが、中央ルンゼへのそれはか  
なり深い。右岸から行った場合、ハーケンをう

たないと取り付きへ行けそうになく、左岸からの  
方が良い。尚、ルンゼ内は水が流れ、登れるよ  
うな状態ではない。(記 草尾)

7月15日 ◎のち●

黒部別山遠足 参加者 金谷(L) 広田 浅  
井 西尾 村田 奥山 草尾 小松 科野 長谷川  
大石 越智 上月 佐々木 湊本 房本

BC出発(7:15)ーハシゴ谷乗越(8:  
30)ー黒部別山(10:30〜11:25)  
ーBC(14:00)

今日も天気が良くないので、全員で遠足へ行  
くことにする。ハシゴ谷乗越から別山までの尾  
根は、踏跡はあるが、かなりのブッシュの急登  
であった。別山付近はお花畑もあり、気分の良  
い所であった。後立山も眺望できてのんびりす  
る。帰路で雨にあい、全員ずぶぬれになった。  
(記 佐々木)

◎長次郎雪溪遭難者救助

参加者 金谷(L) 岡部 広田 浅井 西尾  
村田

社会人の2人パーティーの1人が長次郎雪溪  
左俣に主稜線から転落したため、その救助を上  
級生が援助した。

16:00:岡部・広田・浅井・村田は、長次  
郎雪溪へ向かう。西尾は剣沢小屋  
へ。

18:00:金谷、長次郎雪溪出合へトランシ  
ーバ中継のため出発。

20:30:金谷一時帰幕。20:00頃遭難  
者を降ろし始める。

23:30:金谷、長次郎出合へ再び出発。

7月16日 2:30:剣沢小屋まで遭難者  
を引き上げる。その夜は剣沢  
小屋に宿泊。

10:00:全員帰幕。

7月16日 ①

前日の遭難救助のための休養。

7月17日 ◎時々①

<下ノ廊下ビバーク><奥大日ビバーク>  
<ハツ峰六峰Dフェース富山大ルート><チン  
ネ左下・左方カンテ><チンネ中央チムニー>

〈源治郎I峰中央ルンゼ〜名大ルート〉は登攀およびビバークの項を参照。

7月18日 ◎時々●

〈ハツ峰三稜偵察〉は登攀、ビバークの項を参照。

7月19日 ◎

ハツ峰Ⅵ峰Cフェース

参加者 金谷(L) 岡部 越智 上月 佐々木 房本

BC出発(5:10)―取り付き(8:25)  
―登攀終了(11:50)―BC(13:45)

曇天の下、Cフェースに取り付き、先行パーティの時間待ちをして、金谷・佐々木・越智のパーティ、続いて岡部・上月・房本のパーティで剣稜会ルートに取り付き。4年生は連日の事故でかなり慎重であった。1ピッチ・2ピッチ目は簡単なフェースをホールド、スタンスを拾いながら登る。3ピッチ目は高度感のあるリッジで、これを通過して、階段状の岩場を登るとCフェースの頭である。簡単なルートではあるが、初めての岩登りに終始緊張した。(記 越智)

ハツ峰Ⅵ峰Dフェース(敗退)

参加者 広田 村田 小松 長谷川

BC出発(5:10)―取り付き(8:50)  
―BC(13:45)

村田・長谷川のパーティが、まず富大ルートに取り付き。右のルンゼ状から左へトラバースする所で、トップが滑落、確保地点にいた広田の上に落ちてくる。壁は濡れており、連日の事故も考えて、両パーティ共、登攀を断念した。Cフェースパーティを待ってBCへ向かう。

(記 長谷川)

〈源治郎ビバーク〉は、登攀、ビバークの項を参照。

7月20日 ①時々◎

雪上訓練

参加者 岡部 浅井 長谷川 越智 上月  
佐々木 房本 野口

BC出発(5:30)―平蔵谷下部において雪訓(7:30~10:00)―BC(10:30)

足を痛めていた野口、風邪の浅井を混じえて、平蔵谷下部のかなり急傾斜の斜面で雪上訓練をする。雪は固くキックステップのよい訓練となった。(記 越智)

ハツ峰Ⅵ峰Cフェース

参加者 村田 小松 湊本

BC出発(5:10)―取り付き(7:20)  
―終了(10:28)―BC(11:55)

1年で岩のまだなかった湊本を連れて岩登りに出かける。技術的になんら問題はなく、慎重にホールド、スタンスを求めて登るが、高度感には抜群であった。(記 湊本)

7月21日 ①時々◎

雪上訓練

参加者 岡部 科野 小松 湊本 大石

BC出発(5:06)―平蔵谷出合で雪訓(5:55)―BC(9:40)

立山別山遠足

参加者 村田 長谷川 草尾 奥山 越智

上月 野口 房本 佐々木

BC出発(5:00)―剣沢小屋(7:30)  
―立山別山(8:30)―BC(10:30)

天気も良いので、別山へ向かう。別山のあたりはのんびりとして非常に気持がよい。剣岳は大きく頂上でのんびりとそれを眺める。BCへもどる時はいつもの競争となる。

(記 越智)

〈源治郎I峰中谷ルート〉は、登攀・ビバークの項を参照。

7月22日 ◎

黒四ダム方面下山

メンバー 岡部 浅井 奥山 科野 長谷川  
小松 越智

BC出発(8:05)―内蔵助平(10:4

0) - 黒四ダム下山(14:20)

#### 室堂方面下山

メンバー 西尾 村田 草尾 大石 上月  
野口 房本 湊本 佐々木

BC出発(8:10) - 剣沢小屋(10:00) - 御前小屋(10:55) - 室堂下山(12:15)

(登攀およびビバークの項)

#### 下ノ廊下ビバーク

参加者 村田(L) 長谷川 越智 佐々木 湊本  
7月17日 ◎のち① BC出発(5:50) - 内蔵助平(7:50) - 内蔵助谷出合(8:50) - 白竜峽(12:25) - 阿曾原(15:50)  
全面通行禁止となっていたため、(下ノ廊下は)道が荒れていて途中崩れた雪渓もあり、肝をひやす。1年生3名は黒部、特に白竜峽あたりの美しさ感激していた。阿曾原に着く頃はみんなヘトヘトだった。

7月18日 ◎ BS出発(5:40) - 仙人池(9:45) - BC(12:10)

寒くないビバークであった。前日の疲労の為、1年生がバテてペースが遅れる。ガスで仙人池から八ツ峰が眺められなかったのは残念だった。  
(記 佐々木)

#### 奥大日ビバーク

参加者 岡部(L) 小松 房本 上月  
7月17日 ◎のち① BC(5:40) - 御前小屋(8:45) - 奥大日岳(11:05) - 大日岳(12:45) - 室堂乗越BS(15:20)  
雄大な剣を右手にひたすら歩く。人もおらず大日岳の辺りはのんびりとした所である。

7月18日 ◎ BS(4:45) - 剣山荘(9:25) - BC(10:30)

風が強く、御前小屋あたりで時間待ちする。後は、BCへ走り下る。

#### 八ツ峰Ⅵ峰Dフェース富大ルート

参加者 浅井(L) 奥山  
7月17日 ◎のち① BC出発(5:30) - 取

り付き(8:45) - 登攀終了(12:05) - BC(14:15)

久留米大ルートのハングはすぐそれとわかる。富大ルートはその左下の5~6メートルのシュールントを降りた所で、シュリングが垂れており、わかりやすい。

1P:かぶり気味のフェースを大きなホールドを頼りに登ると傾斜の落ちたフェースに出る。15mほど登るとピンと片足ののるスタンスがあるのでアブミを出して確保する。

2P:少し右寄りにルートをとりすぎていたため、凹状のフェースを左上すると、脆いフェースとなり富大ルートに入っていることが確認される。浮石が多く、ホールドを1つ1つ確かめながら登る。

3P:凹状のフェースの右のフェースを登る。ホールドもしっかりとしていて登り易い。ルート図によるとこのピッチが核心部だが、2ピッチ目の方が難しい。幅50cmほどの上昇バンドに到着する。

4P:上昇バンド沿いに左上して廻り込むと下の切れ落ちたフェースに出る。この廻り込むあたりが難しいが、あとは快適にリッジに出る。

5P:このピッチより、典型的なりッジ登攀となる。特に左側が切れ落ちているので高度感には充分である。フリクションがよく効くので大胆に登れる。

6P・7P:傾斜の落ちたリッジをどんどん登っていくとやがて終了点となり、さらに30mでⅥ峰の頭へ出る。(記 奥山)

#### チンネ中央チムニー~aバンドbクラック

参加者 金谷(L) 大石  
7月17日 ◎のち① BC出発(5:30) - 取り付き(10:30) - 登攀終了(13:12) - BC(15:40)

1P:チムニー内は岩が脆く、少し水が流れていたため右側のカンテを登る。ピッケルがチムニーでひっかかって登りにくい。

2P:1Pと同様である。やがて浮石が増してくるので注意。中央バンドに到着してピナク



ルまで登る。

3 P : aバンドは浮石に注意するだけである。

4 P : bクラックも別に問題となる所はない。

快適なクラック。

5 P : フェースから岩溝へ。ここを登ると終了点である。

左下・左方カンテ隊と合流して下る。池の谷乗越あたりは怖い所である。(記 大石)

### チンネ 左下・左方カンテ

参加者 広田(L) 科野

7月17日 ◎のち① BC出発(5:30)ー取り付き(10:00)ー登攀終了(14:20)ーBC(15:40)

1 P : アブミでハングを越す。ピンも適当にあり、良く効いている。

2 P : 白い岩の左方からカンテに出ようとするが脆くて断念。カンテの左のガレ状に行く。

3 P : カンテに行く。フリクション抜群。快適なピッチであった。

4 P : 浮石多く少し行った所でザイルを巻いて、中央バンドへ。

5 P : 始めカンテの左側、途中右側にうつりA<sub>1</sub>となる。最後、再び左側にでてピッチを切る。A<sub>1</sub>はハーケンだらけでA<sub>0</sub>でも行けるだろう。

6 P : 単なるアブミの掛け替え。

7 P・8 P・9 P : 左稜線に出る。簡単な岩稜でザイルの流れが悪い。

取り付きまでのルンゼのトラバースは悪かった。今日のチンネは人が少なかった。

(記 科野)

### 源治郎 | 峰下部中央ルンゼー上部名大ルート

参加者 西尾(L) 草尾

7月17日 ◎のち① BC出発(5:10)ー中央ルンゼ取り付き(7:30)ー中央ルンゼ終了(9:45)ー名大ルート取り付き(10:55)ー登攀終了(15:30)ーBC(18:45)

取り付きへはルンゼ右岸の6m位の垂直のラントクルフトに下る。ザイルを出してアイゼンで慎重に下る。底から中央ルンゼの取り付きまで難しく、緊張する。

1 P : 右岸のフェースを登ってF4の下へ。

2 P : チョックストーンの裏から左のフェースを登る。スタンス・ホールドが小さい上に、一面に水が流れており、ハーケンを頼りに登る。コンテでF5の下へ。

3 P : 凹角となったF5を両手足を左右につばって乗越す。

4 P : コンテでも充分いける。

5 P : 左側のスラブを登る。スタンスの大きい所を選べば楽である。

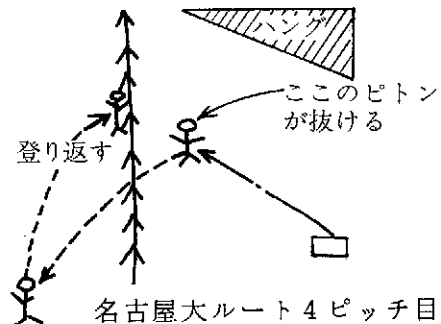
ここからほとんどコンテで中央バンドへ。ここから中央バンドを左へ。名大ルートのオーバーハングが目印である。

○中央ルンゼは沢登りの要素が強く、確保地点は安定していない。落石の危険が多いので、注意したい。

### 名古屋大ルート

1 P・2 P・3 P : 浮石は多いが、簡単なピッチである。

4 P : 草尾がトップで、オーバーハング下のフェースをハーケンを握りながら、左ヘトラバースしてカンテに出る。カンテに出る所で、アブミを一合出して残置シュリングを握りながら伸び上がった時、ハーケンがぬけて6m程転落する。幸い空中で停止する。そこがカンテの左側のフェースに接する所だったので傷もなく、すぐカンテの上上がる事ができた。カンテに上って心を落ちつける。ザイルを見るとカンテに擦れたためか、傷が多い。西尾の所へもどるには、クライミングダウンか振子トラバースしかないが、ザイルの損傷を考えて不可能と考えた。ハーケンを打ち



直してさらに登ることにする。アブミを使いながら登るが、ハーケンは甘く手で抜けるものが多い。途中ランニングビレーをとりすぎ、動けなくなるが、運よくテラスに到着する。ザイルは25m位のびていた。

5P:ここもハーケンは甘く、ハーケン2枚、ナッツを使い、ようやくこのピッチを抜ける。ザイルの傷のない部分を使ったので、ザイルの長さ35mくらいになった。

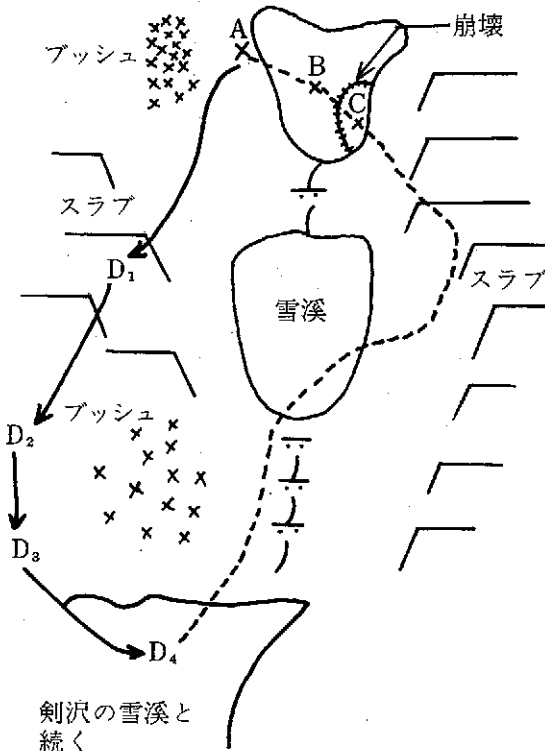
6P・7P・8P:コンテでもいけるが、慎重にザイルを出して行く。源治郎尾根の下降は、末端で懸垂1ピッチである。

名大ルートは今年ほとんど登られてないようで、ハーケンは甘い。未知のルートはAよりアブミを使うべきである。ザイルはダブルに限るべきであろう。(記 草尾)

### 三稜偵察

参加者 西尾(L) 奥山 科野

BC出発(5:45)-図C点(6:30)  
-BC(10:00)



100~150m程沢をつめた所で雪溪が崩壊して奥山が落ちる。

先に西尾トップでC→Aまで行く。科野B地点、奥山がC地点の時、ゴーという音と伴に雪溪が割れ、奥山が雪溪の間に落ち、左足を強打する。生命には別状なし。

A地点より懸垂で西尾が奥山を救出に行く。無事救出する。

A地点より、ザイル3P(A→D1→D2→D3)、懸垂1P(D3→D4)でD4へ到着する。奥山はキックステップができないので、アイゼンをつけて雪溪を下る。(記 科野)

### 源治郎ビバーク

参加者 西尾(L) 草尾 科野 大石

7月19日 ◎ BC出発(5:05)-源治郎I峰(9:05)-II峰フェース取り付け(9:45)-II峰ピーク(11:15)-本峰(13:30)-三ノ窓(15:50)-小窓(18:25)

II峰フェースは、西尾・大石はBフェースカントルート、草尾・科野は、A・Bフェースルートを登る。両方とも3ピッチで終了するが、A・Bルートは取り付けを間違えたようで、ブッシュ漕ぎとなる。取り付けに荷をデボして登ったので、もどり、本峰へ急ぐ。本峰まではガラガラの道で、本峰から池ノ谷乗越は道の上に浮石が多く慎重に行く。小窓はテントが2張あるだけで、静かであった。

7月20日 ◎ BS(4:50)-池ノ平山(6:55)-仙人池(7:40)-BC(10:25)

池ノ平山の登りは、フィックスロープに導かれる。池ノ平・仙人池からのハツ峰の景色はすばらしい。1時間も、休息してしまった。

(記 大石)

### 源治郎I峰下部中谷ルート

参加者 浅井(L) 西尾

7月21日 ◎ BC出発(4:50)-取り付け(5:45)-登攀終了(12:15)-B C(15:30)

中谷ルート取り付けは、中央ルンゼすぐ右のスラブ。中央ルンゼよりの凹角にバリエーション

があるが、取り付くべきでない。

1P：単純な人工で直上する。

2P：スラブの危険なトラバースから、草付きの凹角に入る。凹角上部はA0だがピトンは少なく、変則的な登り方となる。

3P：ここもスラブのトラバースである。外傾したホールド、スタンスで非常に難しい。ピトンの間の距離は遠く、時間を要する。

4P：チムニーよりクラック。クラックは左がかぶっており、右側はツルツルのスラブでピトンは少ない。限界的なフリーでクレッターのフリクションを最大に生かして登る。

5P：核心の大凹角に入る。凹角内は、石がつまったかぶり気味のチムニーの連続である。チムニーとスラブ登りを交互に繰り返して登る。落石には注意が必要である。

6P：快適なチムニーからリッジ。

7P：チョックストーンからスラブに取り付くがトラバースの途中でホールドが2つ崩れて、肝をひやす。やがて終了点に出る。

・このルートは、ピッチグレードは全て一級増しに考えねばならず、Ⅳ級はⅤ級なみだ。スラブのトラバースは草付きと外傾ホールド・スタンスであり、大凹角のテラスは落石が多い。ポルト、ピトンは効いているが要所にしかなく、その間のフリーは困難を極める。登山靴での登攀はなるべく避けて、クレッター、運動靴で登るべきであろう。（記 西尾）

## 夏 山 縦 走

### 立山～槍ヶ岳

期 間 7月24日～8月3日

参加者 村田(L) 本園 大石 上月 湊本

7月24日 ◎のち● 室堂(12:20)ー

剣沢小屋(15:30)

7月25日 ●

剣岳アタックの予定であったが、風雨が強く沈澱とする。

7月26日 ① CS(5:00)ー一の越(8:35)ーザラ峠(12:15)ー五色ヶ原(13:15)

昨日とは違って変わった好天の下、縦走の第1歩を踏み出す。夏休み中のこともあって、立山は軽装で運動靴姿の人でいっぱい。一の越へは登ってくる小学生の挨拶に辟易しながら、落石に注意して下る。五色ヶ原は水の豊富な大草原で、実に気持ちがいい。

7月27日 ◎のち① CS(5:25)ーガスで道をまちがへ五色ヶ原へ戻るーCS(6:30)

湊本の体調が悪く、次の天場まで行きつけそうにない。長期にわたる山行でもあるし、大事をとって沈澱とする。各自好き勝手に散策でのどかな午後を過ごす。

7月28日 ◎のち● CS(5:15)ー越中沢岳(7:10)ースゴ小屋(11:00)ーCS(12:00)

今日は皆体調十分でおおにとばす。10時頃から雨が降り始め、ぬかるみの道に気が滅入る。やっと着いたと思ったスゴ小屋から天場までは延々とした登り1時間もあり、とんだ食わせものだ。

7月29日 ●

風雨ますます強まり沈澱。1日中寝て過ごす。

7月30日 ○ CS(4:45)ー間山(5:20)ー北薬師岳(7:00)ー薬師峠CS(11:00)

今度の山行中一番の快晴。午後は薬師沢への降り口の偵察。

7月31日 ①

<沢登り> CS(5:40)ー薬師沢小屋(7:10)ー赤木沢ー稜線(12:20)ーCS(14:15)

天場から地下足袋で出発する。赤木沢は水量少なく、滑滝の連続するたいへん美しい沢で感動する。危険箇所も無く、滝はすべて高巻いた。

8月1日 ① CS(5:10) - 黒部五郎  
岳肩より山頂へアタック(8:45~9:4  
0) - 黒部五郎小屋(11:30) - 三俣山  
荘CS(15:15)

太郎山・北の俣岳・赤木岳はだらだらした登り  
で何の特徴もない。黒部五郎からは稜線を行  
かずカールに降りる。小屋付近は牧歌的な雰  
囲気の非常に良い所で思わず幕営したくなるも、  
時間も早く三俣まで足を延ばす。山荘へはトラ  
バース道に行く。

8月2日 ② CS(5:00) - 双六小屋  
(7:00) - 千丈乗越(10:35) -  
槍ヶ岳(11:50) - 殺生小屋CS(13:1  
5)

三俣山荘から双六小屋まではトラバース。一  
日中ガスで槍のピークでも何も見えず、感動も  
今一つ。肩の天場は満員でしぶしぶ殺生小屋ま  
で降りる。

8月3日 ③ CS(4:55) - 上高地下  
山(10:20)

天候に悪天の兆が見える中、槍沢を下る。林  
道に出てからはいつもの下山ペースで、一気に  
上高地へ。(記 上月)

### 南アルプス縦走(北岳~茶臼岳)

期日 7月24日~7月30日

参加者 長谷川(L) 奥山 越智

7月24日 ①のち② 広河原(8:50) -  
二俣(11:10) - 八本歯のCOL(14:  
00) - 北岳稜線小屋CS(15:15)

本日より入山にもかかわらず、芦安でバスに  
乗り遅れてしまう。越智の体調がすぐれず、二  
俣あたりよりペースが落ちる。予定では北岳越  
えで、稜線小屋に行く予定だったが、天気も悪  
く、明日の好天に期待してトラバースして小屋  
まで行く。

7月25日 ③のち④ CS(5:00) - 北  
岳アタック-CS(6:30) - 間ノ岳(8  
:05) - 農鳥小屋(9:30) - 西農鳥岳  
アタック-熊ノ平(13:20)

北岳のアタックは眺望もすばらしく、プロッ  
ケン現象も見られた。テントを撤収して、農鳥  
岳に向かうが、天候は下り坂となり、間ノ岳の  
登りはつらかった。農鳥小屋に荷物を置いて、  
すばやくアタックをすます。天候は回復し青  
空の下、ひたすら熊ノ平まで歩く。

7月26日 ⑤のち① CS(5:20) - 塩  
見岳(10:05) - 本谷山(12:40)  
- 三伏CS(13:30)

他パーティーと抜きつ抜かれつ行く。山岳部  
の面目にかけても負けるわけにいかず、一  
気に塩見岳を登りきる。天気も良く、頂上での  
んびりする。三伏峠までは、本谷山の登りが曲  
者であった。三伏峠の幕営地は、人が多く閉口  
した。

7月27日 ⑥のち● CS(4:40) - 高  
山裏CS(9:40)

風が強く、寒い一日であった。行程が短く、  
屋前から高山裏でゴミ捨場の隣りにテントをは  
ってのんびりする。

7月28日 ⑦のち● CS(4:10) -  
荒川前岳(6:25) - 赤石岳(10:15)  
- 百間洞(12:00)

暗いうちからローソクを手を持って行動。  
荒川の登りはアツという間である。やがて天気  
は悪くなり、寒くてヤッケを着る。赤石岳あた  
りでは風雨が強まり、頂上直下の避難小屋にお  
いて休憩。百間洞まで道を失なわないように駆  
け下る。

7月29日 ● CS(5:00) - 中盛丸  
山(6:30) - 聖岳(9:30) - 聖平  
(11:30)

本日も風雨が強く、つらい出発である。終始  
下を向いて雨の中に行く。聖岳の登りで少し  
道を間違えたが、何とか聖岳に到着する。何の  
感動もなく、縦走最後の3,000mを後にする。

7月30日 ⑧のち① CS(4:45) - 上  
河内岳(7:00) - 茶臼小屋(9:45)  
- 畑一ダム下山(13:15)

今日もガスの中を出発。今日も雨かと思っ  
ていた所、突然、パッとガスが切れて青空が広  
がる。上河内岳に登り、今までやってきた山々を

振り返る。久しぶりの好天に感謝して気持ちよく行く。予想外のペースに驚きつつ、一気に下ることにする。山から下るにつれて暑さも増してくる。昨日までヤッケを着て震えていたのが嘘のようだ。ダムに着いた時はさすがに喜しかった。とにかく、体力の重要さを痛感した山行であった。(記 越智)

### 剣岳北方稜線(毛勝山～白狭山)

期日 7月24日～7月30日

参加者 西尾(L) 草尾 房本 佐々木

7月24日 ①のち● 片貝第5発電所(11:15)→東又谷取り入れ口(12:15)→1,020m二股CS(14:30)

7月25日 ● CS(5:55)→支尾根の安全地帯(6:30)→昨日のCSの100m程上流CS(9:00)

朝、天気図をとろうとしていると突然増水が始まり、大急ぎで撤収し、すぐそばの急な支尾根に避難する。水位が下がるのを待ち、ザイルを出して沢に下降し、少し上流の草地にテントを張る。

7月26日 ◎ CS(5:00)→三階棚の滝(7:00)→1,450m付近CS(14:30)

三階棚の滝は右側の岩溝を空荷で登り、荷上げして通過する。沢が右曲するあたりで雪溪が現れるが、崩壊の心配があるので右岸のブッシュに突入するが、これが強烈で水平距離にすればせいぜい何百mのところ3時間以上を要する。しかし途中、雪溪の崩壊する音を聞き、苦勞の甲斐があったと思う。結局その日はアプザイレンで雪溪におり、左岸に渡ってCSとする。

7月27日 ●のち① CS(6:00)→毛勝山(9:20)→釜谷山(11:05)→猫又山CS(13:15)

雪溪の急登のあと、さらにハイ松の斜面を急登し待望の稜線に出る。稜線上もブッシュはあるが踏跡もあり、前日の雪溪の高巻きと比べると至極快適である。猫又山があまりにも気持ちが良いので今日はここまでとする。なお、

稜線直下に雪が残っているので水に不自由はしなかった。

7月28日 ● CS(4:55)→事故発生(7:20)→ブナクラ乗越CS(9:10)

猫又山からブナクラ乗越へは稜線を忠実にたどればよいのだが、濃いブッシュの中に不明瞭な踏跡が何本もあり、何度も迷い込む。途中、ガレたところで佐々木が上部からの落石をふくらはぎに受け、転倒2m程ずり落ちる。それを助けようとした草尾の膝に2発目が激突する。このアクシデントにより今日はブナクラ乗越までとする。

7月29日 ●

天候悪化の予報と負傷という事情で、明日行けるところまでアタックしてブナクラ谷を降りることを決め、今日は沈殿とする。

7月30日 ① CS(5:00)→赤谷山(7:30)→白萩山と赤ハゲのCOL(9:20)→CS(13:30)→林道(17:30)→馬場島(18:25)

ようやく好天となり眼前に美しく続く剣岳への稜線に後ろ髪を引かれる思いで下山する。

入山早々の増水でハンゴウを流され、富山で店員がガスと灯油を間違えて渡したため、ブスがほとんど使えずエッセンに大変時間がかかってしまった。その上連日の悪天候、2名の負傷とアクシデント続きで、当初の剣岳までという計画から見ると無残な敗退という結果に終わった。しかし終始泥まみれになって這いずりまわった今回の山行は、整備された登山道をひたすら歩くだけの山行では得られない何かを与えてくれたように思った。(記 佐々木)

### 黒部川上ノ廊下

期日 7月23日～7月29日

参加者 浅井(L) 小松 科野 重田(OB)

7月23日 ①のち◎ ダム(10:50)→平小屋(14:40)→針ノ木谷CS(17:40)

遊覧船乗り場で重田OBの差し入れのスイカを食し、装備分けを行い出発する。平ノ小屋まで水平道をひたすら歩く。渡しの時間に遅

れ、次の渡しまでのんびりする。予定では東沢出合まで行くことになっていたが、17:00の渡しに乗ったので、針ノ木谷に入り幕営する。7月24日 ①のち◎ CS(6:50)ー東沢出合(10:25)ー口元ノタル沢出合(14:45)ーCS(16:00)

東沢出合はるか手前で河原に降りてしまい、出合までかなり時間を食う。出合までに3回徒渉。東沢出合からニセ下ノ黒ビンガまでは河原状を大した徒渉もせずに行く。ニセ下ノ黒ビンガのあたりで流れは左にゆるく曲がり(下流から上流に向かって見て)、ここで左岸から右岸へ徒渉する。続いて流れは右へ大きく曲がり、2回の徒渉を行い下ノ黒ビンガの対岸に出る。下ノ黒ビンガはいたる所にハングを有し、全面が黒っぽい急傾斜の岩壁。下ノ黒ビンガの下へ徒渉する。下ノ黒ビンガの真下で流れは左に大きく曲がり、トロ状になっている。左岸をへつるが困難なため、水の中に入ると、底は意外に浅くスナリと通過する。口元ノタル沢を通過して大ゴルジュにぶつかる。左岸を偵察をかねてトラバース気味に進むが、行けぬので高巻く。高巻き1ヶ所足場が崩れている所があり、ザイルを出す(10m)。30分程で高巻きを終了。雪崩で土が盛り上がった所をCSとする。

7月25日 ●のち◎

昨夜からの雨で、テントもビショビショとなる。この日富山県下に大雨・洪水・雷雨注意報がでていた。黒部の流れは、昨日までの緑色から黄土色に変化している。

7月26日 ① CS(6:50)ー金作谷出合(9:45)ー赤牛沢(14:45)ー立石 CS(15:00)

流れが再び緑色をとりもどす。昨日の色が嘘のようだ。ローカ沢出合付近は、土砂が崩れた後のよう(ナダレによるものよう)であった。広河原を過ぎてから両岸が狭まり、岩が赤味を帯びてくる。上の黒ビンガの少し下流で徒渉。金作谷出合には雪が残っている。金作谷出合を過ぎてから、ようやく廊下らしくなる。陽ざしが心地よい。90°屈曲点の500m程手前で右

岸を10m程登り、トラバース(ザイル)。90°屈曲点の周りより足を水につけることなくすんなり立石に着く。

7月27日 ①のち● CS(6:50)ー薬師沢出合(12:55)ー赤木沢出合 CS(15:00)

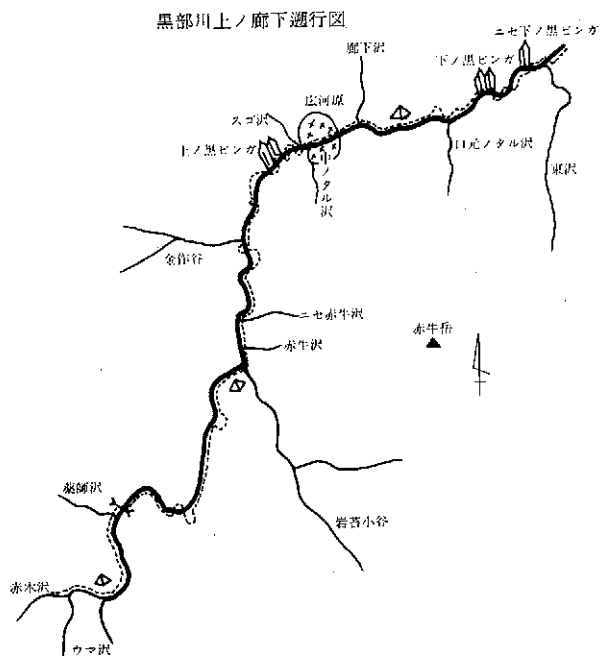
奥ノ廊下は立石から約8km程ずっと右岸通し。左岸の方が行き易そうであったが、曇天と流れを眺めると徒渉する気が失せてしまう。立石から約1km、1回目の高巻き。水中にスタンスを求めへつり気味に行くがすべってしまい進めないで、小さく高巻く。2回目の高巻きはへつれそうであったが流れをまともに受けるので無理と判断して高巻く。高巻きの下り15mの懸垂。少し進むとゴムボートで下降中のパーティに会う。赤木沢出合には行けども行けども着かず、閉口する。突然すてきなトロとナメが現わる。赤木沢出合である。ホッとす。夕方、にわか雨が降る。

7月28日 ◎のち● CS(6:40)ー稜線(10:10)ー黒部五郎小屋 CS(18:00)

朝、雲行きが怪しい。赤木沢なら平気であろうと出発する。赤木沢は非常に美しい。晴天の時に来たかった。途中から雨が降り出し、稜線に出る頃にはドンシャ降りである。重田OBは折立下山のため別れる。雨が降る中黒部五郎小屋に着く。あまりの雨にここにテントを張る。

7月29日 ● CS(7:00)ー双六小屋(10:00)ーワサビ平(13:15)ー新穂(14:15)

雨の中をひた歩き、何もかも濡れて新穂に下山する。錫杖の岩登りも断念して神岡行きのバスに飛び乗る。(記 科野)



# 10月個人山行

白馬岳～親不知（梅海新道）

期 間 10月10日～10月14日  
 参加者 科野（L） 長谷川 大石 越智  
 上月 房本

10月10日 ◎のち① 梅池自然園（11：25）→天狗原（12：30）→白馬大池（14：55）

大町で朝食を食べていると食堂から後立山が見えてきた。雪がかなりついており、予定していた不帰キレットの通過は1・2年生パーティーでは無理と判断して、白馬岳から入山することにする。紅葉の中、のんびりと出発。いつ

もながらに初日はしんどい。大池の幕营地はのんびりした所だ。

10月11日 ①のち◎ CS（5：45）→白馬岳（9：20）→白馬山荘（10：20）

天気はまずまずであるが、非常に寒い。疲労もあり、食料もあることで白馬山荘で行動を打ち切る。午後から天候が崩れる。

10月12日 ①のち● CS（6：20）→雪倉山（9：50）→朝日岳（13：45）→CS（14：35）

白馬へはアイゼンを効かせて登り直す。三国境を越えた所で水を補給して出発する。雪倉への登りは急登である。雪倉で展望を楽しんで、一気に朝日とのコルへ下る。朝日岳の登りもきつく、おまけに雷が鳴り出し雨も降り出す。少々時間待ちしてガスの中を頂上へ。頂上もそこに梅海新道に入る。

10月13日 ① CS（5：30）→黒岩平（7：35）→犬ヶ岳（12：20）→さわがに山荘（12：45）

靴を外に出しておく、凍ってしまうほどであった。長梅山で日の出を見て、2つの湿原を通過する。この湿原はすばらしく大きな物で、のんびりする。越智の靴擦れがひどく、治療して出発する。ここを過ぎると低山の様相となり、1ヶ所細い稜線となるが犬ヶ岳に到着する。よい幕营地もなく、さわがに山荘に入る。水はかなり下まで行かねばならず苦勞する。

10月14日 ① CS（6：20）→白鳥山（10：40）→風波川との分岐（13：25）→下山（15：30）

本日も快晴。それにしても暑い。しかもすごい下りである。特に金時坂と呼ばれるそこは強烈である。白鳥山は何もないヤブ山である。風波川へ下る道が崩壊しており、ザイルを出して下る。あとは河原をフラフラになりながら歩くが日本海が見えた時は、さすがに感動した。

（記 越智）

## 八ヶ岳

期間 10月10日～10月13日

参加者 奥山(L) 田中 湊本

10月10日 ①のち● 観音平入口(8:20)ー編笠山(12:55)ー青年小屋(13:30)

小淵沢よりタクシーで観音平入口まで入る。ここからは樹林帯の急登である。編笠山から眺めはすばらしく、改めて八ヶ岳の裾野の広さに驚く。しかしそれとは対照的に、これから行く権現岳以降の稜線は岩稜である。青年小屋あたりで雨が降り出す。

10月11日 ②のち① CS(6:05)ー権現岳(7:20)ー赤岳(12:00)ー行者小屋(13:30)

権現岳より切戸を越え赤岳へ向かう。権現岳の下りは長大なハシゴが2本。赤岳への登りも急で、なんとなく北アルプスの稜線にいるようだ。赤岳に着くころより晴れ始め、行者小屋を目指して駆け下る。夕日に染まる大同心、小同心が美しい。

10月12日 ①のち② CS(6:45)ー横岳(9:00)ー夏沢峠(11:00)ー黒百合ヒュッテ(14:00)

行者小屋より稜線への登りは急で、上部には鎖場も出ている。積雪期の赤岳のアプローチとしては難しいと思われた。横岳を越えると広いなだらかな稜線となる。全く八ヶ岳はコロコロとその山様を変える山である。そこがまた、この山の魅力の1つなのであろうか。

10月13日 ① CS(5:45)ー麦草峠下山(7:50)

麦草峠は、あたり一面ススキ原。実に気持ちがいい。だがその眺めも束の間、ガスでアッと言う間に何も見えなくなった。「信州」という響きがピッタリとくる北八ヶ岳であった。

(記 奥山)

## 11月偵察山行

剣御前デポ

期間 11月1日～11月3日

参加者 重田(CL・OB) 科野 本園  
小松 房本 上月 越智 湊本  
佐々木

11月1日 ○ 室堂(9:15)ー御前(13:00) 雪上訓練(14:15～15:30)

快晴の下、今年は雪も少ないようで、重荷にもかかわらずアツという間に着いた。御前付近は風が強い。小屋の中に荷物をデポして、小屋の少し上で雪上訓練をする。

11月2日 ○  
(立山アタック) CS(6:30)ー大汝岳(8:35)ーCS(11:05)ー剣沢小屋CS(13:00)

稜線はさすがに風が強い。大汝岳まで行って展望を楽しんでいると、雄山東尾根上に西尾奥山を見つける。コールをかわしてBCへもどる。ここから真砂小屋へ下る予定であったが、剣沢小屋にテントを張り、科野・本園・小松・重田が剣沢の偵察に出ると雪渓はズタズタで危険であった。しかたなく剣沢を下ることを断念した。

11月3日 ○ CS(6:00)ー室堂乗越(7:50)ー大日小屋(11:45)ー立山駅下山(13:10)

このまま室堂に下るのももったいないので、大日岳経由で下ることにする。大日岳までは、上り下りの多い稜線である。大日岳からの下りで湊本がバテてペースが遅くなり、立山駅に向かう林道ではまっ暗であった。

(記 越智)



後立山偵察(五竜岳～種池)

期間 11月1日～11月3日

参加者 村田(L) 長谷川

11月1日 ◎のち○ 地藏の頭(9:40)

—五竜山荘CS(15:10)

11月2日 ○ CS(6:00)—キレット

小屋(12:30)—鹿島槍南峰(13:

20)—布引岳手前鞍部(14:20)

11月3日 ○ CS(6:00)—冷地小

屋(7:30)—種池小屋(9:10)—扇

沢出合(11:10)

偵察報告

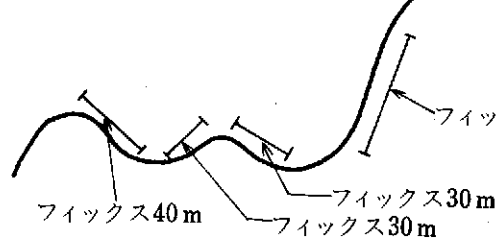
地藏の頭～小遠見山

このルートでは別に心配することはないが、1,750～1,800mへの登りは急登であるため、雪壁(スベリ台状)になると思われる。それ以降は広い稜線通しに進んでいくのだが、小遠見山へ登り始めるころになると、尾根はやせてきて左側は切れているため、少し右側にルートを取るのが良いように思われる。小遠見山のピークには赤旗が残っていたが、ピークへ登る手前と下る箇所には赤旗をうってくる。

小遠見山～大遠見山

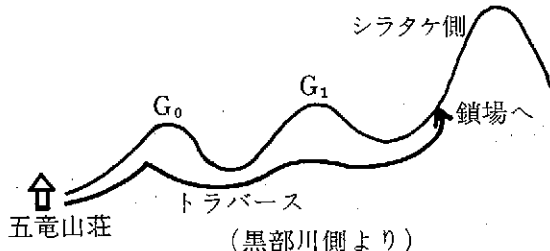
このルートは、ほとんど樹林帯の中のラッセルである。右側に雪庇ができるので注意しなければならない。大遠見山への登りは尾根通しに行くよりも少し左側を巻き気味にピークに向かうのが良いように思われる。夏道通しに行くとフィックス40m位必要となる。

西遠見山～白岳



図のように西遠見から白岳へはポコを1つ越えて、最低鞍部に下らなくてはならない。この箇所は完全にやせ尾根で右側に雪庇を伴っており、注意を要する。白岳の尾根への取り付けは雪が深く、苦しいラッセルになる。

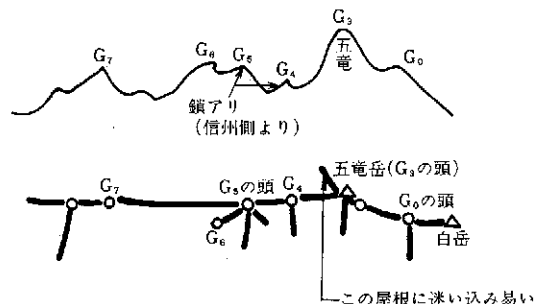
五竜小屋～五竜岳



夏道利用で行けるようである。稜線通しにも行けるが、一部がナイフリッジになるため注意を要する。時間的に大差はない。

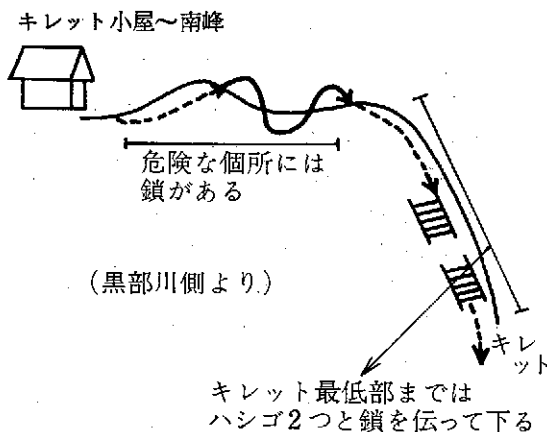
G0,G1のトラバースは斜面もきつく、1年生を通すとするとフィックスが必要である。五竜の鎖場の直下は左がシラタケ沢へ一気に切れ落ちているリッジである。ピークへはこのリッジ通しである。鎖場の取り付けの右側は雪壁となっており、取り付けを間違わないように、ピークへは鎖を伝って登る。

五竜岳～キレット小屋



五竜からは、下り口を間違いないが、無理して左斜め下へ降り始める。トラバース気味に左下へ。この下りは完全な雪壁で100m位下

ると鞍部に着く。ここからG4, G5を越えていくが、どちらも左側に取りついて右斜上する(クサリ有り)。G7の登りにかかる岩峰から少し注意を要する。鎖とハシゴのミックスでG7のピークを越えると北尾根とのジャンクションである。このあたりまで来ると、鹿島槍は眼前だ。クレット小屋へはここから2つの岩峰を越えて行くのだが、1つ目の岩峰を登るとクサリ場であり、フィックスが必要である。この下りは右のルンゼ状の所を下るのであるが、直進すれば絶壁であり、悪天時には注意が必要である。2つ目の岩峰は中程までハシゴを登り、右へ岩峰を巻いて小屋に着く。



クレット小屋からは、小屋の後ろのカクネ里側の鎖を持って取り付く。雪がつくとトラバース気味に直進して20m位行き、黒部川側へ鎖を伝って移る。ここは最も注意を要する。黒部川側の悪いトラバース20mを終わると再びカクネ里側へ移り、クレットへの下りとなる。この下りは、2つのハシゴを使って、後は鎖を持ってクレット最低部に着き、黒部川側へ移って北峰への登りとなる。登りは問題となる所もない。  
(記 村田)

#### 奥大日尾根偵察

期間 11月1日～11月5日  
参加者 浅井(L) 草尾 大石 野口

11月1日 ○ 馬場島(8:20)－中山のCOL(10:10)－1,540m CS(15:30)

東小糸谷より中山のCOLを目指す。赤布に導かれ取り付くが踏み跡はなく、ひたすらブッシュを漕ぐ。中山のCOLより笹の急登と変わり笹をつかんで強引に登る。尾根の途中にテント一張分の段とわずかの残雪があり、テン場とする。

11月2日 ○ CS(6:20)－クズバ山(10:05)－1,970m CS(15:10)

クズバ山に近づくと、稜線の細くなった所で踏跡も出てくる。クズバ山を越えると、灌木のブッシュとなり、小ピークが連続する。西大谷山はすぐ近くに低く見えているのにペースは上がりず、全く近づかない。西大谷山手前の二重山稜はブッシュも薄くなり、ここを天場とする。心配していた水も、木陰に残雪があり助かる。夕陽に輝く剣、東大谷が美しい。

11月3日 ○ CS(6:05)－西大谷山(8:00)－奥大日岳(13:45)

プラトーを過ぎ、少し笹のブッシュを漕ぐとハイ松となり、やがて雪となる。アイゼンを付けて雪壁の左の急なリッジをハイ松を頼りに登る。奥大日の頂上では景色はがらりと変わり、雪に埋もれた室堂が印象的であった。

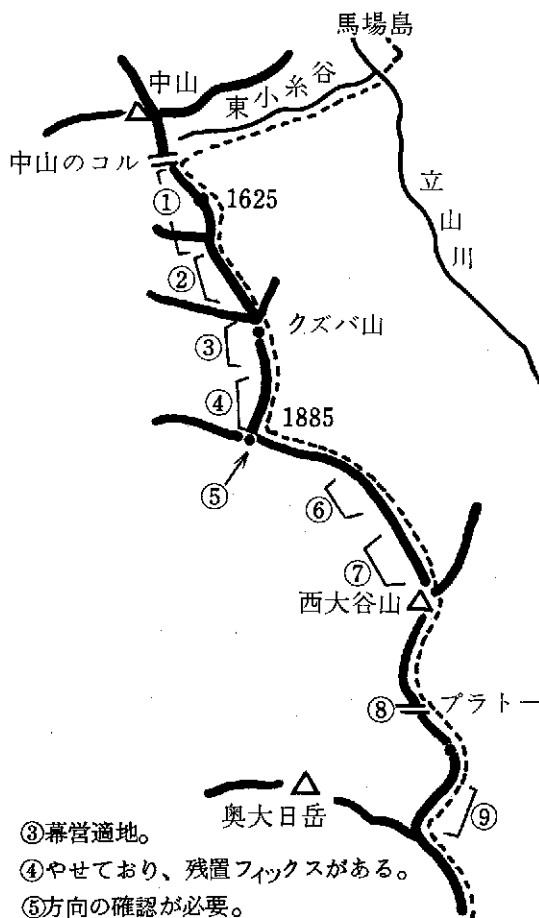
11月4日 ●のち◎ CS(5:40)－劍御前(7:45)－CS(9:45)－大日小屋(13:10)－大日平CS(15:05)

デポの確認に御前へアタック。あとはひたすら駆け下るが、山行日数が少ないとのことで、大日平で泊る。

11月5日 ●のち◎ CS(7:05)－立山駅(10:20) (記 大石)

#### 奥大日尾根偵察報告

- ①フィックス40m、5～6ピッチ。
- ②位置を確認し難い。



- ③幕営適地。
- ④やせており、残置フィックスがある。
- ⑤方向の確認が必要。
- ⑥幕営適地。
- ⑦立山川側は切れている。
- ⑧広い雪原。
- ⑨フィックス100m。下降口の確認が必要。  
全体的に雪庇に注意しなければならない。

### 雄山東尾根偵察

期 間 11月1日～11月3日

参加者 西尾(L) 奥山

11月1日 ○ 黒部ダム(9:20)－黒部平(11:05)－2,250m(13:30)－2,400m ③S(15:30)

この尾根はダムを対岸に渡ってから、橋を越えた所より始まる。赤旗を打ってブッシュ漕ぎ

を始めるが、途中赤旗を打つ必要もないので、左へトラバースして黒部平へ向う道に出る。さらにケーブルの駅からも大観峰へと続く道があったので大いに助かる。2,100mあたりより尾根に戻り、再びブッシュに入る。特に2,400mのポコに上る所が傾斜もあり、苦しい。このブッシュを抜けると尾根は急にやせて屈曲した後、再び広がる。この辺りは地形が複雑で、フィックスも必要である。本日はここまでであるが道を最大限に利用したため、ブッシュ漕ぎも少なく、大いにはかどった一日であった。

11月2日 ○ CS(6:45)－2,681m(8:20)－雄山(11:00)－御前小屋(13:30)－剣山荘(15:00)

2,400mより上部は雪の付いたハイ松帯で、意外と歩き易い。2,681mのポコ手前より岩稜となるが、こっちの方がむしろ登り易い。しかし春にはナイフリッジとなったり、岩峰を巻くのが難しくなるので、フィックスはかなり必要であろう。春にもしクラストしておれば、フィックスは各々2～3ピッチ必要となろう。テントサイトとしては2,400m、2,750m、2,800mあたりが考えられるが、いずれにしてもあまり広くなく、大人数パーティでは苦しい。雄山に上ってから岩峰を1つ巻いて稜線にもどり、あとは剣山荘を目指して駆け下る。

11月3日 ① CS(6:30)－剣本峰(10:00)－早月尾根より馬場島下山(14:40)

前剣の登りは夏道通しであったが、春には完全な雪壁となり傾斜もあり、クラストしておればかなり困難であろう。前剣からの稜線は、やせておりいやらしい。特に平蔵谷側に切れ落ちた所を鎖を頼りにトラバースする所があり、雪の付き方次第で、春にはどうなるのか見当もつかない。避難小屋からはハシゴ2本と鎖を通過して小さなルンゼに入って本峰へと続くゆるやかな稜線へ出る。本峰はそのアプローチとは様相を一変した、なだらかなピークである。風もなく快晴で、実に気分が良い。あまりにも平和な本峰に別れを惜しみつつ、最後の難関早月を下る。伝蔵小屋より雪もなくなり、アイゼン

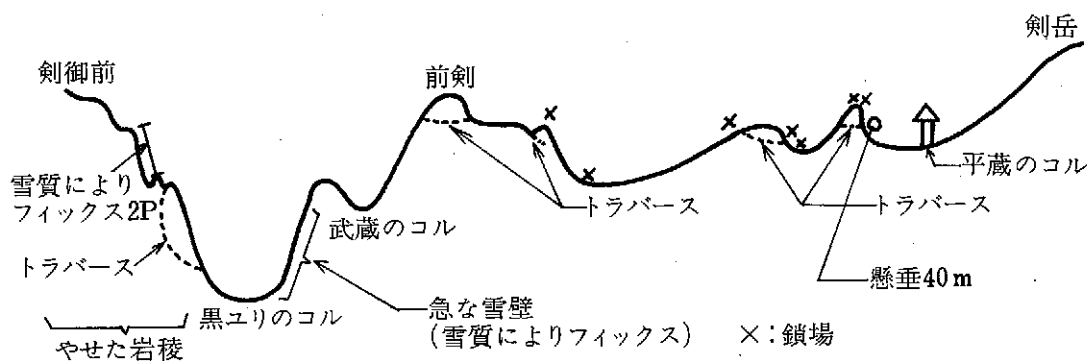
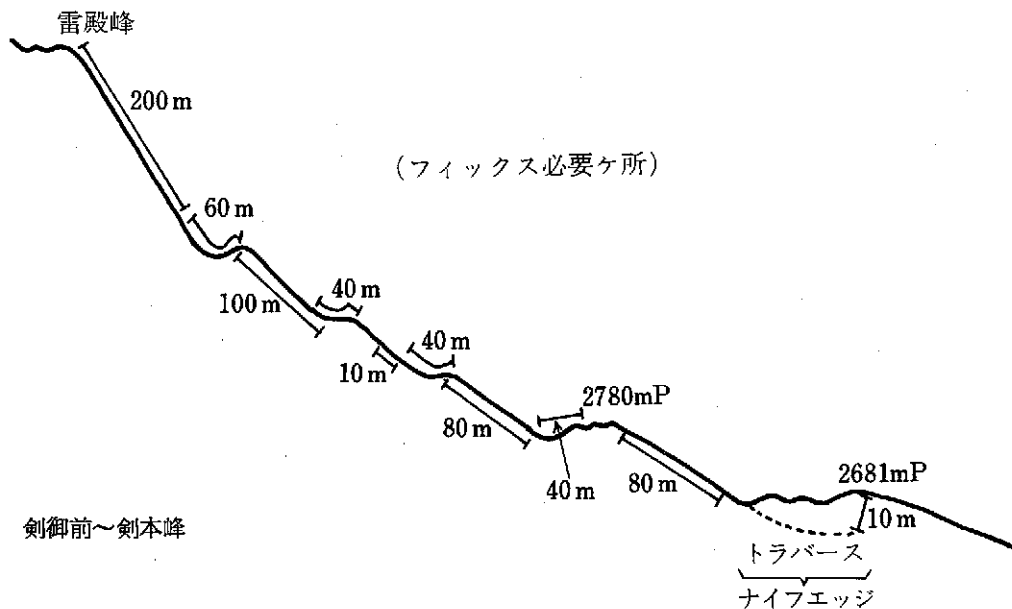
も取り去り、ひたすら馬場島目指して駆け下る。しかしそれにしても早月は長い。そして馬場島の「きのこうどん」は美味であった。

年生を含む全員で行く予定であったが、幕営地が充分でなく、フィックスもかなり必要であるため、計画実施は困難である。少人数によるスピーディーな行動が必要ではないかと思われた。 (記 奥山)

(後記) 当初、この尾根(雄山東尾根)を1ノ

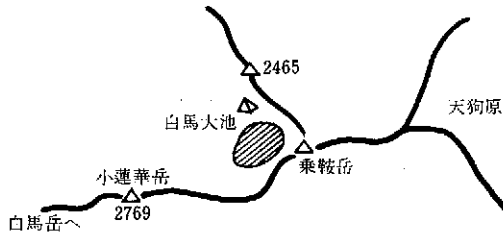
### 偵察報告

雄山東尾根(2,681mピーク～雷殿峰)



(記 西尾)

# アイゼン合宿



## 白馬大池周辺

期間 11月22日～11月26日

参加者 浅井(L) 広田 西尾 村田 奥山  
小松 科野 本園 長谷川 草尾  
大石 越智 房本 佐々木 上月  
湊本 野口 佐野(OB) 渡辺(OB)

11月22日 ◎のち⊗ 成城大小屋付近(9:45)→天狗原(12:15)→乗鞍岳(15:30)→大池への下りCS(16:20)

東急山荘で朝食をとり、成城大小屋付近までタクシーで入る。天狗原までトレースがあり楽に行くが、乗鞍への登りは雪が深く遅々としてはかどらない。視界もなく、頂上付近ではルートを見失ってしまった上に、すごいラッセルで悪戦苦闘である。目的の大池小屋にも着かず、乗鞍からの下りの斜面でテントを張る。湿雪のため、本日のピバーク隊は悲惨な状況である。

11月23日 ⊗のち◎ CS(6:40)→白馬大池BC(9:15) 雪上訓練(11:40～15:20) 後発隊出発(8:45)→白馬大池BC(14:35)

今日は朝からみぞれであり、6時過ぎ位までねばって大池に向かう。ペースが遅くようやくという感じで大池畔にテントを張り、茶を飲んで雪訓に出かける。堅い雪がなくワカンでの訓練をする。小蓮華岳への稜線の途中の2,600

mピークまで行く。帰路、上月のアイゼンがザックから落ち、全員で捜しまわる。結局、見つけることはできず、ベースに帰ると後発隊と佐野・渡辺OBがおられた。

11月24日 ① BC(5:50)→乗鞍の南方のピークBS(8:30) 雪上訓練(9:10～14:15)

本日は好天である。朝のテント撤収にあまりにも時間がかかりすぎたため、陽の出る頃大池対岸のピークに向って出発する。すぐに大池畔にもどり、再び設営する。OB両氏は白馬岳へ。我々は雪訓へ行く。アイゼン歩行、ザイルワーク(スタカット)、ワカン歩行を主にして行いが雪が腐っており、特にアイゼン歩行は練習にならない。午後より主に滑落停止を行うが、この頃に広田が入山してくる。夜、今日の撤収の遅いのに対し、両OBから強い批判を受けて皆シュンとしていた。明日、浅井(L)が下山するので、本日のうちに反省会をしたのであるが、まさに反省ばかりであった。

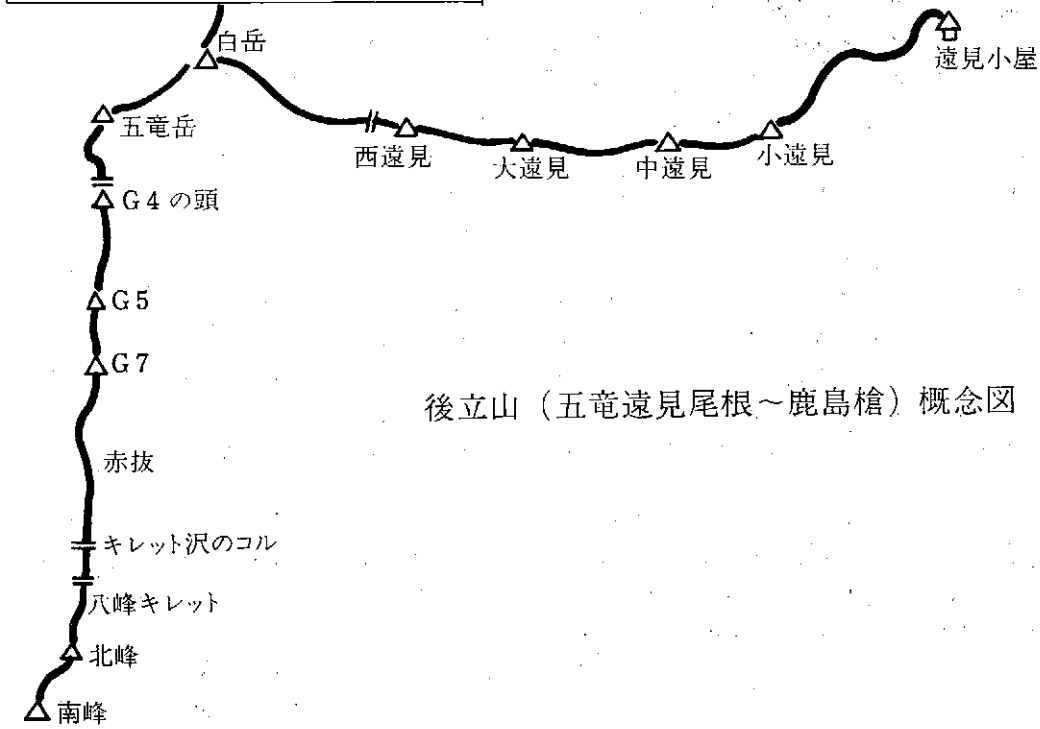
11月25日 ①のち◎ BC(5:20)→小蓮華手前のピークBC(9:15) 雪上訓練(10:15～13:20) BC(14:10)→天狗平CS(15:20)

昨日、おこられたこともあり、さすがにテキパキとした撤収であった。小蓮華手前のピークまでアイゼンを付けて出発する。帰る途中1年がアイゼンをひっかけて転倒。まだまだ一年生はやはり未熟である。ここで一部が下山に向かう。残留組は雪訓へ出る。ガスも出てきたので、読図訓練などを行う。雪訓から帰り撤収して天狗原まで下る。入山時には考えられないほどの速いペースであった。

11月26日 ⊗のち◎ CS(5:50)→東急山荘下山(9:40)

雪の中をひたすら下る。最後の林道にはうんざりした。(記 越智)

冬 山 合 宿



後立山（五竜遠見尾根～鹿島槍）概念図

'79 冬遠見尾根～五龍

12月26日 ○ 神城発(8:00) - 法大小屋CS(15:20)  
積雪30cmのスキー場の下に行く。トレースは既についていた。

12月27日 ⊗ 出発(6:50) - 一の背髪(8:25) - 小遠見手前の道標(10:00) - 中遠見手前(10:45) - 小遠見とのコルCS(11:30)

離阪前より風邪をひいていた姿本の具合が悪く、1P目から大幅に遅れる。2P目からはツェルトを渡し、広田と2人で後からゆっくり来ることにして、一の背髪で待ち合わせるが1時間たってやっと到着。この分では上まで行くのは無理の様なので下山させることにして、重田と長谷川の2人でテレキャビンを使い降ろす。

他の者はそのまま中遠見まで行った地点で、奥山と小松を偵察に出し天場を捜すが、相当行かないとないとのことで、2人が何時戻ってくるかもわからないので、逆戻りしてテントをはる。すぐに2人も帰ってくる。

12月28日 ○ 出発(7:05) - 中遠見とのコル(8:10) - 大遠見手前(9:05) - 西遠見BC(11:00)

実に良い天気です暑い位である。偵察時にフィックスが必要と考えられた所も一面雪におおわれ、フィックスなしで順調に下る。雪はサクサクでわかんを付けて歩かないと苦しい。BCへは午前中に着き、午後のはんびり五龍・鹿島槍を眺めて過ごす。2:10頃、浅井・奥山・長谷川が偵察兼フィックスに出る。

12月29日 ○ 第1次五龍アタック、1年は雪洞を掘って遊

ぶ。後発隊が3:30頃到着。

12月30日 ○ 白岳アタック隊  
出発(6:50) - 白岳(8:35)  
- BC(9:25)

前日、後発隊の報告(家の事情)によって下山することになった西尾に、浅井・草尾が同行する。1年は白岳アタックで初めて冬の稜線に出るが、天気も良く快適であった。

12月31日 ⊗ 第2次五龍アタック後  
BC出発(13:20) - 2日目の天場CS  
(15:15)

12:15に縦走隊とトランシーバー交信の予定であったが応答なし。テントを撤収して下山する。安全地帯に入ったこともあって、夜も遅くまで紅白歌合戦を聴き、新年を迎える。満天に輝く星と山から見える街の灯が実に美しい。

1月1日 ⊙ 出発(8:00) - 神城  
(10:05)

曇天の下、スキー場の単調な下りを駆け下る。ほとんど雪はなく、滑走できる所はあまりない。今年の雪の少なさに、改めて驚かされる。アツという間に終わったという感の強い冬山であった。

(記 上月)

#### (第1次五龍アタック)

参加者 広田(L) 浅井 西尾 長谷川 小松  
草尾

BC(7:00) - 五龍岳(9:05) - B  
C(10:40)

快晴の下、のんびりとアタックに出発する。明日の1年生の白岳アタックのためのフィックスを白岳の登りに張る。五龍山荘のすぐ上でフィックス2ピッチ。また五龍頂上直下に約15mのフィックスをする。あとは何の苦もなくピークに着く。あっけない位である。下りはさすがに気をつかう。西尾・広田で、主稜線の方を少しのぞいて、あとはひたすらBCへ向かう。(記 西尾)

#### (第2次五龍アタック)

参加者 岡部(L) 村田 奥山

BC(6:50) - 五龍岳(8:40) - B  
C(11:20)

かなりの悪天であるが、決行する。五龍の登りで赤旗をうって、下り口を間違えないようにしたつもりであったが、縦走路に入ってしまう。登り直して、今度は赤旗を見失しなわない様に慎重に下る。それにしても、何も見えないアタックでつまらなかった。(記 奥山)

#### 後立山縦走隊

参加者 金谷(L) 広田 重田(OB)

12月30日 ① 出発(6:50) - 白岳  
(8:15) - 五竜岳(10:00) - 八峰  
キレット小屋(15:40)

我々三人は、白岳で本隊と別れて縦走へと出発する。非常に穏やかな天気である。春山のようだ。五竜岳頂上直下は、残置フィックスを通過し、下りは先日打った赤旗に導かれる。上部雪面でザイル1P出す。気温が高いせいか雪が腐っている。五竜岳を下り切ると後は、痩せた稜線をひたすら八峰キレット小屋迄辿る。

12月31日 ⊗ 風強し 出発(7:00)  
- キレット最低鞍部(8:20) - 吊尾根  
(11:45) - 鹿島槍南峰(12:50)  
- 冷池小屋(14:30) - 赤岩尾根2,400  
m付近(16:30)

非常に風が強い。突風体勢をしばしばとる。しかし気温は高いようだ。這うようにしてキレットへの降り口迄行く。キレットの底へは懸垂15mで降りる。底から越中側へトラバースして鹿島槍への登りにとりかかる。兎に角風が強いし、ガスで視界が利かない。ひたすら白色の斜面を登る。吊尾根に出ても全く視界が利かない。南峰でやっとガスが晴れてきた。ガスの晴れかけた幻想的な風景の中を冷地へ下る。小屋前の多くのテントの間を抜けて、赤岩尾根を下り始める。赤岩尾根の上部は、急な雪斜面である。

1月1日 ①のち⊙ 出発(10:00) - 高  
千穂平(11:00) - 西俣出合(12:0  
0) - 大谷原(12:50)

昨日とうって変って青空である。その中に鹿島槍が聳えている。しばし見とれてから、のんびり下山開始する。(記 広田)

## 春 山 合 宿

### 春山合宿を終えて

私としては、とにかく何の故障なく今回予定を消化出来て下山したことが喜しい。もちろん計画通り山行を終え、無事故であることは、そうであって当たり前である。しかし、その当たり前前のことが、我々山へ行く者にとって一番重要な事ではないのか。今回、我々が入山中に剣岳山域において大学パーティの2件の事故をラジオで聞くに及んで、この事を考えずにはおれなかった。さらにその2パーティーのうち、1パーティーの山行内容が我々のそれとほぼ同じで事故が悪天によって引き起こされたことを聞くにおよんで、我々もそうになっていたかもしれないと思う。ともかく無事故で当たり前。その当たり前前のことを認識させられた、今山行であった。(記 浅井)

### 雄山東尾根

期 間 3月15日～3月27日

参加者 村田(L) 草尾 奥山

3月15日 ① 黒部ダム(11:15) - 黒部平(14:45)

第一ゲートより関電の車にのせていただいて大いに助かる。今日はいっきに2,400mまでと意気込むが、雪がけっこう多くて黒部平までとなる。一日中天気もよく、立山連峰も間近に見えたが、稜線は風が強いらしく雪煙が絶えずあがっていた。

3月16日 ①のち② CS(6:30) - 2,200m(14:45)

出発してまもなくわかんをはく。今日は一日

中苦しいラッセルとなりそうである。昼ごろより天気も崩れ、テントを張るころには新雪もかなり積もっていた。よいテントサイトもないので、尾根上に雪を切ってこしらえる。

3月17日 ② CS(6:30) - 2,680m(15:45)

今日は朝から雪である。朝起きてみるとテントが半分ほどうまっていた。やっとの思いで出発するも、新雪深く遅々として進まない。心配していた2,400mのボコへの登りも雪の斜面と化して問題はなかったが、急なだけに胸～首までのラッセルとなって苦しいことの上ない。必死の思いで2,400mまで上がり、さらに黙々とラッセルして、ようやく2,680mのピークにつく。

3月18日 ② CS(12:45) - 2,780m(15:30)

朝より視界もないので、先のナイフリッジを考えて沈とする。が昼頃より急に晴れだしたので急いで出発する。ナイフリッジは両側がすっぱり切れておりザイルを1P出す。ようやく尾根らしくなってきたようである。とにかくもラッセルから開放されたというだけで、肩の荷がやや軽くなったような気さえた。

3月19日 ③ 風ツ CS(7:00) - 雄山神社(12:00)

いよいよ稜線に上れるというので元気いっぱい出発する。2,780mの下りは岩稜が出ており、フィックス40m。ライデン峰への登りはクラストした雪壁となっていて緊張する。フィックス100m。天気もいいのでフィックスも快調にのびて、屋前には稜線に出る。しかし予想以上に稜線の風は強烈で何度も突風体勢をとらなければならない。雄山神社のかげに入ると思わずテントを張ってもぐり込んでしまった。

この日、クズバ山隊との交信ができて御前小屋に到着を確認する。デボもあるとのことで、早く合流したいものである。

3月20日 ③ 風ツ 沈

天気は昨日とは違って吹雪である。気温も低く、出発しては見たもののルートもわからず、全身こごえきって昨日のテン場に戻る。



再びルート確認のため偵察に出て岩峰のトラバースに40mフィックスして帰幕する。この辺の稜線は結構いやらしい。

3月21日 ⊗のち①CS(6:00)ー御前小屋 BC(11:30)

もう予備日を2日使ってしまったので、今日は御前までいかねばならない。天気は昨日とかわりばえしないが、外に出てみると気温がかなり高いらしく、そう寒さは感じない。雄山神社より岩峰を巻いて稜線にもどるまで、フィックスを2ピッチ通過して、あとは御前目指してひたすら歩く。折立の下りがわからずうろろうろしていると、御前よりの立山アタックパーティーに出会う。久しぶりに人に出会い、しかもそれがみななつかしい顔ばかりであった。元気百倍で折立をかけ下り、だだっ広い稜線をあっちへうろろうろ、こっちへうろろうろさまよいながらも、ようやく別山あたりまでくると、ガスが一気に晴れて、剣本峰が眼前に現れた。雪におおわれながらも所々岩肌をむきだしにしている剣はやはり圧倒的であった。アタックへの闘志がわいてきた。

別山からは久しぶりの青空のもと、3人ばらばらに御前のBCまでのんびりと歩く。

(記 奥山)

## 奥大日尾根～剣岳・立山

期間 3月13日～3月27日

参加者 浅井(L) 科野 長谷川 本園  
越智 大石 上月 佐々木 房本  
野口

3月13日 ○のち① 伊折出発(7:20)  
ー馬場島(12:20)ー東小糸谷出合  
(14:05)

とにかく暑い。雪はけっこうあるが、馬場島までトレースがバッチリで昼ごろ馬場島に着き茶をもらい、東小糸谷出合まで行く。ラッセルとなりトップは苦しそうだ。テントを張って、長谷川・科野が偵察に出る。

3月14日 ◎のち⊗ 出発(6:20)ー中山のCOL(8:00)ー東小糸谷出合(9:10)ー中山のCOL(11:10)ー設営・デポ出発(12:45)ー1,380mデポ地(14:25)ーフィックス30mー中山のCOL(15:20)

中山のCOLまでダブルで行く。沢どうしに左岸に行く。所々沢がのぞき不安定である。登り直しの時はペースも速い。天気は曇りから雪となる。1,380mまで中山のCOLからデポに出る。デポ地手前にフィックス30m。

3月15日 ◎のち○のち⊗ 出発(6:25)ー1,680m(10:55)設営ー1,380mデポ回収(13:30)ーCS(14:20)

今日も朝のうち天気が悪い。昨日のトレースは消えており、デポを横目にさらに進む。ラッセルはひざぐらいだが、急な登りでなかなか進まない。予定地まで行けず、1,680m地点でしかたなく設営してデポの回収にむかう。後方から他大学(東京理科大)が猛烈ペースでやって来る。

3月16日 ◎のち① 出発(6:30)ークズバ山(8:35)ー屈曲点(11:10)ー1,980mCS(14:20)

今日はまずまずの天気。昨日追いかれた、東京理科大のパーティと抜きつ抜かれつクズバ山を越え、屈曲点に至る。この辺りは、傾斜もなくのんびりとしている。天気が崩れ始めて非常に寒い。ラッセルは昨日より少し深くもも位い。チョウセンボッカでもあり、ペースが上がらずほぼ1日遅れとなってしまった。

3月17日 ① 出発(5:55)ープラトー(8:55)ー2,300mCS(11:15)

薄曇りの中を出発する。ゴジラが多く進まない。プラトーを越え少し登った所まで来ると、奥大日はすぐそこである。快晴ではあるが、昨日までの目いっぱい行動で非常に疲れており、フィックス工作その他は、明日とする。

3月18日 ⊗のち① 出発(5:50) -  
2,400m(6:40~9:30:フィックス  
工作に浅井・長谷川・本園が行き、他はツェ  
ルトをかぶる) - 奥大日直下(11:20)  
一室堂乗越(13:30)

天気は悪く、非常に寒い。少し登った所から  
上級生3人がフィックス工作に行く。かなり雪庇  
崩しに苦労しているようで、なかなか帰ってこ  
ない。下にいる者は非常に寒い。2400からはフ  
ィックス3ピッチ100m位の急な雪壁である。稜  
線に出る所の雪庇の張り出しは大きく、フィッ  
クス隊の苦労がしのばれる。稜線に出ると、すば  
らしい景色が広がる。天気も良く、最高の気分  
である。あとはフラフラになりながら室堂乗越  
へ向かう。この日、雄山隊と交信。彼等は雷殿  
峰にいたとのこと。

3月19日 ○のち③ 出発(6:30) - 剣  
御前小屋 BC(9:00)

稜線は、さすがに風が強い。すぐに御前小屋  
に着いた。デポを確認して、御前小屋より剣沢側  
に少し下った所にテントを張る。

3月20日 ⊕

悪天のため、沈とする。雄山隊はまだ来ない。

3月21日 ⊗のち○

雄山アタック 出発(6:50) - 富士の折  
立直前で雄山隊と会う(8:10) - BC  
(11:00)

多少吹雪いているが出発する。別山からの下  
りで少し道を失うが、別に難なく富士の折立を  
登りきる。ここで雄山隊とすれちがう。天気も  
悪く、少し行った所でひきかえすが、別山あた  
りで快晴となる。雄山隊はまだ別山あたりでウ  
ロウロしているので先導してベースにもどる。

3月22日 ⊙のち⊗ 沈澱

3月23日 ⊙ 沈澱

昨日まで同じような行動をとっていた東京理  
科大のパーティの方々がお奥大日尾根下山中に雪  
崩に遇い死亡したという悪夢のようなニュース  
を聞いた。合掌。

3月24日 ①のち⊗

剣岳第1次アタック

参加者 浅井(L) 奥山 本園

出発(7:00) - 避難小屋(11:00)

- 剣(12:15) - 黒ユリのコル(15  
:00) - BC(17:00)

出発が遅いうえ、天気もすっきりしないので  
本峰まで行けるかどうか心配だったが前剣の登  
りも、適度なラッセルをしてどんどん高度をか  
せいだ。前剣は、稜線通しであるが下りのトラ  
バースにザイルをフィックス。後は小屋まで、ダ  
ラリとした稜線が続く。本峰の登りもハシゴ2  
本と鎖を握って、慎重に登れば問題はない。ピー  
クは一面ガスで、写真を撮り早々と下る。帰  
りも前剣を下れば後は歩くのみ。それにしても、  
続々現われるピークには、閉口した。往復10  
時間のアタック。全く疲れきって帰る。

(記 奥山)

3月25日 ○のち⊗

剣岳第2次アタック

参加者 村田(L) 科野 草尾 長谷川

出発(6:10) - 武蔵のコル(7:15)

- 前剣(8:15) - 避難小屋(8:55・  
時間待ち9:50) - 剣(10:55) - BC  
(14:45)

メンバー 村田・科野・草尾・長谷川で剣ア  
タック出発。最高の天気である。風は強いが、  
時間がかかると思われるので、早々と出発する。  
心配されていた前剣の登りも雪質が良く、怖か  
ったがノーザイルである。避難小屋で、前の鹿  
児島大学パーティの時間待ちして頂上へ。すば  
らしい景色である。ささぎる物は何もなく喜し  
くなって来る。あとは慎重に下る。この下りは  
1次パーティと少しルートが違っていた様で、  
ザイルをほとんど出すことはなかった。1次パー  
ティから聞いていたように、次々とポコが出て  
くるが案外早くBCへ帰る。尚この日、下級生  
は御前付近まで遠足に行く。(記 長谷川)

3月26日 ⊙のち①のち⊗ 出発(6:5  
0) - 室堂乗越(7:40) - 奥大日(9:  
40) - プラトー(12:15) - 西大谷山  
(13:00) - 1,880m地点設営(2:3  
0)

今日から下山とばかりにテントをでるも、す  
ごい風で、顔面凍傷になりそうだ。ルートをたしか  
めながら、室堂乗越へ下る。うそのように風が  
ない。奥大日の雪庇をくずして、フィックス工作

し、プラトへ下る。非常にこわい。あとはひたすら下山をめざす。

8月27日 ① 出発(6:50)ークズバ山(8:00)ー中山の科尔(11:00)ー馬場島(12:00)ー伊折(16:50)  
クズバ山の下りはかなり急で、フィックスし、中山の科尔へはシリセードで降りる。快晴の中非常に暑く、いかにも春という感じの中を馬場島へいそぐ。 (記 越智)

# 1980年度（昭和55年度）活動記録

## 80年度 現 役 部 員

C . L	浅 井 利 彦	基制 4	( 4 )	
	西 尾 良 司	工治 4	( 4 )	
	村 田 正 弘	工醇 4	( 4 )	
	奥 山 宏 臣	医 3	( 3 )	
	草 尾 寛	工通 4	( 3 )	
	小 松 二 郎	工土 3	( 3 )	
	科 野 昌 蔵	人 3	( 3 )	
	長谷川 雅 一	基生 3	( 3 )	
	本 園 孝	文 4	( 3 )	
	大 石 真 也	工機 2	( 2 )	
	越 智 栄次郎	経経 2	( 2 )	
	上 月 登喜男	理物 2	( 2 )	
	佐々木 徹	経営 3	( 2 )	
	野 口 明	基住 2	( 2 )	
	房 本 進 吾	文 3	( 2 )	
	湊 本 喜 裕	経経 2	( 2 )	( 退 )
	稻 成 耕 一	法 1	( 1 )	( 退 )
	大 浜 稔 浩	工原 1	( 1 )	( 退 )
	小 杉 廣	人 1	( 1 )	( 退 )
	楠 原 淳	工土 2	( 1 )	
	佐 藤 健 哉	工子 1	( 1 )	
	畑 秀 信	人 1	( 1 )	

## 5 月 山 行

### 新人歓迎山行 (岳沢)

期 間 4月29日～5月4日

参加者 浅井(L)、村田、科野、大石、上月、野口、湊本、稻成、大兵、榊原、佐藤、畑

4月29日 ① 上高地発(8:45)－水呑沢出合付近(11:30)科野、大石、天場偵察、その場で幕営(11:45) 上高地での装備分けの後、好天の中を岳沢に向って出発。河童橋もあつというまにすぎ快調なペースで歩く。途中、重荷に慣れない1年部員が腰の痛さによりペースメーカーとなるが順調に雪の少ない岳沢の夏道を進む。

4月30日 ① 雪訓(間の沢)

出発(6:40)－間の沢中ほど着(7:10)雪訓、－BC(12:40)

昨日に続く好天の下、間の沢に雪訓へ行く。今年は、特に雪が少なく、間の沢の下部はガレ場が出ている。雪は堅く夏の雪渓を思わせた。しかし下部では横にわれ目が入り、いやな気分だった。雪訓はキックステップの直登、直下降、斜登行、斜下降、トラバース、アイゼンをつけて直登、直下降、斜登高、斜下降、トラバースをし、滑落停止をした。滑落停止をする少し前に、村田合流。キックステップの頃はまた雪も堅かったが、滑落停止をする頃になると、やわらかくなってきた。雪訓終了後、グリセード、尻セード等で間の沢を下る。グリセードに意外と力があるのに当惑した1年生もいたようだ。

(記 湊本)

5月1日 ②のち③

明神主稜 浅井、上月、野口、湊本、

出発(6:20)－稜線(11:15)－3峰の2峰上(13:00)－1・2峰間のコル(14:30)－主峰(14:45)－BC(16:25)

昨日までとは違って変わった曇天の中を出発、下部のわりと大きな沢にはいったがどうも計画の中明神沢ではなさそうである。それでも登っていくと、背後に上高地が見えたりして、まさか前明神沢かとも思ったが、結局は3・4峰間の3峰よりにつき上げている尾根に出た。稜線に出る直前頃から少し視界が開け、4峰、5峰の方も望めたがそれも束の間、すぐガスがかかり3峰へと向かう。3峰はそのまま登らず岳沢側をまき、風が強くなったので2峰側基部でヤッケを着る。ゴミが多くあり少々興ざめ。2峰からの下りは懸垂下降用の残置ロープをまいてある岩峰から約20mの懸垂下降で1・2峰間のコルに降りる。主峰では少しの間ガスが晴れ、横尾、徳本、明神のあたりが見えるが岳沢側は何も見えず。主峰からは小さなボコを1つ越した後、約5mのいやなトラバースを通過し、奥明神沢のコルへ。時間が遅くなったので前穂アタックは断念し、そのまま奥明神沢を下る。奥明神沢上部は傾斜が急ではあるが雪がくさっていたので尻セード等で快適に天幕へかけ下る。下りで、明神側の岩壁の美しさが非常に印象的だった。(記 湊本)

コブ尾根 村田、大石

出発(6:30)－コブ沢出合(6:45)－ルンゼ下部着(7:30)－コブ尾根稜線(8:45)－マイナーピーク(9:00)－懸垂(9:30)－1峰(13:00)－コル着(13:30)－BC(15:30) ルンゼ下部は新雪がクラストした雪面より、10～20cm積もっているためアイゼン、キックステップがほとんど効かない。前歯をクラストした雪面までけり込み歩く。コブ尾根の稜線は、明神、前穂、奥穂が見えるがすぐにガスがかかる。今年は雪が少ないためマイナーピークの奥穂側が切れ落ち、懸垂をハイマツにセット

して降りる。このころから風と雪が強くなる。以後、雪と岩とハイマツのミックスで歩きにくく時間を喰う。コブ1峰までザイル2ピッチ出す。コブ1峰は稜線通しに直登、ザイル3ピッチ（但し1ピッチ20m程、ザイルが痛んでいたため）。1ピッチ目はチムニー状、ピンは多く効いているが岩に雪や氷がついていていやらしい。2,3ピッチ目は易しい。時間が遅いのでコルにて敗退。コブ沢に降りる。スタカットで少し降り、2回ほど懸垂。あとはコンテ。新雪が積もつたらしくすぐ流れ落ちいやらしい。本沢に出ると表層雪崩の心配はあったがかまわず急いで降りる。

（記 大石）

**徳本峠** 科野、大浜、榊原、稻成、小杉、佐藤、畑

出発（6：25）—上高地（7：30）—徳本峠（10：25）—BC（14：05）

空は曇っていたが奥穂の稜線の方から青空が拡がっているの晴れるのではないかと期待していた。上高地は入山時よりかなり人が多くなっているのが目についた。ここで水を補給し、梓川左岸道を快調に行く。徳本峠への道は上部へ行くと40cm程積もっていた。峠ではガスって眺望はほとんど効かず、人影もボツリボツリ。下りは尻セード、グリセードなどでまたたく間に降りる。明神池を通過して右岸道に行く。途中でみぞれ混じりの雨が降り、雨具装着。のんびりした遠足だった。（記 畑）

5月2日 ○

**西穂アタック** 全員出発（7：40）—稜線直下の岩峰下（10：55）村田偵察—BC（13：00）

前日の積雪のため非常に不安定な雪の中を西穂高沢をつめ西穂に向かう。10：00頃から表層雪崩が起り、1年部員が1人流されそうになる。以後頻繁におこるので稜線直下の岩峰を少し右に行った所で休憩、村田が偵察に出る。結局西穂を断念して岩峰下から2ピッチフィックスして帰る。

5月3日 ①

**天狗のコル** 浅井、湊本、一年全員

出発（6：05）—天狗のコル（8：55）—BC（10：35）

昨日の西穂アタックが雪崩でつぶれたので、雪訓も兼ねて、天狗沢へ。天狗沢下部は、昨日の雪崩のためかテブリで歩きにくかったが天狗のコルに着いた時は飛騨側の眺望はすばらしく笠ヶ岳、白山が一望でき、1年部員も喜んでいった。（記 湊本）

**前穂高アタック** 村田、科野、大石、上月、野口  
出発（6：05）—前穂高（8：50）—BC（11：15）

天気もはっきりしないので前穂のピークを踏みに行く。以外にも好天となり、すばらしい眺望を楽しんでのんびりとする。（記 野口）

5月4日 ① 出発（8：40）—上高地下山（9：50）

前日合流した北鎌尾根隊と共に下山。出発するとすぐ、上高地までの目標ピッチとなり下山競争となる。5日前苦勞して登った道をアツという間に走って下り快調に上高地までとばす。（記 湊本）

## 新人感想

初めての雪のついた北アルプスということもあって見るものすべてが新鮮だった。しかし、入部して初めての山行でいきなり表層雪崩に歓迎されるとは思ってもみなかった。本当に恐かった。ところがまわりの上級生をみると落ち着いていたので、経験を積むとあんなふうになれるものかなと思わず少し安心した面もあった。大学山岳部というのは高校とちがって、すばらしいことができる反面、その裏には非常な危険が待ちうけているような気がした。トレーニング、経験を積みかさねて、これからはいろんなところへ行きたいと思う。（記 佐藤）

## 剣尾根

期間 4月29日～5月3日

参加者 西尾(L)、草尾、重田(OB)

4月29日 ① 馬場島(8:40)ー池ノ谷出合(11:10)ー二俣(16:00)

4月30日 ② のち④ 二俣(5:00)ー稜線(8:00)ーP2の岩場(9:45)ーコルC(12:00)ードーム取り付け(12:40)ー終了(18:40)

しばらく暖かかった為か岩壁に雪は全く付いていないので、今日中にドームを越せば上半は何とでもなると思い、ピバークの準備をして出発した。取り付けはR10の予定だったが誤って変な所に取り付いてしまい引き返すことも出来なくなったので、60～70°の雪壁を1歩1歩Step Cuttingしながら必死になって主稜に這い上がった。後でわかったのだがR9とR10の間のルンゼ状の所に取り付いていたのだった。そこよりコルDまでは岩稜の急登のみでコルDより池ノ谷左俣側の壁をブッシュを頼りに登る。かなり疲れたところにP2の岩場に着いた。下から見ると難しそうだが、いざ登るとスタンス・ホールド共にしっかりとある簡単な岩場だった。それからP2のやせた岩峰を3つ程越してコルCに着く。コルCからは人工登攀になり左寄りから直上し、右にトラバースしてカンテ上のレッジに着く。カンテ右壁に回り込み、連打されたピトンに従い直上し、最後の2m程をフリーで登り、レッジ上でビレイをする。

このころより雪が激しく降りだし、あっという間に一面真っ白になってしまった。R6のコルまでノーザイルで進むがそのころには吹雪になり、岩壁上に20～30cmの積雪があり、冬と同じような状態になっていた。コルから取り付けまでバンドをトラバースしなければならないが、危険で草尾と重田を確保して先に取り付きまで行ってもらいそこでセルフビレイを取ってもらう。2m程かぶったクラックを登りそこから人工登攀で左上する。途中ピトンを打ちたしてバンドに入る。バンド内は氷が詰まっており積った雪

を払いながら進む。約20m程のバンド内にはピトンが一本しかなくホールドもなくチリ雪崩を浴びながらCuttingをし、必死になって登る。6～7kgとはいえ、ザックがとても重く感じた。全員がそろった時には既に暗くなっており岩棚にスタンスのみのピバーク地を求めた。

5月1日 ③ 取り付け(7:00)ーP1の頂上(8:30)ーコルB(10:00)

吹雪はいつでもおさまらず早月側稜の新雪表層雪崩の音を聞きながら出発する。最初から岩登りでⅢ級の外傾スラブだがピトンもホールドもなくだましながら登る。

15m程でルンゼに入るがⅢ級のルンゼも今はただのラッセルになっており、ルンゼ内でピッチを切る。ノーザイルでドームを過ぎコルBの下りにザイル2ピッチを出す。クラストした旧雪の上に新雪が積もり、とても危い状態で、草尾、重田が技術的不安を訴え、R2を懸垂することにして雪崩を恐れてコルBでピバークすることにする。ピバークに入った直後、寒冷前線通過により猛吹雪になりツェルトが埋められてしまった。

5月2日 ④ のち⑤ 下降開始(8:00)ー失敗 出発(9:45)ー剣尾根の頭(15:50)ー長治郎の頭(16:10)ー三ノ窓(17:30)ー二俣(18:20)

朝、陽が射してきたのでR2の懸垂の準備に入るがR2に新雪表層雪崩を起こしてしまい上半をトレースすることに決める。コルBよりレッジ右側に取り付き、左上バンド伝いに左側に回り込む。バンドから緩いフェースを登りビレイをする。次に雪壁を登りR1のコルに出る。ここよりレッジ右側の雪壁をトラバース気味に登り、稜線に出る。途中の岩稜で1ピッチザイルを出し、コルA手前のピークに出る。コルAには岩峰の中央ルンゼ側の基部をいやらしいトラバースをした後、ルンゼを登って着く。

このころには突風が吹き視界もかなり悪くなってきた。剣尾根の頭までは氷化した雪壁を2ピッチ登り、池ノ谷右俣源頭を腰までのラッセルをして着く。頭の上は広くテントも張れる。視



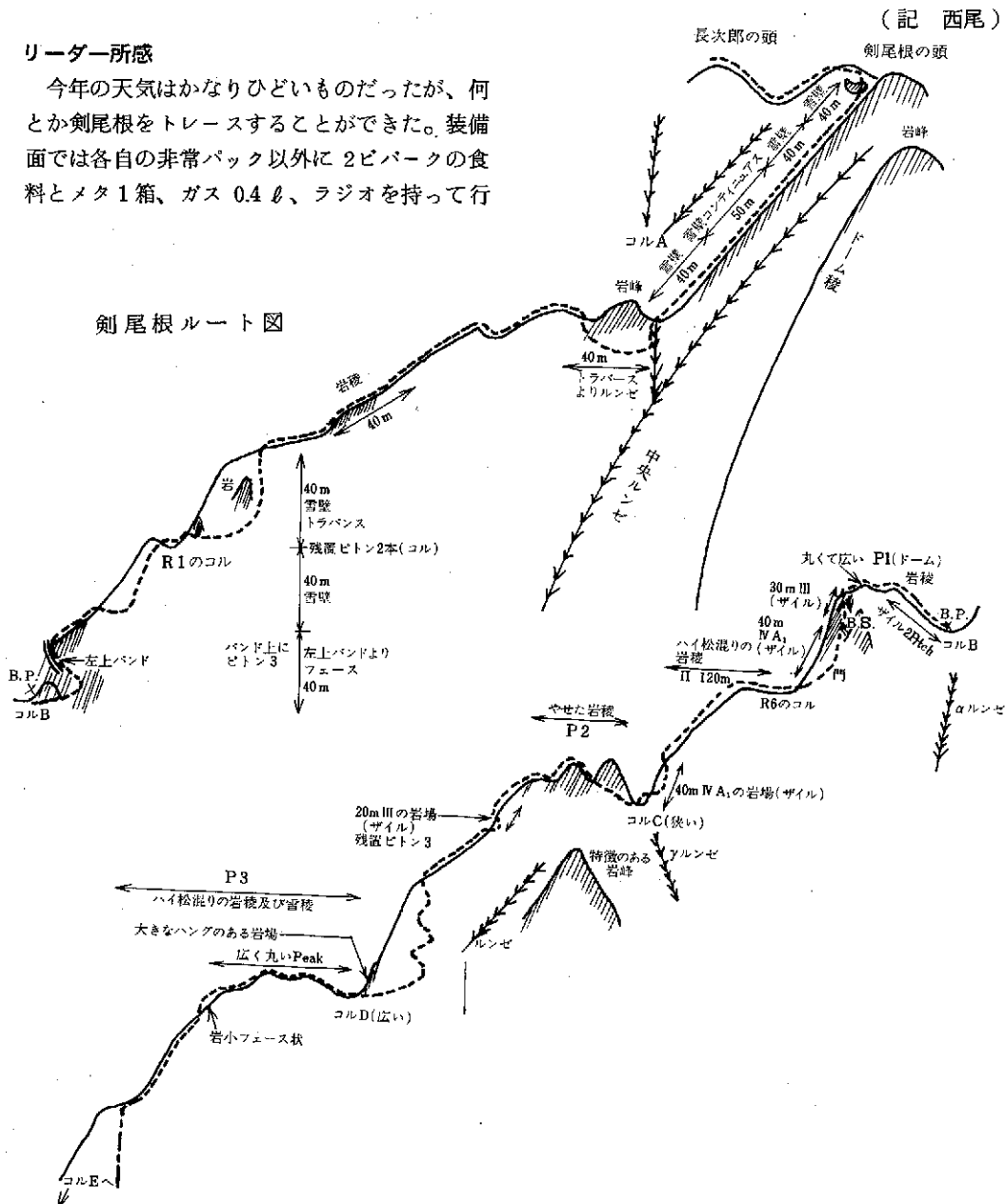
界は20~30mとなり、長次郎の頭を越えて縦走路に出る。三ノ窓までに一度トレースを失いかけるが、何とか三ノ窓に着く。一時はピバークも考えたが、三ノ窓に着くころには下部から順に晴れてきており喜んで池ノ谷左侯のデブリの中を各自二侯に向かった。

5月3日 二侯(9:00)一馬場島  
(11:50) (記 西尾)

き個装でも羽毛服やシュラフカバーを持っていたことが、今回の悪天に対し精神的、肉体的にかなり有効であった。しかし岩登りだけでなくオールラウンドな冰雪技術や体力の不足がみられた上に、ザイル操作の不手際や今回の計画に対する考えの甘さが目立ち、リーダーとしてもパーティを引き締める力に欠け、登攀する人間側の方に問題が多かった。

### リーダー所感

今年の天気はかなりひどいものだったが、何とか剣尾根をトレースすることができた。装備面では各自の非常バック以外に2ピバークの食料とメタ1箱、ガス0.4ℓ、ラジオを持って行



## 北鎌尾根～岳沢縦走

期 間 4月29日～5月4日

参加者 本園(L)、小松、佐々木、  
松尾(OB)

4月29日 ◎のち○ 七倉出発(8:10)  
-高瀬川ダム(9:15)-湯俣(12:00)  
-千天出合(14:35)-本園、松尾偵察  
(15:00)-帰幕(16:10)

湯俣から千天出合までは、左岸を行くわけだが、棧道がかなり痛んでいる。千天出合は、ラジオが入りにくく、天気図がとれなかった。

4月30日 ①のち② 出発(5:30)-  
丸木橋(5:50)-丸木橋対岸出発(6:  
45)-P2(8:30)-P3(10:3  
5)-5・6の科尔(12:05)-北鎌の  
科尔(13:00)

スノーブリッジを渡ったパーティーもいたようだが、危険であるとの判断で丸木橋まで行く。しかし丸木橋も表面が凍り渡れず。結局丸木橋のところまでザイルをケーブルにしてザックを対岸に渡し、空荷で少し上流のこれも恐ろしい吊り橋を渡る。そこからは樹林の中の急登。岩場もでてくるが、踏跡がはっきりしているし、残置フィックスもあるので迷うことはない。P2でアイゼンを装着し、いよいよ北鎌主稜を歩く。P3、P4は一部岩がもろいので注意を要するが難なく越え、この日の核心はP5、P6、P7のトラバースである。P5は天上沢側、あとは千丈沢側を巻くが、P5ではかなり怖い思いをした。

5月1日 ◎のち①のち◎ 出発(5:45)  
-P9(7:35)-独標基部(9:00)  
-独標(10:20)-槍直前のピーク(  
15:30)

P8、P9の登りは千丈沢側を巻きながらの急登。独標までの小さな岩峰もほとんど千丈沢側を巻く。昨日は独標基部まで行って天場がないと困るということで北鎌の科尔どまりにしたのだが、実際はP9～独標は天場がかなりあった。独標はさすがに威圧感あり、セルフストを

装着し、ザイルを出して左のリッジを登るが、案外楽に越せる。我々は3ピッチザイルを出したが、上部でザイルを出していたのは我々だけであった。P11の次の科尔からも1ピッチザイルフィックスするが、このあたりから小さな岩峰が次々と現われ、もうどれが何番目のピークなのか判別できなくなる。これらの岩峰はほとんど千丈沢側を巻くが、天上沢側を巻く所も一ヶ所ある。適確なルートファインディングが必要であろう。

5月2日 ①のち○のち◎ 出発(6:00)  
-北鎌平(6:30)-槍ヶ岳(8:50)  
-肩の小屋(9:35)-中岳の次の科尔(  
11:10)-南岳避難小屋(12:15)  
-大キレット鞍部(15:10)

今日は朝からセルフストを装着して出発する。槍は松尾OBの予想よりもかなり雪が多かったらしく、クラストした雪面や雪のついた岩を登る。途中でルートを間違えたらしく上部でザイルを3ピッチ出して、ピークに出る。槍の南面は北面とは対照的に、明るく平和な雰囲気、難なく肩に降り一息入れて大喰、中岳、南岳と明るい稜線を快調に歩く。最初は北穂を登ってしまう予定だったが、途中佐々木のアイゼンが故障したりして、時間を喰い、また皆、かなり疲労しているということで大キレット鞍部の看板のあるところで幕営。

5月3日 ◎ 出発(5:30)-北穂(  
7:30)-潤沢岳手前の科尔(9:50)  
-白出の科尔(10:30)-奥穂(11:  
35)-前穂(13:35)-岳沢隊B・C  
(17:00)

北穂の登りは雪面のトラバース、岩場とかなりやばい所もあるが、何とか登る。最上部の雪田で上から降りてくる人が滑落してきたのには驚いた。潤沢岳は飛騨側をトラバースするが、雪の付いた岩場のトラバースなので雪質によってはかなり難しいと思われる。白出の科尔から奥穂へは、人が多いので落石が心配だったが問題なく登る。吊尾根も難なく通過して、前穂に立った時は、もうあとは下山だけだと思ったがそこに油断があったのか、奥明神沢の前穂よりの沢を下り、奥明神沢へ出ようというところで

佐々木が転倒して、肩を痛み、ザックを背負えなくなる。それで佐々木のザックを本園、小松で引きずり降ろし、佐々木は松尾OBと一緒にあとから降りる。16時すぎにようやく岳沢に着くが、新歓隊のB・Cと先に降りた小松が見つからずしばらく捜した末、17時頃に新歓隊と合流。(記 佐々木)

### 南アルプス (鋸岳～甲斐駒)

期間 4月29日～5月3日

参加者 長谷川(L)、奥山、越智、房本

4月29日 ① 戸台(8:05)一角兵衛沢出合(10:50)一角兵衛沢上部(15:10)

戸台までタクシーで入るが、雪はまったくない。たんたんとした河原を汗をかきながら行く。一角兵衛沢の立て札の横から沢を渡り、はっきりしない踏跡をたよりに、急登を登るが、やがて沢が2分する。右の方へ行くと岩壁が出てきたので、左の方の樹林へトラバースしたが、結果的には、右の方が正しかったようだ。左方の沢は、やがて大きな岩のゴロゴロした広い河原となる。河原の右岸にテントをはる。

4月30日 ②のち③ 出発(5:20)一稜線(8:40)一大ギャップ(14:10)一第2高点(16:40)

広いガレ場は再びルンゼ状となる。ここでヒョッコリとカモシカに会う。やがて稜線の見える広いガレ場となり、落石をしないように稜線めざして必死に登る。稜線に着いた頃から天気が悪化して雪が降り出す。小ギャップまでは岩尾根の簡単な登り下りである。小ギャップへは短い懸垂。鹿穴はザイルをつけて通過する。稜線通しに行ったので大ギャップへの下りは懸垂2ピッチとなった。ピンがなくうちたしてギャップへ降り立った。ギャップからはトラバース気味に登り、第2高点に到着した。いつの間にかあたりは暗かった。

5月1日 ④ 出発(7:50)一六合目

石室(11:45)

昨日奥山がピッケルを落とした為、仙丈岳までは無理と判断してのんびりと出発する。朝方天気が悪かったがしだいにもち直す。三ツ頭の頂上までで一ヶ所ザイルを出す。しかし5月の山でラッセルするとは思わなかった。6合目の小屋に到着する頃より天気が崩れ始め、あすの ATTACK に備える。

5月2日 ⑤ 出発(6:00)一甲斐駒(8:00)一六合目石室(9:20-11:30)一丹溪山荘(16:05)

快晴の空の下、奥山以外の3人で甲斐駒へ ATTACK に出発する。少々危い所もあるが簡単な岩稜を一気に登りきる。富士山が美しかった。小屋までもどり、テントを撤収して下山する。道が荒廃していて歩きにくい。フラフラになって足元がおぼつかなくなったところ丹溪山荘に到着した。

5月3日 ⑥ 出発(7:30)一戸台(10:20)

ゆっくり戸台へ出発する。快晴の下のんびり歩く。登ってくる人があまりにも多く興奮する思いであった。(記 越智)

## 夏山定着合宿

剣岳周辺

BC 真砂

期間 7月19日～8月3日

参加者 浅井(L)、西尾、奥山、科野、草尾、小松、長谷川、大石、越智、上月、佐々木、野口、房本、湊本、稻成、大浜、小杉、畑、佐藤、神原

7月19日 ⑦のち⑧ 黒四ダム(10:50)一内蔵助平(16:10)

黒四ダムでスイカを食べて雨がふったりやんだりする中を内蔵助へ向かう。いつものように

なかなか着かず、着いた時はもう暗かった。

(記 湊本)

7月20日 ◎のち● 内蔵助平(7:45)

ーハシゴ谷乗越(11:40)ー真砂BC  
(15:30)

本日も天気悪くつらいポッカである。ハシゴ谷の登りで湊本が足を痛め、2年は荷が加わり、さらに苦しくなった。本日も幕営時には暗くなりかけていたが、一同ほっとしたようだ。(記 越智)

7月21日 ① <雪上訓練> BC(5:45)ー熊ノ岩の下方で雪上訓練(8:05~12:40)ーBC(13:10)

今年は雪が少ないようで所々切れており、大石・越智で長次郎の上部を偵察し、適当な所で

雪訓をする。アイゼンワークをしていると、他大学のWVのパーティが剣沢と間違えて長次郎を上がって来たので2年生が二俣まで荷を降ろしてやる。一通り、練習してⅦ峰の下まで行き、そこからBCへ駆け下る。(記 越智)

7月22日 ①

<ハツ峰上半> BC(5:10)ーⅤ・Ⅶの科尔(7:05)ーⅦ峰(10:10)ーⅧ峰と頭の科尔(15:10)、ここより長次郎谷へ下降ーBC(17:30)

ザイル操作がまずく、Ⅷ峰の登りで時間待ちしたため、途中から長次郎に降りねばならなかったのは残念だったが、ハツ峰の高度感はずばりしかった。(記 大石)

夏山合宿行動概要

7月	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	
浅井	入山				北壁L <sub>2</sub>	中央ルンゼ	沈殿	南壁	沈	雪訓	沈	中央チムニ	左下方	下山			
西尾					RCC 剣稜会	三ノ沢		久留米	殿	左下豊	下山						
奥山	入山	雪訓	源治郎	CフェースRCC	北壁L <sub>1</sub>	中央ルンゼ	ハツ峰ビバーク	雪訓	沈	魚津高	剣沢	下山					
科野	山	ハツ峰北	真砂沢	殿	剣稜会	Dフェース久留米	下廊下ビバーク	北・新	別山沢	北壁	下山						
草尾	入山				Cフェース 剣稜会	左稜線	T・K	雪訓	富大	下山							
小松					ハツ峰上	御前谷	ハツ峰上	雪訓	本峰	Bフェース							沈
長谷川	入山				源治郎	ハツ峰下	雪訓	ハツ上半	沈	マイナースラブ	北・新	下山					
大石					ハツ上	真砂沢	殿	剣稜会	中央ルンゼ	雪訓	久留米	殿					剣尾根
越智	入山				ハツ上	真砂沢	殿	RCC 剣稜会	中央ルンゼ	南壁	左下豊	沈	別山沢	剣沢			
上月					ハツ北	RCC	殿	L <sub>1</sub>	久留米	沈	下廊下ビバーク	雪訓	左稜線	剣沢			
佐々木	入山				源治郎	御前谷	ハツ峰	ハツ峰ビバーク	マイナースラブ	北・新	下山						
野口					ハツ北	殿	左稜線	T・K	雪訓	ハツ上半	沈					マイナースラブ	北・新
房本	入山				源治郎	御前谷	ハツ峰	ハツ峰ビバーク	マイナースラブ	北・新	下山						
湊本					T・K	殿	L <sub>2</sub>	下半	沈	富大	殿					北・新	雪訓
稲成	入山				ハツ上	T・K	殿	剣稜会	下半	雪訓	下廊下ビバーク	雪訓	別山沢	南壁			
大浜					ハツ上	殿	雪訓	下半	沈	下廊下ビバーク	雪訓	別山沢	下山				
小杉	入山				T・K	御前谷	ハツ峰	T・K	殿	南壁	沈	別山沢	剣沢				
畑					源治郎	T・K	殿	RCC 剣稜会	本峰	雪訓	ハツ峰ビバーク	別山沢	剣沢				
佐藤	入山				T・K	RCC	殿	雪訓	本峰	沈	ハツ峰ビバーク	別山沢	北壁				
横原					源治郎	殿	雪訓	三ノ沢	殿	ハツ上半	沈	中央チムニ	剣沢				

〈源治郎遠足〉 BC(5:10)-I峰  
(8:35)-本峰(10:45)-BC  
(13:35)

〈源治郎～仙人池ビバーク〉〈ハツ峰北面〉は  
登攀、ビバーク項参照。

7月23日 ①のち◎

〈ハツ峰Ⅶ峰CフェースRCCルート〉BC  
(5:35)-取り付き(9:45)-Cフェ  
ースの頭(12:45)-BC(15:05)

長次郎雪溪のブロック崩壊で奥山・草尾が負  
傷、治療して登った。ルートは易しいので難し  
い所を選んで登った。(記 上月)

〈ハツ峰Ⅶ峰Cフェース剣稜会ルート〉 BC  
(5:35)-取り付き(9:45)-Cフェ  
ースの頭(13:35)-BC(15:05)

〈御前谷ビバーク〉〈真砂沢遠足〉は登攀、ビ  
バークの項参照。

7月24日 ●

7月25日 ①

〈ハツ峰六峰Cフェース剣稜会ルート〉 BC  
(5:10)-取り付き(7:30)-Cフェ  
ースの頭(11:35)-BC(12:40)

〈ハツ峰六峰Cフェース剣稜会ルート・RCC  
ルート〉 BC(5:10)-取り付き(RCC  
ルート)(7:20)-同終了(10:15)  
-取り付き(剣稜会ルート)(11:00)-  
同終了(13:15)-BC(13:15)

〈雪上訓練〉 BC(5:20)-ハツ峰I・  
II峰間のルンゼ(6:20～9:50)-B  
C(10:30)

〈チンネ左稜線〉〈本峰北壁L<sub>1</sub>〉〈本峰北壁L<sub>2</sub>〉  
は登攀、ビバーク項を参照。

7月26日 ①のち◎

〈源治郎I峰下部中央ルンゼ〉 BC(6:3  
0)-取り付き(8:40)-同終了(13:  
00)-BC(13:00)

上部名大ルートに行く予定であったが、朝の  
出発が遅れたのと、名大ルートの取り付きを間違

えたため、下部だけに終わった。

(記 越智)

〈ハツ峰下半遠足〉 BC(6:30)-I峰  
(9:10)-II峰(10:40)-V・VI  
の科尔(12:05)-BC(13:10)

〈本峰アタック(別山尾根より)〉 BC(6  
:30)-剣山荘(8:20)-前剣(9:  
35)-本峰(11:35)-BC(13:  
55)

〈Dフェース久留米大ルート〉〈三ノ沢遠足〉  
は登攀、ビバークの項を参照。

7月27日 ●のち◎

〈雪上訓練〉 BC(8:20)-熊ノ岩付近  
(9:50～13:40)-BC(14:1  
0)

7月28日 ○のち◎

〈ハツ峰Ⅶ峰Dフェース富山大ルート〉  
BC(5:15)-取 付き(8:30)  
-Ⅶ峰のピーク(11:30)-BC(  
13:30)

ホールド、スタンス大きく、思ったほど難し  
いルートではなく快適なルートであった。

(記 房本)

〈ハツ峰Ⅶ峰Dフェース久留米大ルート〉 B  
C(5:15)-取り付き(8:40)-Ⅶ峰  
ピーク(11:50)-BC(13:10)

〈ハツ峰Ⅶ峰Bフェース京大ルート〉 BC  
(5:15)-取り付き(7:20)-Bフェ  
ースの頭(9:20)-BC(12:15)

概して易しいが2ピッチ目で下にいた鹿児島  
大のパーティが転落して、ヘリコプターで運ば  
れて行った。Aフェースにも登ろうとしたが、  
順番待ちが多いため断念した。(記 湊本)

〈本峰南壁A1〉 BC(5:20)-取付き  
(8:50)-終了(11:30)-本峰  
(11:55)-BC(14:00)

2ピッチ目のチムニーと3ピッチ目の凹角が少々難しいだけで、快適にザイルをのぼす。本峰の人々が手を振るのが見えたが、我々がそこに着くころにはガスとなって長次郎左俣に下るのに難儀した。(記 小杉)

〈ハッ峰上半〉 BC(5:20) - V・Ⅷの  
コル(6:40) - Ⅷ峰(9:30) - BC  
(12:30)

〈ハツ峰～仙人池ビバーク〉〈下廊下ビバーク〉  
は登攀ビバークの項を参照。

7月29日 ●のち◎

7月30日 ●ッ 〈雪上訓練〉 BC(5  
:15) - 長次郎左俣(7:25～9:40)  
- BC(12:10)

〈マイナースラブ敗退〉 BC(5:05) -  
取り付き(6:55) - 2ピッチで敗退決定(7:  
50) - BC(10:20)

〈チンネ北条新村～gcdルート〉 BC(4  
:55) - 取り付き(7:15) - 終了(13  
:30) - BC(15:00)

北条・新村ルートではすごい雨のため、A<sub>0</sub>  
で行く所はすべてA<sub>1</sub>。上部gcdも所々アブ  
ミを出す苦しい登攀であったため、5時間も要  
した。(記 房本)

〈剣尾根敗退〉 BC(5:00) - R10取り  
付き(9:35) - 尾根に出る(10:10)  
- 敗退を決定(12:10) - 池ノ谷乗越  
(17:15) - BC(18:30)

あまりにも雨が強くなったためドームの乗越し  
が困難になると予想されたため、敗退を決定し  
た。

〈チンネ左下カンテ～筑豊ルート〉は登攀、ビ  
バークの項を参照。

7月31日 ●のち◎

8月1日 ①のち◎

〈チンネ左稜線〉 BC(5:05) - 取り付き

(8:10) - 終了(14:10) - BC(16  
:00)

〈チンネ中央チムニー〉 BC(5:10) -  
取り付き(8:55) - 中央バンド(12:0  
0) - 終了(13:30) - BC(15:5  
5)

〈別山沢遠足〉 BC(5:20) - 別山直下  
(8:20) このあたりで2ピッチ程岩登り  
- BC(12:50)

別山沢ははじめ転石沿いに登り、後は雪溪歩  
き。最後はすばらしいお花畑である。大浜が手  
を切り、治療した後別山の側壁に遊んだ。

(記 越智)

〈チンネ魚津高～gcdルート〉 BC(5:  
05) - 取り付き(8:45) - 中央バンド  
(11:10) - 終了(10:50) - BC  
(15:55)

〈マイナースラブ〉は登攀、ビバークの項を参  
照。

8月2日 ①のち◎

〈剣沢往復〉 BC(5:25) - 剣沢小屋  
(6:55) - 奥山、大浜室堂に下山(7:50  
～11:50) - BC(12:25)

大浜の昨日の手のケガが思わしくなく今日中  
に富山に降ろすことにする。奥山がつきそい、  
室堂に下山させ、再び奥山は剣沢小屋にもどる。  
後はBCへ走り下った。(記 榊原)

〈本峰南壁A<sub>2</sub>〉 BC(5:00) - 取り付き  
(7:40) - 本峰(10:15) - 別山尾  
根 - BC(13:30)

〈本峰北壁L2〉 BC(4:50) - 取り付き  
(7:20) - 終了(9:50) - 本峰(1  
0:15) - BC(12:20)

〈チンネ北条・新村～gcd〉 BC(4:3

0) - 取り付き (7:40) - 終了 (10:40) - BC (13:15)

〈チンネ左下、左方カンテ〉 BC (4:30)  
- 取り付き (7:50) - 終了 (12:10)  
- BC (15:10)

8月3日 ① 〈黒部第四ダム下山〉 真砂 (8:40) - 黒四ダム下山 (14:50)  
〈室堂下山〉 真砂 (8:50) - 室堂下山 (13:20)

(登攀およびビバーク)

源治郎〜仙人池ビバーク 7月22日①BC (5:10) - I峰 (8:35) - 本峰 (10:45) - 三ノ窓 (13:05) - 小窓 (15:00)

源治郎尾根の取り付きはルンゼからの落石が激しく、左の尾根に取り付いた。急登でハイ松を握って登った。本峰からは浮石が多く不安定である。ルートはほとんど踏跡通りであるが、一ヶ所池ノ谷側をトラバースした。三ノ窓から小窓への登りはフィックスロープが張っており、見た目より石も安定していた。

7月23日 小窓 (4:45) - 池ノ平山 (6:00) - 仙人池 (7:25) - BC (9:20)

小窓からの次のピークへのトラバース道には雪渓があって、アイゼンをつけてトラバースした。池ノ平山への登りは非常に急だがハイ松をホールドにして登った。仙人池からは雄大な裏剣が見えた。それにしても二股のつり橋は崩壊寸前である。 (記 榊原)

ハッ峰北面 BC (5:05) - 菱の谷出合 (7:25) - 二股 (11:50) - BC (14:00)

菱の谷の雪渓に入ってから急激に傾斜が強くなる。所々切れているが登れる。菱形岩峰の直下で谷は右へ屈折しており、その約50m上で雪渓は完全に切れている。ザイルを出して野口

が偵察する。幸い左岸に取り付くことができたので、全員移動して新しいルートを捜しに行く。確保して取り付くがハーケンの数も少なく左岸からの登路は縮めた。小休の後、上月が右岸を偵察するが無理で敗退を決定した。

菱の谷に限らず、今年は雪が少ないのか上部の雪渓が切れていてとても危い。コルまであともう少しであったが、兩岸の圧倒的な岩壁にはばまれ悔しくも敗退を余儀なくされた。

(記 上月)

御前谷ビバーク 7月23日 BC (5:30) - 内蔵助平 (7:55) - 丸山のコル (11:20) - 二股 (13:30) - BS (17:10)

内蔵助平にある小さな川をつめて丸山のコルを目指す。ブッシュ帯を過ぎると広い湿原となる。このあたりは多くの水流が集まっており、最も大きいそれをコル目指してつめると、やがて水がなくなりブッシュとなり、そのうちコルに出る。このルンゼは丸山東壁からの下降に使用されていると思われた。コルより笹をつかんでルンゼにおいて御前谷右俣にはさらに簡単に下れる。御前谷右俣は何の問題もない河原である。二股まで下り、左俣を見るとき地図にある滝まで兩岸絶壁でスノーブリッジのぼろぼろになっているのが見えたので、左右両俣の中間の尾根より巻くことにするも、すさまじいブッシュとなり、ブッシュ帯のルンゼでビバークとする。夕刻よりすさまじい雨となり、ビショ濡れになった。

7月24日 BS (5:30) - 奥の二股 (10:25) - 富士の折立付近の稜線 (14:20) - BC (17:50)

さらに上流へブッシュを漕ぎ、下り始めたが傾斜があるのでザイル2ピッチで河床へ。そこはしっかりした雪渓であったが、すぐに再び切れる。これは左岸を簡単に巻いた。この上でルンゼが入っているが見送り、もう一つ上の二股より右股に入る。ここからすぐにゴルジュ状の滑滝となり、非常に快適である。やがて水がなくなり、さらには巨大な雪渓が現われた。兩岸に立山の岩場を眺めながら登るとヒョッコリ稜線に出た。

(記 佐々木)

真砂沢遠足 BC(5:40)-2,150  
m地点(8:20)-真砂尾根(10:40)  
-内蔵助山荘(11:50)-BC(13:  
50)

真砂小屋から雪溪を渡り沢の左岸に行く。左岸通しがやがて難しくなるため、スノーブリッジの崩壊下、滝のすぐ下流を右岸へ飛び移る。水量が多いため徒渉は困難と思われる。ここから右岸通しに進むが、一ヶ所きわどいヘツリを行うと、やがて大きい雪溪となった。左岸には、お花畑が広がり、全くすばらしい所である。やがて右岸が開け、このあたりより真砂尾根2,584mに突き上げる沢を詰めた。易しいので左岸の岩場をザイルを出して登ると簡単に尾根に出られた。真砂尾根は踏み跡があり、ダムを眺めてノンビリ内蔵助山荘へ向かった。(記 大石)

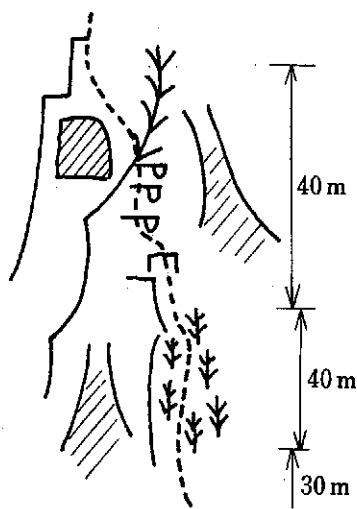
チンネ左稜線 BC(4:54)-三ノ窓  
(8:05)-終了(14:50)-BC  
(19:20)

取り付けは傾斜のある凹角で1P目は雪の下にかくれていた。1P目はボロボロであるが、ホールドも大きくハーケンも多いので問題はない。2・3P目は水が流れるフェースである。4P目は非常にもろく、最後のピナクルは右からまわり込んだ。5P目よりルート間違え、正規ルート右のルンゼを2P登った。7P目・8P目はどこでも登れるフェースで、9P目でナイフエッジとなる。10P目・11P目もリッジでT5に着くも時間待ちとなる。12P目は核心部でハングではピン連打にもかかわらず予想以上に時間を費した。13P目も傾斜はあるがピンが多く安心だ。14P目から再びナイフエッジとなり、15・16Pは問題なし。それにしてもこれだけ帰幕の遅くなったことに対しては反省すべきであろう。原因を並べてみると、1.取り付けの確認に時間を要した。2.人工登攀に時間を要した。3.チンネの頭から池ノ谷ガリーへの下り口がよくわからなかった。4.長次郎左俣上部で手間取った、などが挙げられるだろう。

(記 草尾)

本峰北壁L<sub>1</sub> BC(5:10)-取り付け  
(8:10)-終了(9:20)-BC(1  
2:45)

取り付けのシュルトには案内索に下りることができた。1・2ピッチ目は問題なく、3ピッチ目のみが問題となる。ここはブッシュ帯から支稜に入る所がいやらしい。少々効きの悪そうなピンを使ってA<sub>0</sub>で強引に乗越す。後は浮石に注意すれば簡単に登れる。概して易しいルートで足ならしにはもってこいであろう。(記 上月)



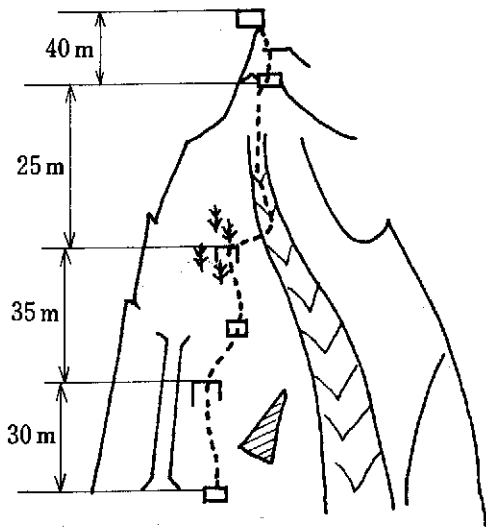
北壁L<sub>1</sub>ルート図

本峰北壁L<sub>2</sub> BC(5:10)-取り付け  
(7:50)-本峰(10:05)-BC  
(12:45)

1P目はフェースの左のルンゼ沿いに登る。  
2P目はルンゼからテラスに上がり右へトラバースするとハイマツテラスである。3P目は、砂混じりのルンゼを登るが脆くかなりシビアである。4P目はリッジ通しではハイマツが茂り興味がそがれるので左のフェースを登るが岩の対象としては3P目までであろう。

(記 房本)





北壁L<sub>2</sub>ルート図

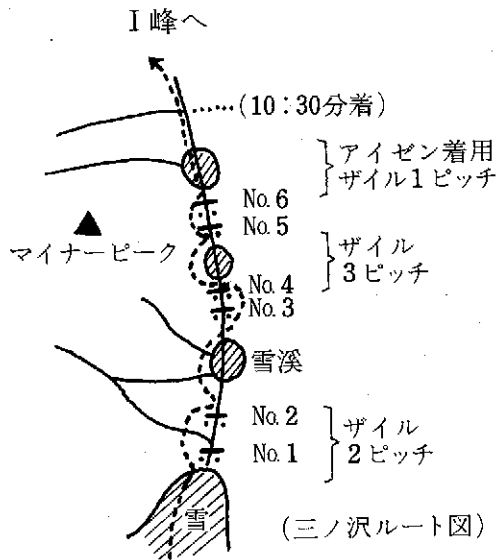
ハツ峰Ⅶ峰Dフェース久留米大ルート B  
C(6:30)ー取り付け(8:20)ーDフェースの頭(12:35)ーBC(14:00)

取り付けはずっと右の方と思われたが、雪溪がズタズタで行けず富大ルートの取り付けの5m程右から登る。凹角気味の細かい箇所を直上し右寄りに登る。2P目は細かいフェースの直上から右へトラバースする。このトラバースが極めてシビアでホールド・スタンス共に乏しく苦しかった。ここより正規ルートとなり、フェースを直上すると上昇バンドの右端に出る。3P目はフェースの右端を登る。10m程登った所で先行パーティーに追いつき、外傾したフットホールドで時間待ちする。スラブを直上してハング帯の下を右に巻き垂壁を登るとテラスである。ここはピトンベタ打ちのA<sub>1</sub>である。4P目はブッシュからフリクションのよくきくおおまかなスラブを登る。5P目も4P目と同様でおおまかなスラブ。しごく快適であった。やがてDフェースの頭が見えてくる。(記 上月)

三ノ沢遠足 BC(6:35)ーハツ峰I峰(11:55)ーI・IIのルンゼーBC(13:10)

所々小さな雪溪が残っているが、かなり不安定である。岩はそれに反してしっかりしていて快適である。こんな近くにこのような静かで快適な岩場があるとは、その意味からももっと行くべきであろう。(記 榊原)

ハツ峰～仙人池ピバーク 7月28日 B  
C(5:20)ーⅤ・Ⅵのゴル(10:40)  
ー三ノ窓(13:35)ー小窓(15:40)



(三ノ沢ルート図)

ハツ峰下半は型通り懸垂するだけで極めて容易に行けた。Ⅶ峰よりハツ峰上半パーティーがクレオパトラニードルを登るのが見えた。Ⅶ峰の登りはⅡ～Ⅲ級の岩登りである。小ギャップを越えた頃よりガスとなり、池ノ谷ガリーの辺りで雨となった。どうも佐々木とピバークへ行くと雨ばかりのようで、ビショ濡れとなった。

7月29日 三ノ窓(5:20)ー仙人池(8:45)ーBC(10:55)

雨のために非常にすべりやすい。ガスの中ひたすらBCへ向かった。(記 畑)

下廊下ビバーク 7月28日 BC(5:40) - 内蔵助谷出合(6:20) - 白竜峡(10:30) - 十字峡(11:20) - 阿曾原(15:30)

下廊下は雪も残っておらず、何の苦もなく通過できる。白竜峡～十字峡は見ごたえもあるが、後はひたすら水平道で単調だ。やがて雨となり阿曾原から少し仙人よりにトンネルを見付けてもぐり込む。

7月29日 阿曾原(5:30) - 仙人池(10:10) - BC(13:10)

阿曾原からは苦しい登りであるが、仙人池はガスで報われることもない。あとはBCまで駆け下った。  
(記 大浜)

チンネ左下～筑豊ルート BC(4:30) - 三ノ窓(7:00) - 終了(13:30) - BC(15:00)

左下カンテの取り付きはピトンベタ打ちで容易な人工であるが、ハングの上のフリーで右へ行きすぎ“白い岩”の下に出る。やむなく左へトラバースしたがスタンスが乏しく、腕だけで苦しかった。2 P目はIV<sup>-</sup>であるが、フリクションルートのため、雨で全く不快である。3 P目よりルンゼに下り、中央バンドを目指す。このころより滝のような雨となり、hクラックを断念して筑豊ルートへ向かった。このルートは左方カンテの右の凹角を少し登った所である。1 P目・人工主体と思っていたにもかかわらず、かぶり気味のフリーで、滝のような水を浴びて、ハーケン1本を打ち微妙なフェースを乗り切った。ここは本当に苦しかった。2 P目も最初のクラックがかぶり気味で苦しく左足をクラックに入れ、右足をつっぱり登った。その上のハング気味のフェースを越えて左へ左へトラバースすると左方カンテの終了点らしき所に出た。ここはすごい風雨であった。ここからは左稜線と合流し、易しいリッジだが慎重に登るとチンネの頭である。  
(記 越智)

マイナースラブ BC(5:00) - 取り付き(6:30) - 終了(11:00) - I峰(13:00) - BC(14:50)

取り付きはハング下テラスで1 P目は濡れていやらしい。2 P目～9 P目は傾斜のゆるいスラブでフリクションで十分行ける。10 P目が核心部でバンドまで直上して右へトラバースするが、フリクションのみで微妙である。11 P目も傾斜があるが、ホールドは大きい。12 P目は部分的に難しい。13 P～15 Pは快適なフリーで、最後はブッシュをつかんで登った。下降路は二ノ沢への下り口がわからず、I・IIのゴルヘ向かうが非常にしんどかった。

(記 野口)

## 夏山縦走

### 南アルプス全山縦走

甲斐駒ヶ岳—仙丈岳—北岳—農鳥岳—塩見岳  
—悪沢岳—赤石岳—聖岳—茶臼岳—光岳

期間 8月5日～8月13日

参加者 房本(L)、上月、榊原、佐藤

8月5日 ① 戸台(7:30)—丹溪山  
荘(10:30)—大平小屋(12:30)  
—北沢峠(13:00)

高遠よりバスで戸台へ。丹溪小屋に登山届を提出して八丁坂の登りにかかる。右手にスーパー林道が見え始めると大平小屋、さらに20分で北沢長衛小屋に着く。

8月6日 ●キのち① 出発(5:00)  
甲斐駒ヶ岳(7:30)—仙水峠(10:30)  
—帰幕(11:30)

霧雨の止むのを待ってアタックに出る。北沢峠から双児山を経て、白砂の甲斐駒山頂に立つ。巨岩を乗越しながらの楽しい登りである。帰りは、駒津岳より仙水峠を経て、ガラ場の道に戻る。

8月7日 ①のち② 出発(4:00)—  
馬ノ背ヒュッテ(6:45)—仙丈岳(8:  
35)—両俣(12:40)

大平小屋より藪沢沿いに行く。馬ノ背から仙丈までは結構遠いが、お花畑の美しいカールで、是非一泊してみたい所だ。後はその名の通り延々と続く馬鹿尾根をひたすら歩いて両俣へ。

8月8日 ① 出発(4:10)—北岳  
(8:30)—間ノ岳(11:00)—農鳥  
小屋(11:50)—農鳥岳アタック～13:  
40)

ほとんど右岸沿い。数箇所左岸に渡る所があるが、注意していないと見落す。森林限界を越

え、北岳の雄姿が眼前に迫ってくると自然歩調も軽くなる。本邦第二の高峰に勢い立つも、黒山の人だかりにいささか興趣をそがれる。予定では西農鳥のアタック後、熊ノ平まで進むつもりであったが、欲張って農鳥へ足を伸ばした為全員ダウン。幕営にかかる。ここは水場が遠く、これまた一苦勞。

8月9日 ①のち② 出発(5:10)—  
熊ノ平(7:00)—塩見岳(11:00)  
—三伏小屋(14:10)

雲海と朝焼けに見とれて出発が遅れる。農鳥小屋からのトラバースは強烈で、山腹をいくつも巻いて熊ノ平へたどりつく。お花畑の北荒川岳は道が二通りとれるが大差はない。塩見から本谷山への道は地図と異っている様である。

8月10日 ①のち② 出発(4:30)  
—小河内岳(6:20)—高山裏(8:50)

本日は半日行程で、折からガスも湧き出してきたこともあり、早いけれども幕営して休養をとる。天場は狭く、水の便も悪い。

8月11日 ①のち② 出発(3:35)  
—荒川前岳(6:10)—悪沢岳アタック～8:  
00)—赤石岳(10:30)—百間洞  
(12:30)

昨日の休養で元気回復。荒川三山をアタック後、赤石岳も難なく登り切る。山行も後半に入り、残すは聖だけとなった。百間洞の天場は下流にもあるから、なるだけ下っておいた方がよいだろう。

8月12日 ①のち② 出発(4:05)  
—聖岳(8:10)—上河内岳(11:25)  
—茶臼小屋(12:40)

兎岳を下ると道が不明瞭になり、聖へはブッシュをつかんでの急登と、西面のスッパリ切れた稜線歩きで、今山行中最も緊張した所であった。聖からはポックラ、お花畑で昼寝しながら茶臼へ向う。

8月13日 ①のち② 出発(4:00)  
—光岳(7:25)—帰幕(10:05)  
茶臼小屋出発(10:30)—畑雑ダム(1:  
3:45)

本日中の下山目指してアタックを急ぐ。

光岳は、湿原のきれいな所であるが、三角点を踏むや休憩もそこそこに引き返す。荷物をまとめ驚く小屋の主人を後に、畑雑大吊橋まで一目散に駆け下る。(記 上月)

### 越後三山～朝日岳縦走

期間 8月5日～8月11日

参加者 科野(L)、越智、稲成、小杉

8月5日 ◎ 枝折峠(13:45)→道行山(15:30)

上越線小出駅からバスで枝折峠へ向う予定だったが、バスに乗り間違えて入山が遅れる。この日のうちに駒ノ小屋に達する見込みがないので、道の上に幕営する。

8月6日 ●キのち① 出発(6:15)→小倉山(6:55)→駒ノ小屋(8:50)→駒ヶ岳アタック～9:45→檜廊下(11:35)→中ノ岳(14:00)

駒ノ小屋迄は湿地で道もよいが、檜廊下はちょっとした岩稜帯である。その先は稜線も細くなり、ブッシュが出てくる。中ノ岳には避難小屋があり、頂上帯は広い平地で幕営によい。水は20分程下った所に流れている。

8月7日 ◎のち① アタック出発(5:15)→御月山(6:00)→オカメノゾキ(7:10)→帰幕(9:50)

中ノ岳出発(10:35)→兔岳(12:50)→丹後山(14:20)

この日は八海山までのアタックのみの予定であったが、前日のブッシュの状態に加え、中ノ岳以降に道がないことも考えて、八海山への最低鞍部であるオカメノゾキで折返し、この日も前進することにした。オカメノゾキへは数箇所鎖場があり、ここからの展望はすばらしい。中ノ岳からは予想外に踏跡もしっかりしており、丹後山まで順調に進む。丹後山を少し過ぎた笹ヤブの中で幕営する。水はすぐ下の雪溪から取った。

8月8日 ① 出発(5:00)→越後沢山(8:05)→下津川山(12:30)→

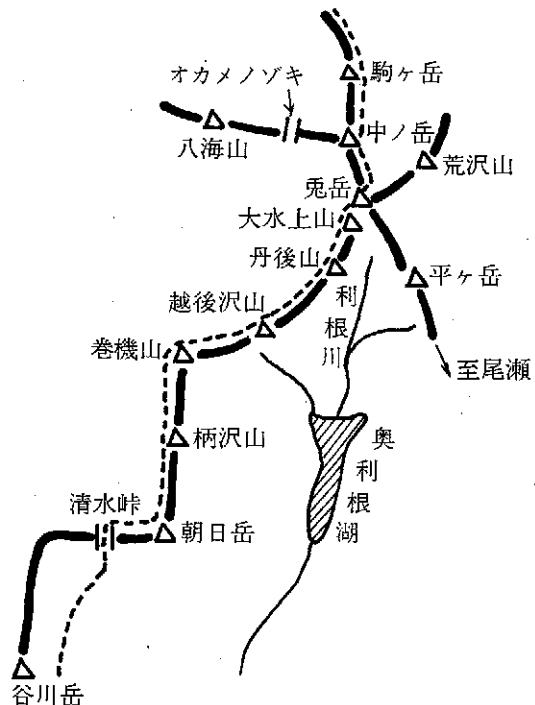
小沢岳(13:40)→幕営(15:15)  
丹後山からは踏跡乏しく、背丈程のブッシュに悩まされる。越後沢山の登りにかかると幾分明瞭になって、わずかに岩稜もあらわれる。小沢岳から1,790mのピークを過ぎ、三ッ石沢の支流が稜線近くまで上っている所に幕営。この日は他パーティーに出会わなかった。

8月9日 ① 出発(4:50)→三石山(5:30)→牛ヶ岳(9:50)→米子頭山(12:40)→池塘(14:10)

牛ヶ岳まではこれまで同様笹のブッシュが続く。牛ヶ岳から巻機山は湿原で道もよいが、やがて再び笹に被われた道となる。米子頭山と柄沢山間の池塘に水を得て幕営する。

8月10日 ○ 出発(5:30)→柄沢山(6:05)→大烏帽子山(10:00)→朝日山分岐(11:40)→朝日山アタック～12:30→清水峠(13:40)

ブッシュが続く。朝日山頂は湿原で、ここより清水峠まではブッシュも減り、ひたすら下る。



上越国境稜線概念図

本日あたりから稲成の体調悪くなり、持病を医者に注意されていたこともあって、谷川岳を断念し明日から下山することにする。清水峠にも人はなく、荒廃した避難小屋があるのみ。水は、旧道(清水街道)に沿って北の方へ進むと細い流れに出会う。

8月11日 ① 出発(7:50)―土合駅(11:35)

旧国道を南へたどる。白樺小屋は小さな荒廃した避難小屋である。ここからは谷筋に下る方がよいだろう。(記 稲成)

### 後立山縦走

期間 8月5日～8月14日

参加者 奥山(L)、大石、野口、畑

8月5日 ◎ 祖母谷温泉発(7:10)―不帰岳避難小屋(15:50)

8月6日 ① 出発(5:40)―旭岳(9:50)―主稜線(10:50)―白馬アタック(11:00～11:50)―天狗山荘(14:25)

8月7日 ① 出発(5:00)―唐松岳(8:25)―五竜山荘(11:00)

8月8日 ○ 出発(4:25)―五竜岳(5:10)―鹿島槍ヶ岳(11:10)―冷池山荘(12:10)―種池山荘(13:55)

8月9日 ① 出発(5:40)―岩小屋沢岳(7:20)―赤沢岳(9:20)―針ノ木岳(11:55)―針ノ木峠(12:30)

8月10日 ①のち◎ 出発(5:30)―蓮華岳(6:25)―七倉岳(8:45)―不動岳(14:30)―烏帽子小屋(18:05)

8月11日 ① 出発(6:30)―野口五郎岳(9:30)―三俣蓮華小屋(14:00)

8月12日 ① 沢登りビパーク 出発

(6:30)―岩苔乗越(7:30)―高天ヶ原山荘(9:00)―立石(10:15)―薬師沢出合付近(15:20)

8月13日 ○のち◎ ビパーク地点発(5:40)―赤木沢出合(6:20)―中俣乗越(8:35)―黒部五郎小屋(11:30)―帰幕(13:05)

8月14日 ◎のち● 出発(5:05)―双六小屋(6:05)―秩父平(9:00)―笠ヶ岳山荘(11:05)―笠ヶ岳(11:30)―槍見温泉(15:30)

(記 畑)

### 北海道(大雪山周辺)

期間 8月12日～8月18日

参加者 小松(L)、湊本

8月12日 ① 層雲峡(4:20)―黒岳(9:00)―旭岳下の天場(13:50) 人が多い中、垂直の壁の層雲峡を出発。黒岳までは急登をのんびり行く。黒岳からは大雪連峰が一望されるがのんびりとしてスケールは大きい。旭岳までもタラタラとした稜線をひたすら歩くだけで気持ちよい。

8月13日 ①のち● 出発(4:50)―白雲岳(7:30)―忠別岳(11:30)―忠別岳下の天場(12:40)

旭岳をアタックして白雲岳にむかう。このあたりはカール状で草原と残雪が美しい。やがてガスが出てきて何も見えなくなる。こうなると実につまらない所となりひたすらペンキの目印を拾って忠別岳に登った。小屋付近に幕営する。

8月14日 ◎ 出発(4:00)―化雲岳(6:00)―天人峽(10:25)―クワウンナイ川下部(14:15)

化雲岳からは下りで足が痛くなるころ、天人峽に着く。いよいよクワウンナイ川の溯行であるが、視界はなく意欲ももう1つ湧かない。何の変化もない平凡な河原が続き、適当な所にテントを張る。

8月15日 ●のち◎ 出発(4:50)―

二俣(8:40)ー稜線(13:15)ート  
ムラウシ北沼(14:10)

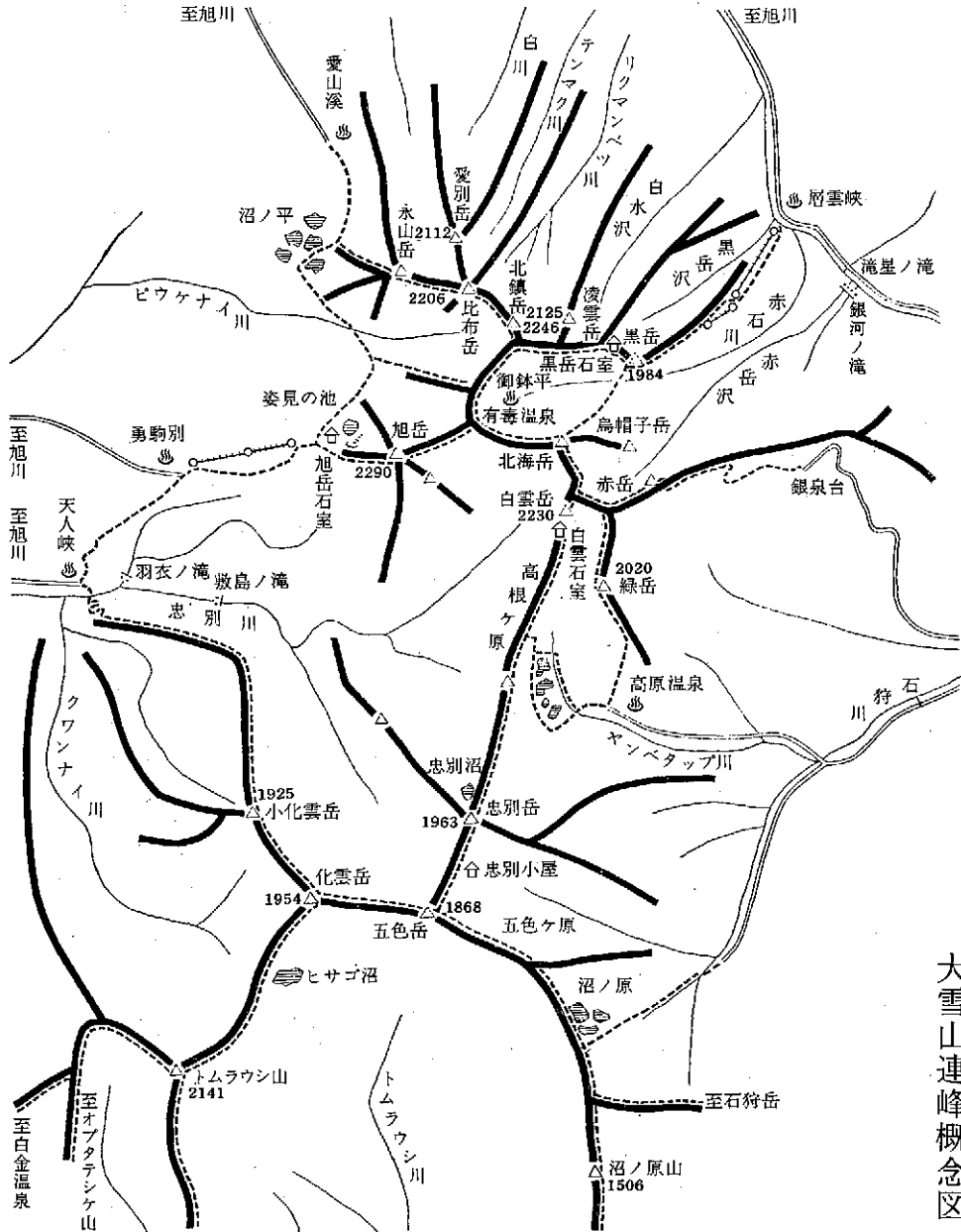
「いよいよ」というのに雨である。気が重いままに出発。平凡な河原は二俣からようやく沢らしくなり、2 kmの滑はさすがにすばらしい。雨もやみ心も軽くなってくる。ここを通過すると急な流れとなり雪溪が広がる。そして広々としたトムラウシの北沼に出る。誠に雄大である。

8月16日 ◎ 出発(4:15)ー化雲  
岳(6:30)ー天人峽(9:30)

相変わらず天気は良くなく、ひたすら走り下った。

8月17日 ● 沈

8月18日 ● 十勝へ縦走する予定であったが、雨が降り、意欲もなく下山することにした。(記 小松)



大雪山連峰概念図

## 10月個人山行

### 中央アルプス縦走

期間 10月12日～10月14日

参加者 上月(L)、湊本、榊原

10月12日 ◎ 大原(7:35)―木曾駒(15:15)―頂上山荘(15:35)

スキー場までと思ったバスが大原までしか入らず、アスファルトの道を1時間も歩くはめになった。登りは単調で、ガスの為景色も見えない。山姥奇岩は大日岳の七福園の様な所だ。頂上までの2000mを登りきった時には皆へとへとであった。

10月13日 ● 出発(5:55)―宝剣岳(6:25)―濁沢大峰(8:00)―熊沢岳(10:40)―空木岳(13:30)―摺鉢窪避難小屋(13:05)

出発のころから降り出した雨は次第に強まり稜線の風とあいまって横なぐりに冷たく打ちつける。寒さの為終始無言で、休息もそこそこに先を急ぐ。宝剣・空木は、ともに巨岩の積み重なった様な所で、鎖が出ている。水は松尾岳から10分程下った所と、木曾殿越を少しトラバースした所にある。摺鉢窪へは赤柳岳を下りきった所に道標があり、ここより小屋目指して一気に駆け下りる。

10月14日 ◎のち● 出発(5:45)―越百山(8:45)―林道登山口(11:15)―伊奈川ダム下山(12:10)

台風の接近に伴い、天気はいっそう悪くなると思われたが、意外な好天に驚かされる。南駒ヶ岳からのパノラマは今山行唯一の展望で、御岳から南アルプスまではっきり見渡せる。仙漣嶺の難所をぬけ越百山からは下る一方である。林道に出たころから雲行き怪しく、ダムに下山

するや雨が降り始めた。(記 上月)

### 八ヶ岳縦走

期間 10月7日～10月9日

参加者 野口(L)、畑

10月7日 ● 麦草峠(8:20)―高見石(9:10)―中山峠(10:20)―オーレン小屋(12:10)

黒ユリヒュッテで幕営の予定だったが、時間があったのでオーレン小屋まで行く。北八ツ随一の展望地と聞いていたが、雨のため稜線からは何も見えず、ひたすら乳白色の中の山道を歩く。

10月8日 ◎のち① オーレン小屋(6:30)―硫黄岳石室(7:40)―横岳(8:30)―赤岳石室(9:20)―赤岳(10:00)―キレット小屋(11:10)―権現岳(12:40)―青年の小屋(13:15)

風が強く横岳の通過が心配だったが、行ってみるとなんとなく通過。ガスで下が見えなかったせいもある。赤岳からの下りは少し道がわかりにくかった。権現岳あたりから晴れだし、やっと秋山らしくなってきた。

10月9日 ○ 青年の小屋(6:15)―編笠山(6:30)―富士見平(7:55)―小淵沢下山(10:20)

最後の日だけでも晴れたのは幸いだった。編笠山からの展望はこの山行中最も印象的だった。

(記 畑)

### 白山縦走

期間 10月9日～10月13日

参加者 大石(L)、佐藤

10月9日 ①のち◎ 平泉寺出発(14:00)―三頭山(15:15)―中ノ平

(16:30)

浄土寺、一本松を通過して中ノ平に行く予定だったが、市役所の人の話によると道がわからないであろうということで、平泉寺より入山する。途中天気図をとり、難なく中ノ平に着く。

10月10日 ◎のち◎のち● 出発(5:30) - 法恩寺山(6:15) - 大舟山(14:00) - 大舟山の下り(16:45)

初日とうってかわってブッシュの中を歩くことになる。経ヶ岳の分岐まではササのブッシュで、そこからは木まじりのブッシュ。踏み跡もほとんど不明のため、偵察に行ったり、引きかえしたりの繰り返しで、結局3岩峰の二つめと三つめの間を乗越すとかすかな踏み跡があったのでこれを行く。やっとの思いで大舟山に着くが、ここからの下りも道不明のためツェルトをはる。

10月11日 ● 出発(6:15) - 赤兎山(8:45) - 杉峠(14:45)

ブッシュをこいで、やっとの思いで稜線の踏み跡にでる。赤兎山付近は道がついているが、

杉峠へ行く途中でまたなくなる。杉峠に着くす前で道ができている。雨の日のツェルトは全く不快であった。

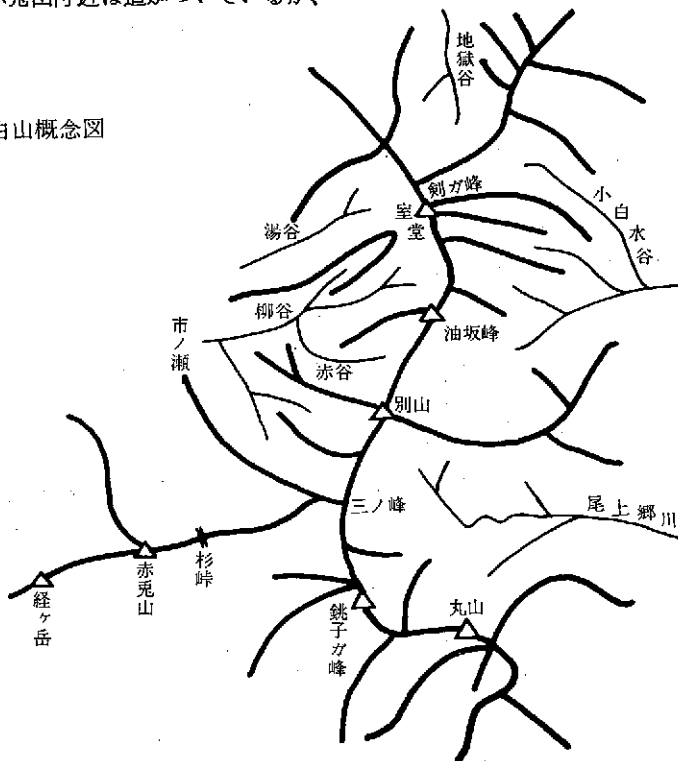
10月12日 ●のち◎のち●キ 出発(6:05) - 三ノ峰避難小屋(9:10) - 三ノ峰(10:20) - 南竜が馬場(14:10)

ここからは道がついているため、なんなく歩くことができる。避難小屋で天気図をとり、再び出発する。雨のため南竜が馬場避難小屋にとまろうとするが、満員のため建設中のTOILETにとまることにする。

10月13日 ●ッ 出発(6:00) - 室堂(7:45) - 白山(8:40) - 別当出合(12:00) - 市ノ瀬(13:45) 室堂から白山をアタックする。新岩間温泉に下山の予定であったが、台風接近のため、最短の下山道をとることにする。別当出合からは、ずっと車道のため歩きにくかった。

(記 佐藤)

白山概念図





後立山縦走(白馬～爺ヶ岳)

期 間 10月8日～10月11日

参加者 越智(L)、大浜

10月8日 ◎のち◎ 梅池(9:25)－天狗原(11:25)－白馬大池(13:05)－三國境(15:05)

タクシーで紅葉の美しい梅池に入る。曇りがちだが快調に行った。石のゴロゴロした乗鞍岳への登りでペースが鈍り、小蓮華あたりで風に吹かれたため、三國境にテントをはる。2人とも風邪気味で体調はすぐれない。

10月9日 ○ 出発(5:45)－白馬岳(6:15)－唐松岳(14:15)

風は強いが好天である。白馬で展望をほしいままにして、唐松を目指す。白馬槍への登りでは少々バテ気味。天狗の大下りを駆け下り、いよいよ不帰のキレットである。疲労のためか大浜が少しバテてゆっくりと登る。唐松山荘では値の高い水を買わされて不快である。

10月10日 ○のち◎ 出発(6:20)－五竜山荘(9:30)－五竜岳(10:30)－キレット小屋(13:25)－鹿島槍(15:00)－冷池(16:00)

今日も好天。細い稜線を慎重に行くと五竜山荘である。水を買おうとするも、泊まり客にしか売れないとのこと。ほとんど水はないが、なんとか冷池まで行こうと急ぐ。キレットは何なく通過するも、鹿島槍の登りはさすがに苦しい。鹿島槍の頂上もそこそこに冷池へ走り下る。

10月11日 ◎のち● 出発(7:00)－種池(9:00)－扇沢下山(11:00)

天気がいよいよ崩れそうだ。雨の降る前にと種池まで走る。しかしついに柏原新道の下りで雨が降り始めた。初めてのリーダーでしんどい山行であった。(記 越智)

奥秩父縦走(笛吹川東沢～瑞牆山)

期 間 10月9日～10月11日

参加者 房本(L)、小杉

10月9日 ○ 西沢と東沢の出合(6:40)－両門滝上流の二俣(10:00)－甲武信小屋(13:30)

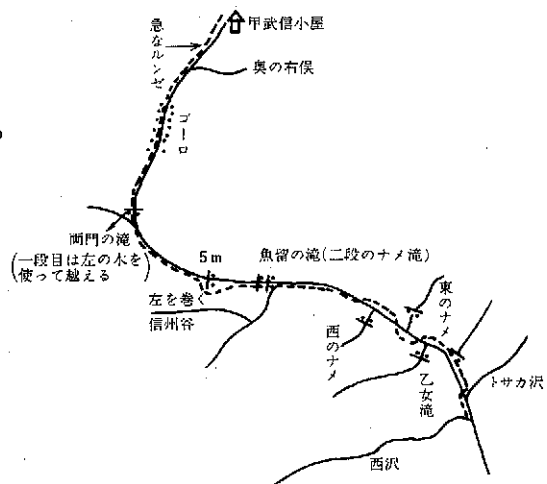
山の神までは沢ぞいの普通の道で河原から河原への渡渉を繰り返す。魚留滝と両門滝の中間の滝は左から巻き、両門の滝を過ぎると二俣となる。左俣の左手を巻いたが途中で踏跡がなくなった。どうも右手を巻くようである。やがてゴーロとなり苦しい登りを登るとひょっこり甲武信小屋に出た。紅葉と岩壁との調和が美しい。また途中のナメのすばらしさには圧倒された。

10月10日 ◎ 甲武信小屋(5:05)－金峰山(12:20)－富士見平(15:05)

途中の大日小屋にも天場はある。金峰山からの下りは長く大変であった。

10月11日 ◎ 富士見平(5:10)－瑞牆山(6:35)－富士見平(7:40)－増富下山(10:10)

瑞牆山は岩峰が林立して、なかなかよい山である。(記 小杉)



# 11月偵察山行

## 毛勝山西北尾根偵察

期間 11月1日～11月4日

参加者 奥山(L)、上月

11月1日 ◎ 阿部木谷出合(8:10)

—1,274m手前(11:05)—1,479m(13:30)—1,650m(15:30)

阿部木谷出合でタクシーを降り、北方稜線パーティに別れを告げ出発した。雪がちらつき寒い一日である。尾根の取り付きはすぐわかるがブッシュの急登で苦しい。2時間強で尾根上に出ると真新しいトレースがあり、一気に高度をかせいだ。

11月2日 ⊗ 出発(5:40)

—1,769m(7:40)—2,023m(11:55)—2,151m(15:30)

新雪で昨日のトレースも消え、二人きりのラッセルが始まった。腰位の積雪でわかんが欲し

いところだ。ルートは尾根通しであるが、2,023m手前の2重山稜通しに下り、右の山稜を巻くようにコル目指してトラバースする。赤旗は随所にあるがほとんどが3年前の我部のものであった。

11月3日 ⊗のち○ 2,151m(6:00)—毛勝ピーク(9:40)—2,023mと2,150mのコル(13:00)—1,700m(14:30)

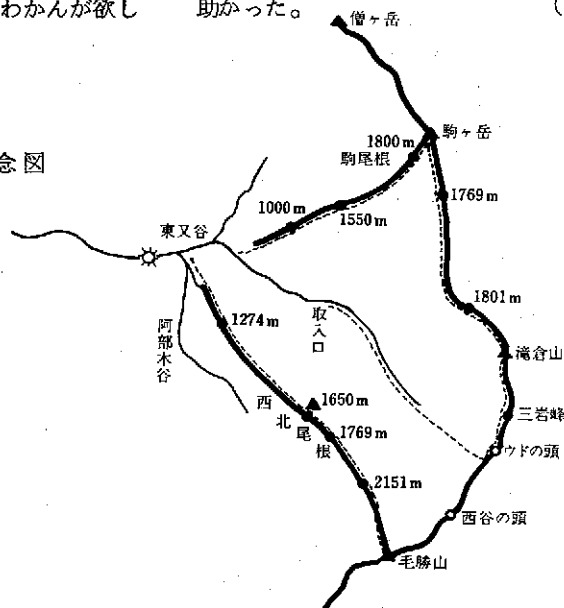
相変わらずラッセルが続くが2,200mを越えたあたりから雪もしまり、ハイ松の上のクラストした斜面をアイゼンを効かせて快適に登っていくとピークはすぐそこであった。計画では剣まで行く予定であったが、ガスで何も見えず、思わぬ積雪のためエスケープのブナクラ谷の下降も危険と思われたので引き返すことに決めた。1,700m付近まで下ったところ、晴れ間がぞき始め悔むが後の祭りである。

11月4日 ○ 1,700m(6:00)

—宗次郎谷出合下山(14:30)

宗次郎谷への降り口が間違っていたため、一つ横のルンゼに入り込む。ブッシュをつかんで下るが、最後の堰堤の所はザイルを出し、慎重を期す。魚津へは工事用の車に乗せてもらい、助かった。(記 上月)

毛勝山周辺概念図



## 駒ヶ岳～ウドの頭偵察

期 間 11月1日～11月6日

参加者 科野(シ)、房本

11月1日 ●のち◎ 東又谷北又谷出合  
(8:15) - 1,000m付近(9:40)  
- 1,550m付近(14:10)

取り付きまでタクシーで入る。林道にも雪が積もり、風こそないが冬山のような。雨具をつけて駒尾根に取り付く。急斜面を5m程登ると尾根に出る。ブッシュはそんなにひどくない。900m位でアイゼンをつける。スベリ止めの意味で雪はまだおちついていない。1,000mのジャンクション少し手前に急登がある。1,100m～1,200mは2重山稜気味である。1,250m～1,400mは割と細い尾根を淡々と登る。1,500m付近から段々の広い尾根で地形がつかみにくい。

11月2日 ⊗ 出発(5:40) - 1,800m付近(10:40) - 駒ヶ岳(13:00) - 駒ヶ岳と1,769mピーク間のコル(14:30)

C.S.を出てからも尾根は広く地形は複雑だが上部に行くにつれ、尾根は細くなり急登を行くと1,650mのジャンクションに出る。1,800m付近は尾根も広くテントサイトにもなる。1,800mのコルからは駒ヶ岳目指してラッセルを続け急登が終わってやや平坦になった所が北方稜線への分岐であると思ったが、念のため駒のピークまで行くことにする。ピークは広く丸い。ピークに立った時一瞬ガスが晴れて富山湾が見えた。駒ヶ岳からコルを目指して尾根を駆け下った。

11月3日 ◎ 出発(6:15) - 1,769(8:00) - 1,801mを越えて東へ向かう尾根上で幕営(15:30)

尾根を忠実にたどって行く。1,769mの下りは尾根が細い。そこから次のピークへの登りはやせていて、所々岩が出ていてひやりとした。ピークからは東又谷側は林で黒部側は急斜面である。

11月4日 ① 出発(5:30) - 滝倉山(11:30) - 3岩峰手前(14:30)

C.S.からは林を縫いながらコルへ。コルからサンナビキへは別に何も無い。滝倉山手前の急登は雪がもっと積もれば雪崩の心配がある。滝倉山からは尾根を駆け下った。コルへの降り口はむずかしく支尾根がいくつもあり、一番南東寄りのそれを下った。三岩峰に突入して、二つの岩峰を越えたものの、時間切れでコルに引き返した。

11月5日 ①のち◎ 出発(5:30) - ウドの頭手前(10:00) - 平坑のコル(12:00) - 東又谷1,434m(13:00) - C.S.(17:50)

二峰をまいたあと、三峰は平坦な細い尾根がほんの少し続いたあとウドとのコルに切れおちている。その尾根の中間ぐらいで東又谷側へザイルで懸垂して、そのあとザイルをつけてトラバース。再び懸垂20mでウドとのコルへ。少し東又谷側へおける。トラバースは枝づかみでかなり骨がおれる。懸垂地点もあまり安定がよいとはいえない。コルからウドの頭へは急な細く小さな二本の尾根にはさまれた三角形の雪壁がみえる。上部にキレットがはいていたので東又谷側の尾根らしきものに取り付き枝づかみに強引にのぼってゆく。ウドの頭からの下りは細い急な尾根で両側にきれているが、東又谷側のほうがやや傾斜がゆるい。ザイル2ピッチをだし、懸垂20mでそこを通過する。あとはコルまでかけおける。コルからは雪崩を心配しながら足跡をおって、尾根の側面をトラバースしてゆき、1,434mへ。あとは河原にそって三階棚滝手前の二俣まで行き、1,801mピークから派生してくる尾根にむかってトラバースをし、1,378mあたりでその尾根にはいる。尾根をくぐりきったあたりで日没となり、河原でやむなく幕営。

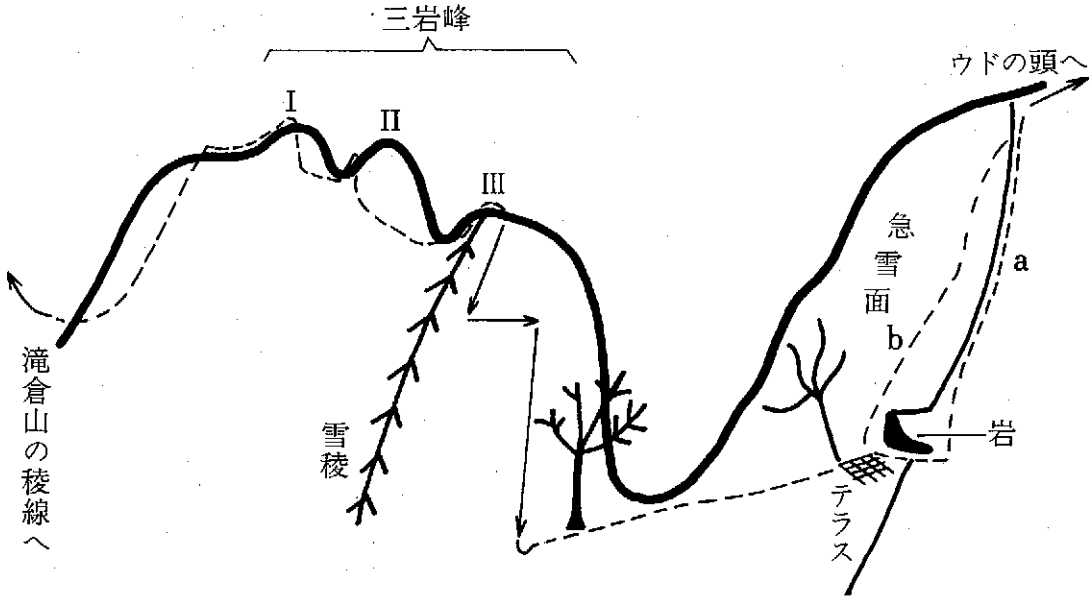
11月6日 ① 出発(7:50) - 取入口林道(9:00)

取入口で靴を脱いでみると房本の両足の指全部が紫色に変色しているのを発見。近くで工事の中の人にたのみ、バス停までマイクロバスでお

くっていただく。すぐ魚津労災病院迄タクシーで行くが8度の凍傷と診断され、家に帰ってから治療するように言われ、房本は特急で帰阪した。

(記 房本)

三岩峰付近ルート図



三岩峰の西側は急峻なブッシュ、東側は岩壁となって切落している。Ⅲ峰から西側へ10mのアプザイレン、10mのザイルトラバース、更に20mのアプザイレンでコルに着く。最後のアプザイレンは殆ど垂直で要注意。ウドの頭への登りは、木迄斜上し、偵察時には岩を廻り込んでブッシュの稜(a)のルートを探ったが、急雪面の端(b)のルートの方がキスリングの場合には有効(100mfix要)。

天狗尾根第1次偵察

期間 11月2日~11月5日

参加者 小松(L)、大石

11月2日 ●のち⊗ 大谷原(8:50)

一天狗尾根取り付き(10:20)-天狗尾根主稜(12:30)-1,980m(15:30)

天狗尾根の取り付きは荒沢出合より約200m上流で細い尾根の急登である。やがて細い尾根が吸収されゆるやかとなり、左にトラバース気味に登り、最後に右へトラバースすると1,450mのポコである。ゆるやかな登りを行くと主稜線に出た。1,980mより第一クロワールの偵察に出るが雪が多く途中で引き返す。

11月3日 ⊗のち① 出発(7:30)-第一クロワール取り付き(9:10)-同終了(11:45)-2,100m地点(14:30)

朝方吹雪の為、1時間ほど天気待ち。社会人パーティと神学大が先行していたので時間待ち。両パーティ共上部を越せず敗退してくる。下

部にトレースを付けてもらい助かる。第一クロワールを越すと細いリッジとなる。

11月4日 ○ 出発(6:30) - 第二クロワール取り付け(8:00) - 2,100m 地点(10:20)

第二クロワールに挑もうとしているのは我々だけである。しかし登ろうとしている尾根で表層雪崩が連続して、とても危険と思われたので敗退を決定。フィックスザイルを回収して昨日の天場にもどる。

11月5日 ○のち◎ BC(5:50)アタック - 天狗の頭(8:45) - BC(10:30) - 大谷原下山(17:00)

昨日怖い思いをしたので荷をかつがずに行くことにした。第二クロワールではトラバースに1ピッチ、尾根まで3ピッチザイルを出す。天狗の頭より引き返し、今日中に下山しようと大谷原を目指す。(記 大石)

### 天狗尾根第2次偵察

期間 11月23日～11月25日

参加者 草尾(L)、小松

11月23日 ① 大谷原(8:50) - 天狗尾根取り付け(10:25) - 1,850m (14:35)

取り付けはもちろんのこと尾根上もまったく雪はなく11月初旬とは全く異っている。小松の体調がすぐれず少し早いがテントを張る。

11月24日 ① BC(6:10) - 天狗の鼻(8:55) - 荒沢の頭(13:05) - 第二クロワール直下BS(17:20)

1日分の食料を持ってアタックする。登りは1クロで1ピッチ、第1岩峰で1ピッチザイルを使用した。荒沢の頭までで偵察は充分と考えて引き返す。下りは第1岩峰、2クロで計10ピッチザイルを出す。2クロを下った所で暗くなったためビバークとするが、星が輝き、寒いビバークとなった。

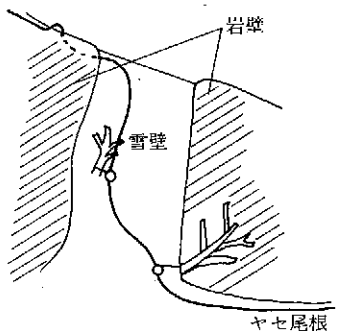
11月25日 ① 第二クロワール直下(6:50) - BC(9:10) - 大谷原下山(12:30)

今回の偵察は全くラッセルがなく、その上ブッシュも適度に雪に埋まり最高の状態であった。そのため小松の体調がずっと悪かったにもかかわらず、三日で終わることができた。

(記 草尾)

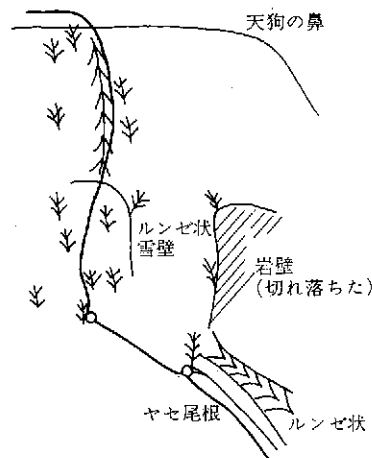
### 天狗尾根偵察

第1クロワール

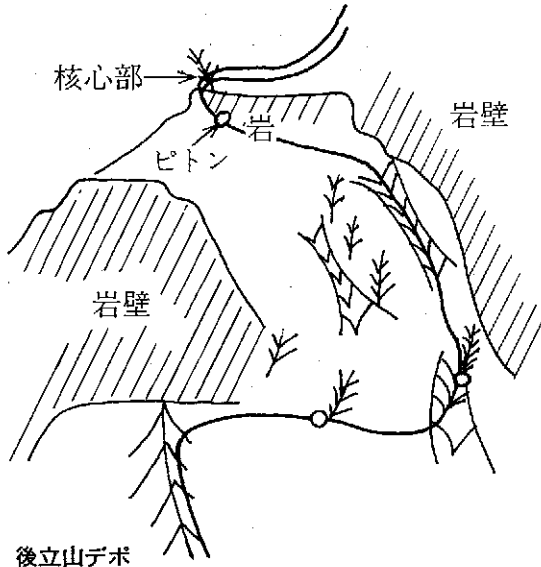


二本の木を支点にフィックスザイルを張り、なだれやすい雪壁を登る。

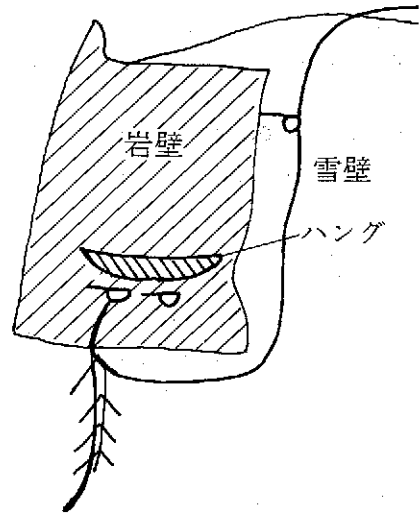
第2クロワール



## 第1岩峰



## 第2岩峰



期 間 11月2日～11月5日  
 参加者 草尾(L)、野口、湊本、佐藤、榊原  
 畑

(記 野口)

11月2日 ⊗ 扇沢(8:25)―種池(12:45)

人が多く入っていてトレースがきれいに出ていてスムーズに行けた。小屋の近くにデボした。

11月3日 ⊗ 種池(6:15)―岩小屋沢岳手前(15:00)

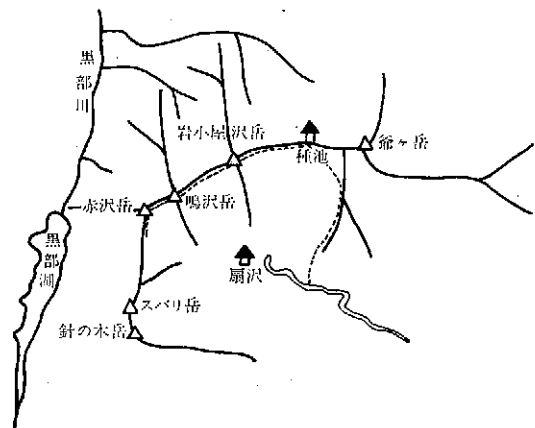
本日はトレースがなく腰までの苦しいラッセルとなり、かなり時間がかかってしまった。岩小屋沢岳の登りはじめの所で少し急な斜面があったのでフィックス2ピッチをする。

11月4日 ① BC(6:45)―  
 赤沢岳(10:40)―鳴沢岳(12:30)  
 ― BC(14:30)

雪が多く進まないため、予定変更で時間のある限りサブザックで行けるところまでアタックした。昨日と違って多少雪が固く鳴沢岳まで行けた。鳴沢の登りの岩でフィックスをする。

11月5日 ① BC(6:15)―種池(8:20)―扇沢(10:15)

岩小屋沢岳の下りでフィックスを2ピッチする。



扇沢周辺概念図

## 魚沼三山偵察山行

期 間 11月1日～11月4日

参加者 長谷川(L)、越智、大浜

11月1日 ●のち⊗ 大湯温泉(9:30)

—小倉尾根取り付き(10:25)—小倉山の  
2つ先のポコ(15:20)

大湯温泉をかなり強い雨の中出発して、林道を登り、さびれた温泉宿のある登山口に到着する。小倉の登りはきつく、夜行列車の疲労のため体にこたえる。標高1,000mあたりより積雪があり、小倉山に着くころには膝まで潜る程となる。登山口より7ピッチで小倉山を少し越えた所で幕営。

11月2日 ⊗ 出発(6:15)—駒ノ小屋(9:30)—檜廊下手前のピーク(15:30)

ひざまでのラッセル5ピッチで駒ノ小屋に着くも、何と屋根まで埋まっている。先々の不安はさらに大きくなる。稜線に出ればクラストしているだろうと思っていたにもかかわらず、相変わらず強烈なラッセルである。予定では中ノ岳までだがとても行けそうになく、檜廊下手前で幕営。

11月3日 ⊗ッ 出発(8:00)—中ノ岳手前(16:45)

高層天気図をとり、時間待ちして出発。ゴジラの連続で遅々として進まず。チョウセンボッカで進むが、悪天と雪の多さで中ノ岳へさえも着かない。8時間をたった2ピッチでひたすら歩いたが、結局今日も中ノ岳に着かなかった。

11月4日 ○ 出発(7:30)—中ノ岳から十字峡にのびる尾根の1,560mのピーク(12:40)—十字峡(14:40)—野中下山(16:00)

何とすばらしい快晴である。もう予備日もなく、核心のオカメノゾキを越えるのは不可能となった。退路を検討した結果、十字峡へ降りることにした。十字峡への降り口は雪壁の下りで、悪天では無理な下りであったろう。谷川岳の方もまっ白で改めて雪の多さに驚く。一気の下り

の後はアップダウンを繰り返し、さらに急な下りで十字峡へ。偵察の目標も成さず、ただただ歩いただけの苦しい山行であった。

(記 大浜)

## アイゼン合宿

於 木曾駒

期 間 11月21日～11月25日

参加者 浅井、村田、科野(L)、長谷川、  
本園、大石、越智、上月、佐々木、  
湊本、野口、大浜、畑、佐藤、榊原、  
松尾(OB)、渡辺(OB)

11月21日 ◎のち● 千畳敷(11:45)—天狗山荘(12:30)

駅から山を見ても雪は全くない。これではアイゼン合宿にならないと思えたが、計画変更もできないので入山した。予想通り山頂付近にも雪はなく、後発隊(浅井、村田、科野、大石、OB諸氏)の入山を待つ。夜間、大雨となる。

11月22日 ●のち○ 天狗山荘(6:00)—千畳敷(7:00～12:00)—天狗山荘(13:30)・木曾駒アタック—BC(16:20)

昨夜の大雨のためテントもすべて濡れた。特にピバーク隊はひどく、ひとまず千畳敷にもどり後発隊を待つ。後発隊と合流して再び天狗山荘へもどり、設営して2隊に分かれて木曾駒付近を歩きまわる。ガスで何も見えず、よいルートファインディング訓練となった。夜には快晴となった。

11月23日 ○のち◎ BC(4:30)—前岳(7:30～7:40)—天狗山荘BC(8:15)

雪上訓練へ出発(10:10)—濃ヶ池上

部のルンゼで雪訓（ 11：40～15：40 ）  
—BC（ 16：00 ）

すばやく撤収して前岳にアタック。昨日のピ  
パークで頭を強打した湊本の体調が悪く、彼以  
外で雪を求めて濃ヶ池へ向かう。アイゼン歩行  
訓練をしていると、大石・松尾OB・渡辺OB  
が入山してきた。松尾OBの華麗な滑落停止を  
見るにつけ、我々の実力のなさを痛感した。滑  
落停止訓練、ザイルワークをしてBCまで競争  
して駆け上がった。

11月24日 ○ BC—宝剣アタック  
（ 5：40～6：40 ）—BC・撤収（ 7：  
00 ）—木曾駒（ 8：20 ）先降隊と分かれ  
る—頂上山荘BC（ 8：55 ）—雪上訓練  
（ 12：10～13：20 ）—BC（ 14：  
40 ）

先降隊 浅井、村田、長谷川、本園、  
野口、佐々木、湊本、榊原  
木曾駒（ 8：25 ）—木曾駒高原下山（ 1  
0：45 ）

快晴の下、フィックスをまじえて宝剣をアタッ  
クして撤収して木曾駒に向かう。OBは千畳敷  
より下山。さらに木曾駒で2隊に分かれた。我  
々は頂上山荘付近で設営訓練して、その後少し  
下った所でフィックス通過訓練をした。なかなか  
微妙な岩場での訓練であった。さらにBC付近  
にもどり滑落停止訓練を行った。それにしても  
雪がないため砂の上を歩きまわっただけで物足  
りない。

11月25日 ◎のち● BC（ 4：00 ）  
—木曾駒高原下山（ 10：45 ）

低気圧にともなう前線通過のために即下山す  
る。全員ビッショリと濡れた下山であった。

（記 越智）



# 冬 山 合 宿

## 毛勝北方稜線

期 間 12月26日～1月10日

参加者 浅井(シ)、料野、長谷川、草尾、越智、上月

12月26日 ●のち⊗ 第2発電所(8:55) - 第4発電所(11:20) - 第5発電所(15:20)

魚津の駅はまだ暗く、雨が降っている。「日本一まずい店」の開くのを待って出発が遅れる。雨が雪に変わるところ、第2発電所を出発する。第4発電所まではトレースがあるがわかんを着ける。ここよりラッセルはもも位となり、場所によっては股まで沈む。第5発電所にて幕営する。

12月27日 ⊗ 出発(7:00) - 駒尾根取り付き(11:20) - 屈曲点(16:20)

第5発電所より道は右岸通しについているが、雪崩の危険が大きいので、橋を渡り左岸沿いに行く。阿部木谷の堰堤から本来の道に戻り、駒尾根に取り付く。のっけから急登とゴジラのミックスで苦しい。4時を過ぎても天場適地なく、1,000m付近の屈曲点で何とか幕営する。

12月28日 ⊗のち⊗ッ 出発(6:30) - 1,222m(13:20) - 1,250m(14:10)

湿雪でシュラフもびしょ濡れ。おもしろい気分を出発する。腰までのラッセルでまったく進まない。風も強く雪は降りしきるばかり。昨日、遅かったこともあり、早めにテントを張る。

12月29日 ⊙→⊗ッ 出発(6:40) - 1,700m付近(13:40)

雪ってはいるが、雪は止んでいる。小さなことでも気分がだいぶ違うものだ。昨日苦しんだ

ラッセルが嘘の様にはかどる。リッジ気味の所を気持良くとぼすが、1,700m付近で急に天気が崩れ始める。この先天場がなく、雪もしまつて稜線近しと思われるので、はやる心を押えつつ、今日はここまでとする。

12月30日 ⊙のち⊗ッ 出発(6:15) - 駒ヶ岳山頂直下(10:15)

今日も高雲りで、尾根の上部から稜線まで見える。どんどん高度を上げ、頂上まであと一歩というところで、ガスが出始め、登りきったものの降り口がわからない。視界なく、雪庇等危険なので、進行を断念し、幕営する。頂上だけあって、猛烈な風だ。シュラフにもぐっても寒い。

12月31日 ①のち⊙ 出発(8:00) - 1,763m(9:30) - 1,753m(12:15) - サンナビキ手前コル(15:35)

天気待ちするうちに、青空が広がり始めた。いそいで撤収し、毛勝に向かって走り下る。稜線でありながらひざまでのラッセルで、左側には大きな雪庇が張り出している。1,763m～1,753mにおいて1ヶ所、右側の切れ落ちた所をフィックス20mでぬける。サンナビキ手前のコルに幕営する。久々に充実した一日であった。

1月1日 ○ 出発(6:35) - サンナビキを越えたコル(10:50) - 滝倉(12:00) - 3岩峰手前(13:20)

元日好天。寒気はいぜんきびしいが、早いペースで駆けぬける。サンナビキ台地状ピークの下りは雪壁で20mフィックス。ここからが悪所で、稜線上のキノコ雪を右へ左へ巻きながら進む。滝倉へは一気の登り、急な雪壁で雪崩の危険あり。ウド手前のコルに着いた時には皆コテパテで、核心部を前に休養をとる。それにしてもここで3日も沈黙し、その後一度も太陽を見ないことになるとは思ってもよらなかった。

1月2日 ⊗ 沈

核心部のウドの頭であっただけに沈とする。動けない日はつらい。食うものも食えず、ひたすら寒さに耐える。長い一日だ。

1月3日 ⊗ッ 沈

1月4日 ⊗ 沈

冬型の気圧配置が続き、連日大雪警報が出て  
いる。毛勝隊もぜんぜん進行していない様だ。  
このままでは退却も考えねばなるまい。

1月5日 ◎のち⊗ 出発(8:20) - 3  
岩峰とウドの科尔(12:30) - ウドの頭  
手前(15:30)

雪は降っているが視界がきく。科野・長谷川  
がフィックス隊として先行する。3岩峰の下り  
はブッシュをつかんで下り、大木を支店に懸垂  
1ピッチから右へ絶悪のトラパース(フィックス)、  
さらに懸垂20mいっぱいまで科尔に降り立つ。  
ここよりアンゼンにはきかえ、ルンゼ右の樹林  
帯をフィックス2ピッチでぬけると傾斜も落ち  
て、再び深いラッセルとなる。ウドの頭手前の  
斜面をけずって幕営する。

1月6日 ⊗ 出発(9:45) - 平坑の  
科尔(12:45) - 少し上がった台地(13  
:30)

ウドの頭は右を巻く様に行くが、一箇所トラ  
パースにフィックスした他はノンザイルである。平坑  
の科尔は風の通り道でよくクラストしているが、  
少しはずれるとひどく沈む。ルートファイン  
ディングがむずかしい。風雪強く、視界がなく  
なってきたのでテントを張り、明日にそなえる。

1月7日 ⊗ッ 出発(7:00) - 西谷  
の頭(9:00) - コル(11:40) - コ  
ル(12:40)

昨日夜の天気図で今日の行動は決まっている。  
強風の中、撤収をすませ毛勝目指して出発する。  
視界なく、強烈な風だ。西谷の頭付近でラッセル  
交代の時、草尾がトレースを見失い、はぐれ  
る。西谷の頭を越えた科尔に待機し、浅井・長  
谷川が搜索に出る。2時間後に(雪洞を掘って  
いるところを)を見つけ、ひと安心するが、気  
が気でなかった。アイゼンにはきかえ、毛勝の  
登りにかかるが猛吹雪に断念。科尔まで戻り、  
幕営する。テントに駆け込む皆の目出帽や手袋  
はかちかちに凍りつき、まつげにはつららが下  
っている有様で、手指や顔に凍傷を負う散々な  
一日であった。

1月8日 ⊗のち◎ 出発(11:15) -  
2,028m(12:10) - 毛勝山頂直下

(16:00)

視界なく沈黙を決め込んでいたところ、9時  
頃より回復の兆しが見え、急ぎ撤収し、この時  
とばかり、最後の登りに挑む。雪壁は少レクラ  
ストした非常に良い状態で、キックステップ気  
味にぐんぐん高度をかせぐ。かなり急であった  
が、ガスの為高度感なく、勢いに乗じてノンザ  
イルで登りきる。山頂直下の台地にて幕営する  
が、沈みがちだった皆の顔にも、心なしか明る  
さが戻ってきた様であった。

1月9日 ⊗ 出発(7:45) - 毛勝  
(8:15) - 1,900mデポ地点(12:  
15) - 1,479m(15:45)

傾斜が急に弱まったと思ったら、そこが毛勝  
の山頂であった。指示板の雪を払いのけ、その  
中に「毛勝山」の標識が見えた時には感動のあ  
まり言葉を失った。記念撮影を終え、西北尾根  
へ向う。2,200mあたりまではクレバス多く、  
雪崩の危険にヒヤヒヤしていたが屈曲点を過ぎ  
てからは樹林帯のラッセルで、今度はゴジラと  
の戦いであった。デポを素早く処理してあつと  
いう間に1,479mまで下ってしまう。夕食と  
レーションを腹いっぱい食べ、久しぶりにぐっ  
すり眠る。

1月10日 ◎のち⊗ 出発(7:00) -  
宗次郎谷出合(9:00) - 東蔵(15:40)

今日中に下山しようとひたすらとばす。その  
速いことと速いこと。第5発電所の西北尾根隊の  
デポもほとんどそのままに東蔵目指してまっし  
ぐら。トンネルからは一昨日のトレースが残り、  
ヨタヨタした足どりながらも何とか部落にたど  
りつく。北国の人の心は温い。タクシーを待つ  
間、民家で酒をごちそうになった。魚津では休  
む間もなく入ってきた特急に飛び乗り、充実感  
に浸りながら、白くなった指の感触としびれた  
足の余韻を楽しんでいた。(記 上月)

#### 毛勝山西北尾根

期間 12月28日～1月7日

参加者 西尾(L)、小松、本園、大石、野口、

佐々木、神原、佐藤、畑

12月28日 ⊗ 東蔵発(11:00)  
-第2発電所(13:45)-林道の途中で  
幕営(15:45)

例年になく豪雪で、全く思うように進まず。  
第2発電所からは、かなりのラッセルとなる。

12月29日 ①のち◎ 出発(6:00)  
-第4発電所(15:15)

この日もラッセルに終始するが、途中から富  
大W・Vのトレースがあったので、助かった。

12月30日 ◎時々⊗ 出発(7:00)  
-第5発電所(12:30)-(13:45  
~15:15偵察)

第5発電所から取り付きまで、道路沿いに行く  
と雪崩の心配があるので、偵察に出る。

12月31日 ① 出発(6:45)-西  
北尾根取り付き 10:15)-デポ(14:5  
5)-取り付き(15:25)

発電所からは、川の左岸の尾根を越えて、堰  
堤を渡る。取り付きからの急登は、ダブルで、荷物  
をデポして、取り付きで幕営。

1月1日 ① 出発(6:55)-デポ地  
(8:15)-1,500m地点で幕営(12  
:05)-デポ回収に出発(13:15)-  
デポ回収(14:00)-帰幕(15:30)  
デポをそのままにして、1,500mまで上  
がってから、デポを回収しに行く。富山湾  
が一望できる快適な日だった。

1月2日 ⊗ 出発(7:20)-1,95  
0mにデポ(11:30)-帰幕(12:3

5)-出発(13:45)-1,900mで幕  
営(16:30)

最初からダブルで行く。1,950mにデポし  
たのだが、そこまでたどりつけず1,900mに  
て幕営。

1月3日 ⊗風強し 沈澱 11:00~  
12:15デポ回収

昨日のデポの一部を3人で回収に行く。こ  
の日は、夜ずっとテントラッセルで一睡もでき  
ず。

1月4日 ⊗ 沈澱

この日は、動けないこともなかったのである  
が、テントの位置を移すだけで、結局は沈澱と  
なる。

1月5日 ⊗ 出発(7:30)-デポ回  
収(8:35)-二重山稜付近にて引き返す  
(11:30)-帰幕(12:15)

北方稜線隊のサポートという意味で、2,15  
0m付近までアタック。明日からは下山。

1月6日 ⊗ 出発(8:30)-1,80  
0m地点(15:50)

胸までのラッセルで、取り付きまでは下れず。

1月7日 ⊗ 出発(8:10)-第3堰  
堤(11:50)-片貝山荘(14:50)  
-トンネル(17:30)

早く降りたい一心で、トンネルまで頑張る。

1月8日 ◎ 出発(6:50)-第2発  
電所(15:00)-東蔵(17:00)

かなり苦しい行程だった。最後までラッセル  
が続く。 (記 畑)

## 春山合宿

### <リーダー所感>

今回の山行は3年、2年、1年、各1名というメンバー構成で非常に気をつかった。2年にもう1人ほしかったところである。3人ということで赤岩岳附近ではザイルを出しっぱなしの状態になってしまいかかなりの時間を食ってしまったが、ザイル操作の点では充分すぎるほど経験できたと思う。しかし、卒直に云って、2年はまだルートファインディングや、どこでいそがねばならないかが良く解っていないように思え、かなりイライラさせられた。気苦勞の多い山行だったが、冬山で満足されず夏の岩中心志向だった1年生に、積雪期の山のすばらしさが解ってもらえて、上級生としては連れて行きがいのある山行だった。まだ計画では雪洞をできるだけ多用する予定であったが、途中、凍傷を負う者が出て結局3晩しか雪洞を利用しなかったが、ここ2、3年ずっと天幕にたよった山行を繰り返していただけて、よい経験になったと思う。私個人としては、雪洞の静かさとソフトムードが非常に気に入った。(記 科野)

### 表銀座縦走

期間 3月12日～3月20日

参加者 科野(L)、佐々木、畑

3月12日 ○ 第4発電所(7:50)  
—取付き(11:50)—第1ベンチ(13:10)

前日30人も入山者があったそうで終始きれいなトレースに導かれて助かった。

3月13日 ①のち② 出発(5:30)—  
燕山荘(9:45)

今日も終始トレースがついていて楽にアイゼンなしで登る。おかげで予定より1日早く燕山荘に到着した。山荘の横に雪洞を掘り始めるがすぐに障害物が出てきて失敗、第2雪洞を信州側の稜線下に掘る、斜面上なので除雪が楽、但し掘る者一人、除雪二人ということで作業効率の悪さが感じられた。このあたり改善が必要。土間で炊事をしたことで、中の湿度を上げずにすんだ。

3月14日 ⊗のち● 北燕岳アタック

出発(7:00)—

第6岩峰で引き返す(12:30)—帰洞(14:30)

朝、雪洞の入口が埋まり酸欠気味。第一岩峰は信州側の雪壁を登るはずだが、あえて左の岩場へザイルを出し佐々木トップで登る。第1岩峰の次のポコの下りは、畑トップでアンザイレン。3つ目の岩峰もあえて右の容易な雪壁を避け、左のシビアな岩場を科野トップで登る40m。4つ目の岩峰の下り右へトラバース気味に佐々木トップで40m、5つ目は、岩峰伝いに科野トップでトラバース。6つ目の岩峰以後は何もないようなので、時間も遅いので引き返す。帰りは第3岩峰、第1岩峰の下りで雪壁をザイルを出して通過。

3月15日 ⊗ 出発(7:00)—蛙岩(8:15)—吊岩と2678mの鞍部(10:00)

朝から風雪強く、遅々として進まず蛙岩は懸垂3mで通過する。ここで畑、佐々木が失敗するが大事に至らなかった。あまりの風の強さで大天井まで進むことを断念する。信州側の稜線下に雪洞を掘るが前回より丁寧すぎたためか、意外と時間がかかる。しかし中は風の音も聞こえず快適である。

3月16日 ◎のち○ 出発(6:15)—  
大天井岳(9:45)—大天井ヒュッテ(12:15)

昨日よりも天気は良いものの、風はやまず、かなり強い。そのため、大天井の登りは、何度か吹き飛ばされそうになる。このあたりから、佐々木の右手の親指、薬指凍傷。大天井の下り

は、クラストした西側斜面を下るが、トラバースを一度失敗、結局80mフィックスのシビアな下降。凍傷の治療のため大天井ヒュッテ冬期小屋に入る。

3月17日 ① 出発(6:15) - 赤岩岳、西岳のコル(16:30)

ヒュッテの下りを35mのトラバース、赤岳の登りに5ピッチ、次々と出現する岩峰を巻くのに12ピッチ、合計18ピッチのフィックス。但し実質12ピッチ程度の頂上岩峰の乗越が最大の難場で科野空荷でザイルフィックス。赤岩岳を降りたコルにテントを張るが風が強すぎ二ノ俣谷側に雪洞を堀る。しかし乾燥した雪の為失敗、結局そこを整地してテントを張る。

3月18日 〇 出発(6:30) - 西岳(7:10) - 水俣乗越(12:45) - 2595mの次のピーク(15:45)

無風快晴で暑い一日だった。西岳からは西へ降りる広いルンゼを6ピッチの240mのフィックス。ところどころ堅くクラストしていて、やばい所があった。水俣乗越の前の鞍部への下りにフィックス40m。このあたりから雪がクサリ始め苦労させられた。水俣乗越への下りはナダレそうな斜面を槍沢側から巻いて降りる。登りは急雪壁。次のボコの下りをフィックス20m。さらに懸垂20mで幕营地へ。

3月19日 〇 出発(6:30) - 肩ノ小屋(9:00) - 槍ヶ岳(10:30) - 肩ノ小屋(12:30) - 奥丸山(15:55)

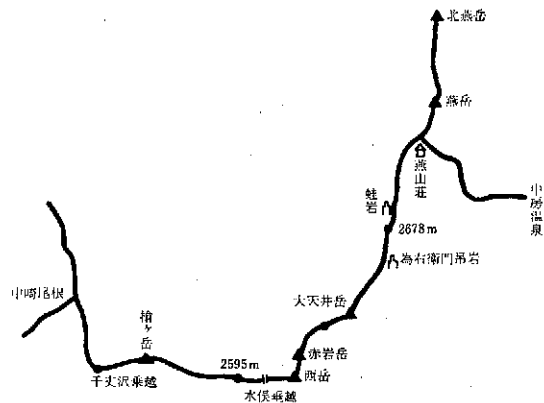
大槍ヒュッテまでは、所々難場もあるが、雪もしまっていて、快適に進む。肩までは、岩場まじりのやせ尾根で最後は槍を槍沢側からトラバースして肩へ。東鎌は、今回、ラッキーなことに無風、快晴状態で通過することができたが風が強ければ、かなり難しそう。槍は、夏の下降路を使用し、登りはノーザイル、下りは4ピッチのフィックス。肩から千丈乗越へは途中岩峰を槍平側にトラバースするが、ここが非常にシビアであった。千丈乗越からは尻セード、中崎尾根に入ってから、アイゼンを脱ぎ、ワカンをつける。

3月20日 〇 出発(7:20) - 新穂下山(13:00)

中崎尾根は、登りのトレースがあった。中崎山からの樹林帯の急坂はゴジラを避け、びしょびしょになりながら尻セードした。

(記 畑)

表銀座概念図



### 天狗尾根～蓮華岳

期 間 3月23日～3月31日

参加者 草尾(L)、小松、奥山、大石、上月、野口、榊原、佐藤

3月23日 ③のち① 鹿島部落(8:50) - 天狗尾根 取り付き(12:00) - 1720m(14:50)

大川沢は始めは左岸沿い、第1堰堤下流500mで渡渉し荒沢出合まで右岸沿いに進む。荒沢は雪に埋まり問題なく通過し、出合上流約200mから取り付く。1650m～1750mまでは天場はいくらでもあり1720m地点でテントを張る。

3月24日 〇 出発(5:50) - 第1

クロワール(8:45)ー第2クロワール(13:25)ー天狗の鼻(13:45)

1740m附近から急な登りとなり重荷では苦しい。第一クロワールはフィックス60m1Pで斜面の雪が割れたテラスでピッケルビレー。尾根の上までフィックス10m。尾根は雪底に注意が必要。第二クロワールはクロワール左のブッシュを登る。トラバースにフィックス40m、登りは60m+20m、下部の雪がくさりブッシュにも邪魔をされるため、ダブルをする。

3月25日 ⊗のち●

悪天の上、行程も順調なので沈殿とする。

3月26日 ①のち⊗ 天狗の鼻(5:40)ー小舎岩上部2620m(11:30)

コルまでの下りが複雑な地形の為少々いやらしい。コルより一段上の台地よりフィックス40m(木を支点)、そこからポコを1つ越えてその上のポコをフィックス40mでトラバースの後フィックス60mで急斜面をカクネ里側に巻き気味に登る。フィックス終了点は2460mで幕営可。そこよりクラストした急斜面を登り小舎岩。吹雪で視界が悪いため、第一岩峰の基部の2620m付近で幕営。

3月27日 ⊗のち○

[フィックス隊] 出発(10:30)ー第2岩峰基部(13:30)ーBC(14:30)

[デボ隊] 出発(15:00)ーBC(17:00)

天気が悪い為、天気図をとって待機、10:30視界が50m程になったのでフィックスに出る。第1岩峰基部をトラバース30mフィックス。急なルンゼから斜面をフィックス30mその上の小岩峰で5mフィックス、小岩峰ではブッシュを頼りに強引に乗越す。ここで第1岩峰は終わり幕営可、第2岩峰は右の雪面を巻いてフィックス60m。

3月28日 ○ 出発(5:50)ー第1岩峰上(8:10)ー第2岩峰上(9:00)ー北峰(10:00)ー冷池(14:00)ー種池(17:10)

ジャンクションピークより北峰まではナイフリッジが続く、北峰頂上直前は完全にクラスト

していたが風がないためフィックス無しで通過。南峰の登りは下部のクラストした急斜面で40m、トラバースで10m、頂上直下で40mフィックスする。それより種池までは夏道通し。種池でデボを回収。

3月29日 ○のち⊙ 出発(7:20)ー岩小屋沢岳(9:30)ー鳴沢岳(13:30)ー赤沢岳(15:05)

デボを整理した後出発する。途中鳴沢の登りでフィックス40m+10m。鳴沢より赤沢岳までは夏道通し。頂上は4人天3~4張ぐらいの広さでありテントを張る。

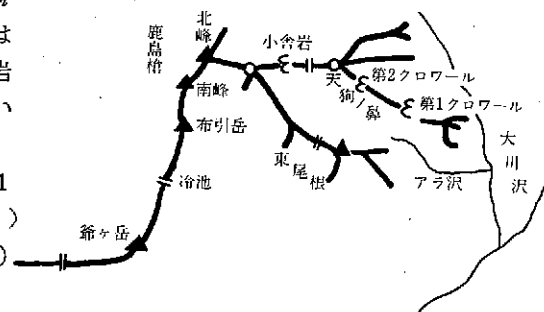
3月30日 ○ 出発(6:20)ースバリ岳(10:10)ー針ノ木岳(14:00)ー針ノ木峠BC(14:50) 蓮華岳アタックBC(16:45)

スバリの登りは見ためより簡単に登れる。頂上からの下りでフィックス20m、針の木の登りは雪面でフィックス30m+50m+40mで頂上に上がる。下りは上部フィックス20m程で扇沢側にトラバースで50m+40mフィックス、針の木峠より蓮華岳までアタック。

3月31日 ⊙ 出発(6:30)ー扇沢(8:00)ーゲート(10:00)

針ノ木雪渓が下れる幸運に恵まれた。雪崩を避ける為、気温の上がらないうちに出発。途中シリロードなどしながら扇沢に着く、扇沢よりゲートまで舗装された道を歩いた。(記 佐藤)

鹿島槍天狗尾根 概念図



# 索 引

山 名	年・月	頁	山 名	年・月	頁
————— 剣岳・立山・黒部 —————					
<無雪期>					
八ッ峰Ⅵ峰D フェース富大ルート	79.7	37	雄山東尾根	80.3	53
八ッ峰Ⅵ峰D フェース留大ルート	80.7	68	奥大日尾根～剣岳・立山	80.3	54
八ッ峰三稜偵察	79.7	39	剣 尾 根	80.5	59
八ッ峰北面	80.7	66	毛勝山西北尾根偵察	80.11	77
八ッ峰三ノ沢遠足	80.7	68	駒ヶ岳～ウドの頭偵察	80.11	78
八ッ峰～仙人池ビバーク	80.7	68	毛勝北方稜線	81.1	84
マイナースラブ	80.7	69	毛勝西北尾根	81.1	85
チンネ中央チムニー	79.7	37	————— 穂高・槍ヶ岳 —————		
～a バンド b クラック			<無雪期>		
チンネ左下・左方カンテ	79.7	38	横尾本谷左俣	78.7	10
チンネ左稜線	80.7	67	赤沢山クラックルート	78.7	11
チンネ左下～筑豊ルート	80.7	69	四峰正面壁北条新村	78.7	12
源治郎Ⅰ峰下部中央ルンゼ	79.7	38	滝谷第一尾根	78.7	12
源治郎Ⅰ峰上部名大ルート	79.7	38	西穂高ビバーク	78.7	12
源治郎ビバーク	79.7	39	滝谷ビバーク	78.7	13
源治郎Ⅰ峰下部中谷ルート	79.7	39	屏風岩東壁青白ハング鵬翔ルート	78.7	13
源治郎～仙人池ビバーク	80.7	66	屏風岩東壁雲稜ルート	78.7	14
下ノ廊下ビバーク	79.7	37	屏風岩東稜	78.7	15
下ノ廊下ビバーク	80.7	69	ジャンダルムTI フランケ	78.7	14
奥大日ビバーク	79.7	37	北尾根ビバーク	78.7	15
御前谷ビバーク	80.7	66	槍ヶ岳ビバーク	78.7	15
真砂沢遠足	80.7	67	滝谷P <sub>2</sub> フランケジェードルルート	78.7	15
本峰北壁L <sub>1</sub>	80.7	67	右岩稜古川ルート	78.7	16
本峰北壁L <sub>2</sub>	80.7	67	立山～槍ヶ岳	79.7	40
剣岳北方稜線	79.7	42	<積雪期>		
黒部川上ノ廊下	79.7	42	明神主稜	78.5	6
<積雪期>			大切戸偵察	78.5	6
赤谷山サポート隊	79.3	1	奥穂南稜	78.5	7
宇奈月～赤谷山縦走	78.3	2	間ノ岳尾根	78.5	7
剣岳八ッ峰	79.5	32	コブ尾根	78.5	7
剣御前デボ	79.11	45	曇岩尾根	78.5	7
奥大日尾根偵察	79.11	47	明神主稜	80.5	57
雄山東尾根偵察	79.11	48	コブ尾根	80.5	57
			徳本峠	80.5	58

山名	年・月	頁
西穂主稜線偵察(1次)	78.11	22
〃 (2次)	78.11	24
ブナ立尾根一槍ヶ岳	78.11	20
横尾尾根一槍ヶ岳	78.1	26
穂高主稜線縦走	79.1	27
裏銀座コース	79.3	29
北鎌尾根～岳沢	80.5	61
表銀座縦走	81.3	87

—— 後立山連峰 ——

<無雪期>

後立山縦走(鹿島槍～朝日)	78.7	16
白馬岳～親不知	79.10	44
後立山縦走(白馬～笠)	80.7	72
後立山縦走(白馬～鹿島槍)	80.10	76

<積雪期>

白馬岳新歓山行	79.5	81
後立山偵察(唐松～鹿島槍)	79.5	81
後立山偵察(遠見～鹿島槍)	79.11	46
白馬大池アイゼン合宿	79.11	50
遠見尾根～五竜	80.1	51
後立山縦走(遠見～鹿島槍)	80.1	52
天狗尾根第1次偵察	80.11	79
天狗尾根第2次偵察	80.11	80
後立山デボ(種池)	80.11	81
天狗尾根～蓮華岳	81.3	88

—— その他の山域 ——

<無雪期>

南アルプス縦走 (奥西河内沢～北岳)	78.7	17
南アルプス縦走 (北岳～茶臼)	79.7	41
南アルプス縦走 (甲斐駒～光)	80.7	70
大台ヶ原堂倉谷	78.10	18
大台ヶ原東ノ川	78.10	19

山名	年・月	頁
中央アルプス縦走(駒～越百山)	78.10	20
中央アルプス縦走(駒～越百山)	80.10	74
八ヶ岳(観音平～麦草峠)	79.10	45
越後三山～朝日岳縦走	80.7	71
大雪山周辺	80.7	72
八ヶ岳縦走(麦草峠～編笠山)	80.10	74
白山縦走	80.10	74
奥秩父縦走	80.10	76

<積雪期>

御岳アイゼン合宿	78.11	25
鋸岳～甲斐駒	80.5	62
魚沼三山偵察山行	80.11	82
木曾駒アイゼン合宿	80.11	82



## 編 集 後 記

時報の編集を始めて以来10ヶ月余り、諸先輩方の努力もあり、“やっと”というべき感じで発刊にこぎつけました。ここまで発刊が遅れたのはひとえに私の不手際で申しわけなく思っております。次号の責任者はこのような事がないようにしてもらいたい。

さらに各学年のリーダーは発刊直前ではなく、その年度内に記録の整理をしていくように心懸けてもらいたいと思う。報告書が単なる義務となり、いいかげんになってきている昨今、充実した記録を残し得るのはこの時報だけであろう。そういった意味ではこの時報も目的を十分にはたしえなかったのは残念であった。特に定期山行だけでなく、個人山行の記録も残していく必要があると思われたが、実際には何もできなかった。

しかし編集を通じて感じた事は意義あることばかりであった。各学年のリーダーはその1年の活動が十分満足のいくものでなかったことを巻頭でも述べておられるが、それだけに現役に対する期待をひしひしと感じたものであった。今後も現役とOBの交流を活発にしていくことがクラブの活動を高め、海外遠征も可能にしうるのであろうと思われた。また個人主義に走らないこのような風潮が大学山岳部の本来の姿であると確信している。

最後に、編集に協力していただいた、各OB、科野リーダー、山田部長に紙面上ではありますが、お礼申し上げます。

昭和57年4月3日

編集委員代表 越 智

編集委員 森 保知, 渡辺 治郎, 広田 雄彦  
科野 昌蔵, 越智栄次郎

発行所 大阪大学体育会山岳部 〒565 豊中市待兼山町1の1

印刷所 秀 栄 社 〒534 大阪市都島区片町2の7の21  
電話(06)853-5268



奥大日尾根より望む剣岳北方稜線